
LET`S家庭教師ヒットマン REBORNの世界へ！？

音無 ソラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LET、S家庭教師ヒットマン REBORNの世界へ!?

【Nコード】

N6356R

【作者名】

音無 ソラ

【あらすじ】

主人公である滝本厘はある日、冗談で「『家庭教師ヒットマンリボーン』の世界に行ってみたい!」と願ったら本当に神様に連れて行ってもらえることになりました。急にそんなこと言われても困るんだけど。しかも、死なずにトリップとか、ライバル役の人物っぽいんだけど・・・ま、いや。グッバイ、平和な日常!! そんな調子で厘はどたばたな非日常に巻き込まれることになった!!!

No. 0 LET、ストリップ!? (前書き)

駄文ですが、ぜひ読んでみてくださいな!

「こんなヤツでも小説書けるなら、自分も書けるだろう」と、自信をもてますよ。絶対に。

N o. 0 L E T、S トリップ!?

きっかけは些細な事・・・

本当にささいな事だった。

風も、音も、色も無いそこに。

何も知らない私は、つつたっていた。

「何処だよココ・・・」

見回しても、地平線もなく。あるのは、辺りを包み込む白い光のみ。

「この歳になって・・・迷子？」

それは、ぜひとも遠慮したい。と、自分で突っ込む。ああ、悲しいワ。

にしても・・・今回はそうとしか考えられないんだが・・・

そんな風に、自分の今後の未来を考えていると、

「やー、おめでとう。おめでとうおめでとう」

やたらにおめでどうを連呼する男がいきなり私の後ろで笑ってた。

「ッ！・・・だ、誰？」

合図もナシだったので、きっちり心臓が二拍停止した私。すぐに落ち着きを取り戻し、男をまじまじと見つめる。

銀っぽい髪をしていて、目は翠色。・・・珍しそーなパーツですここと。

・・・しかも、かなりの美形だった。

「ああ、オレ？」

私の視線に気づいたのか、その男は少し誇らしげに言って見せた。

「神だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あー、はいはい」

思わず同情の目でみてしまう。そんな様子に、男は叫んだ。

「なんだその目はっ！やめろっ、日曜朝にやってるスーパーマンとかみて、『僕、スーパーマンになりたい』とかいう子供に、母親が送る優しい目でオレをみるなー！」

「つつたつてなぁー」

私はガシガシと頭をかいた。

「初対面で神とか言われてもリアクション困るし、大体頭おかしいヤツしか言わないし」

「真実なんだよ・・・」

男はその場でしゃがみこみ、地に『鬱』という字を何度も何度も書く。

纏っているオーラは、あまりにも不憫なので、一応信じてあげる事

にした。

「はいはい神様神様顔上げてー。ごめんねー疑って悪かったねー」

「扱い雑だなオイ！なんも気持ちこもってねーな！」

と、痛いところをさされたが、まあ無視ということで。

「んじゃ、聞くけどさ。なんで私みたいな一般人がこんなトコにいるわけ？」

「ん？お前が行きたいつつたんじゃねーか」

空白。

そして、思考。

「・・・・・・・・まさか？」

さっきの・・・・五分前の出来事を思い出す。

私は、とある普通の学校に通う、1人の女子生徒。

ある日、そんな私はとあるマンガにハマった。

大好きで大好きで、とうとう「あの世界に行きたい！」と、おバカな発想さえもしてた。

でも、その言葉は本当に思いつきだったし、私だって本気にしてなかったのだが・・

二日ほど前に、書店でぶらぶらしていたら、とある本を見つけた。

本のタイトルは「必殺！馬鹿でもできる 神様への願い事」。

しかも、2000円もしていて、見るまでもなくインチキ本だった
が・・

私は・・・滝本^{タキモト}厘^{リン}は、つつい買ってしまった。

年寄りになったら、絶対詐欺にあう自信のある私は、その本で、

「家庭教師ヒットマンリボーンの世界へ行きたい！」

と願い、

そこに書いてあった、願い事のための儀式(?)をして――

「じゃあ、ホントにお前は神様で・・・ホントにリボーンの世界へ連れてってくれるの？」

「ホントだ」

あんなインチキ本で、ですか。

「ああ、あの本には、そんな力はないさ。だって、お前がトリップするのになにもかも、

———オレの気まぐれだしな」

にっと神様は笑う。その笑顔は、とっても輝かしかったんだけど・・

「ちょっと、聞いていい？」

厘^私も、にっこり笑顔で質問する。

「貴方のお名前は？」

「？オレは神羅^{シンラ}っつーんだ。よろしくな」

この状況で、付けたしみたいにいうのか、と疑問に思う神羅。

「ふーん。神羅、かぁ・・・」

厘は一言二言呟くと、神羅に向き直った。

「神羅クン」

「なんだ？」

「THE☆ボッコボッコにしてやんよ♪」

「!?
」

結論。

気まぐれは、最強の武器ですね☆みんな、きをつけよう!!

五分後。異世界へと旅立った、碧眼の少女のいた場所を眺めて、

サンドバックにされていた神羅は呟いた。

「女っておそろしーな・・・」

彼の怪我は、全治1ヶ月だとか。

めでたしめでた・・・し？

No. 0 LET、Sトリップ!? (後書き)

あまりにもヒドかったんで、編集してみたのですが・・・

やっぱり無理ですッ！そんな文才ありませんでした!!!

ということで、皆様のすばらしき頭脳で説明してください！

つまり、結論でいうと、主人公の厘は、死んでおりません。

こーゆー二次元作の小説では、主人公は転生するじゃないですか。

そして、主人公のライバルは、死なずにトリップしてきた人、みた
いな。

厘は、そのライバル役の経路で、リボーンの世界に介入します、的
なことです。上手く伝わりませんが。

6月 23日

No. 1 LET、S自己紹介

01 異世界へ飛び立った碧眼の少女

名前 .. 滝本厘

歳 .. 13歳だが、幼く見られる事が多い。

性別 .. 女

性格 .. 明るい。時々、かなり迷惑な性格でもある。

又夢。 いくつか冷静な性格になりたい！！と思うも、それは夢の

身長 .. 159 cm

体重 .. ロシアンルーレットらしい

誕生日 .. 10月31日 ちょうどハロウィーン

髪 .. 栗色。肩よりも少し長く、カールしている。常時は結んでいない。

目の色 .. 蒼い色

容姿 .. 儂げな美少女（黙っていれば）

備考 .. 甘いもの大好き。手が不器用で、家庭科が苦手。

身体能力は、案外高いらしい。

ファッション .. パンク系以外なら何でも着る

特技 .. 相手を怒らせる事

趣味 .. 寝ること。食べること。

02 世界を治める神

名前	.. 神羅
歳	.. 928歳（外見18歳）
性格	.. 気まぐれ
身長	.. 176cm
体重	.. 70?
誕生日	.. 覚えてねーな b y 神羅
備考	.. 以外に奉仕系。
趣味	.. 人間観察。

N o. 2 L E T、S 登校! ? (前書き)

プ
リ
ー
ズ
感
想
。
プ
リ
ー
ズ
文
才
。

No. 2 LET、S登校!?

今、

今、私の運命はこのカプセルにかかっている・・・!!

そこのアナタ。「運命」という言葉でだまされてはいけません。

ああ、しょっぱなから意味わかんない★

あの後。

「――」

気が付くと、私は見知らぬ部屋に、座り込んでいた。

見渡すが・・・特に変わったところは見られない。

橙色の近似色で統一されている、明るい部屋だ。

厘以外人はおらず、静まっている。

「もしかして・・・」

数秒考えて出した結論を、ふっと呟いてみる。

「私、不法侵入者じゃね？」

ここの部屋に入室した記憶はないが、かといって自分の部屋でもない。

ふほうしんにゆーって、犯罪ですよね？

そう思い立った瞬間、どっと汗が吹き出てくる。

確か、逮捕されると・・・3年以下の懲役または50万円以下の罰金だった気がする。

要らない情報をよりによって今思い出すのかな私、とか思いながら、

ひとまず人がいないか確認をとろうとすると。

ブーツ ブーツ

棚の上にあったケータイが鳴った。

きよろきよろとあたりを見渡し。

厘は、人の気配がない事を確認すると、鳴ったケータイを掴み取って開いた。

他人のケータイかも、という気持ちはない。

それどころか、

他人のケータイって気にならない？ 以外に。

とか思ってたりする。

プライバシーという言葉を、彼女は知らない。

羨ましい脳ミソだ。

‘ メール受信、1件
,

メールが届いているらしい。

厘はメールの中を見る。

‘こちら、神羅。厘、転生おめでと。’

「そりゃどーも」

自分のしる神様と、自分の名前が入っているので、礼を言う。

でも、なんで私宛なんだろう？

‘まず言つとくが、このケータイと、この家・・・てかマンションもお前のもんだ。一人暮らしだけどヨロシク。’

納得。不法侵入ではないらしい。よかった。

・・・にしても、神様はぽんぽんとマンション買えるご身分なのか。

お前は『家庭教師ヒットマンREBORN!』の世界に転生した。
どーせお前のことだし、原作キャラと関わりたいだろう？

だから、並盛中に通ってもらう。

「ずいぶん見透かされたわね私・・・」

まあ、そんなに悪い気はしないのだが。

気づいたら、私の服も並盛中の制服に変わっていた。

‘お知らせがある。

さつき、ケータイおいてあった棚の上を見てくれないか？，

言われたとおり、棚の上を見ると、

「カプセル・・・？？」

おいてあったのは、ガラスの瓶。中にはカプセルっぽいものが入っている。

‘それはただの薬じゃないぞ。

お前も、転生場所が漫画の世界だから、戸惑うこともあるかもしれない。

迷ったときはそれを飲め。

そいつはなんと言うか・・・そのカプセルは、『行きたい』と念じた場所に

肉体ごと行くことができるっていうか・・・どこで〇もドアのカプセルバージョンだ。

瞬間移動、テレポートつーヤツだな。

ま、大抵の事は俺が何とかするからな。俺に相談して来い。

移動手段としても使えるゾ。’

「おお・・・!!」

さすが、一応神様。便利グッズを所持してるらしい。すげえ。

「一応ってなんだよ・・・」

天界から見下ろしていた神羅は苦笑いをした。

「神様ってパネェ・・・」

私のつぶやきが、朝日に照らされた部屋に染みた。

ん？
朝日^{アサヒ}・・・？？？？

神羅の最後の一文は――――

‘っつーことで。遅れないように並中に行くんだな（・◇・）ノシ、

おそろおそろ、壁にかかっている時計を見ると・・・

遅刻ぎりぎりの時間だな。ヤバイな。

「なにが『ノシ』じゃこんチクシヨウ!!!!!!!!!!

恐ろしの風紀委員長にかみ殺されちまうじゃねーかよ!!!!!!!!!!」

女とは思えない、言葉遣いの荒さ。

神羅は、ルックスはいいんだから・・・と、ため息をついた。

「どうしよどうしよどうしよ・・・」

厘はぐるぐると部屋を回りだす。ワタシハ、バターニナリタイ。

1. このまんまいったら絶対に、風紀委員長様様にかみ殺される。

2. 私だって命は惜しい。どーせだったらこのまま欠席するか。

3. でも転校初日から欠席もアレだ。

「どうし……はっ」

思い出した!!

さっきの神羅からのメール。

‘このカプセルは移動手段としても使えるゾ、

「これだあああ!!」

家から並中に、このカプセルでいけばいいんじゃない??

「っほう! 私天才!!」

早速、わたしは瓶からカプセルを一粒取り出し……

目指すは並中、職員室前!!

ゴクンッ

飲み込んだ。

薄れゆく意識の中・

神羅！！これでレポートしてなかったら・・・

私、風紀委員長様様のリンチで死にますよ？？

もう、このカプセルに私の運命かかっていますからね！！？

そうして私の意識は闇へとダイブし————

「うえ！？！？」

ひんやりとする床に、わたしは座り込んでいた。

見回すと、さっきとは違う、堅く冷たい地面。

遠くで足音や笑い声が聞こえる。

そして、目の前には『職員室』というプレートとスライド式の扉。

「学校の職員室前」としか言い表せない。

ということは――――

「テレポート、成功・・・したのかな？」

ほっと胸を撫でる。『遅刻して風紀委員長にかみ殺されEND』という悲惨すぎるセカンドライフは免れたらしい。

そしてそお・・・とあたりを見回す。

この決定的瞬間を誰かに見られてしまつては大変だ。

が、人の気配もない。人影も見当たらない。

しやがみこんでいるので、職員室からも見えていないようだ。

目撃人は1人もいない・・つと厘はほつと胸をなでおろし、
がらがらつと職員室の扉を開けた。

が。

厘は知らない。

気配を消して、窓の向こうからこちらを見ていたひとつの影があったことを。

厘は知らない。

「あの生徒・・・面白そうだね。」

好戦的に笑う、風紀委員長様様がいたことなんて。

No. 3 LET、S退学!?

「滝本厘です。よろしくです」

頭を下げる私。顔が見えないように深々と、深々と頭を下げる。

だってだって・・・

顔を上げると、さわやかスポーツ馬鹿（失礼）とか、
サ○ヤ人の（かなり失礼）髪型のマフィアボスが視界に入るんです
もん！

もう顔がにやけてます。倒れそうです。

そう、私のクラスは

1－Aなのです！！！！！！

びば並中！！びば1－A！！（意味不明）

私だってがんばったんだよ？

「同じクラスだああ！！！」と叫びだしそうになるの、
今めっさこらえてんだよ？？

だけどさ。

なんでよりによってツナの席の斜め後ろなんですかッ！？

なんでそんなに席が近いんですか！？

嬉しさと興奮で今にも踊りだしそうだッ！！

ランチですかコレは！！そうですかッ！！

「ごほっ ごほっ」

こらえていたものが咳になり、クラスに響く。

クラス全員の視線が痛い。

まあ、突然席に座った途端、顔真っ赤にしながらむせる転校生は異様だからな・・・

すると。

「大丈夫？ 滝本さん」

隣の席の女の子が優しく背中をさすってくれた。

YOU ARE MEGAMI。

女の子のおかげで、咳は止まったように思えた……。が。

「ありがと……。ガハッ」

結果的に、余計にむせた、まる。

「ちよっ！？ 滝本さんどうしたの！？」

女の子——— 黒川花がびっくりしたように言う。

『どうしたの』 じゃないッスよ！！

アナタ様の大人の雰囲気です直クラッと・

転校ってか転生早々、生きていけるか心配です。（呼吸困難で）

すると、未来のマフィアンボスⅡ沢田綱吉が振り向いて。

「えっと・・・大丈夫?？」

「ふがっ／＼／」

これを、「命の危機」といいます。覚えておきましょう。

なんとか咳も止まり、1時限目が始まる。

えっと・・・理科のテスト返し、だっけ。

昨日やったテストらしいから、私はやってないか。関係なっしんぐだね。

そう思うと、急にまぶたが重くなってきたや。

ああ・・・睡魔と戦わずに寝るって1番気持ちいいよね・・・

厘は転校早々、机に突っ伏して眼を閉じようと・・・

「川田」

「はい」

「栗原」

「はい」

ん？何かを忘れている・・・

「近藤」

「はい」

「沢田」

「はい」

？っ

そうだったああ！！

理科のテスト返しといえば、

標的4の『退学クライシス』だ。

私がトリップしたのは単行本の1巻の真ん中らへんらしい。

よし。滝本厘。

リボーンワールドを実写版で拝見させていただきます。

青い顔をしたツナが、もうすぐ定年のおっさんこと根津のところへ歩き、

テストをもらおうとするが。

すかつ

ツナの手がテストをかすめ、根津は『仮定』の話をする。

「あくまで仮定の話だが・・・クラスの中で20点台を取って、平均点を著しく下げた生徒がいるでしょう。エリートコースを歩んできた私が推測するに、そういう奴は学歴社会において足をひっぱる“お荷物”にしかない。そんなクズに生きている意味があるの

かね？」

26点のテスト用紙を根津はわざと見せた。

「ああ、惜しい。あと1点とれば『^{ツナ}27』になったのに」
心ッ底どうでもいいことをつぶやく。

あとは原作どおりだ。

獄寺が教室に入り、

根津が『あくまで仮定』の話をし、

獄寺が「十代目沢田さんへの侮辱は許さねエ!!」と根津の首をしめ。

厘は廊下の曲がり角で息を潜めていた。

「こいつは形状記憶カメレオンのレオン。気配をけしていたから気づかなかっただろうが
ずっと頭に乗ってたんだぞ。———よう、いるんだろ、滝本厘」

さすがアルコバレーノ最強のヒットマンというところだろうか。

名前を知っているのも1—Aで聞いていたんだろう。

私は曲がり角から姿を現し、リボーンとツナに近づく。

「レオンは気づいてたよ！つか、滝本厘って転校生のあの！？」

ツナの隣まで移動すると、私は笑った。

「綱吉くんだっけ？『厘』って呼んでもらってokだよ」

微笑みながら、脳内で、興奮と奮闘している厘。

「り、りん・・・？オレのことも、つ、『ツナ』でいいよ」

「・・・どれもすぎじゃね？」

ツナのあわてっぷりも見事だが、

私の心臓の運動っぷりも見事だ。

「ん、このコ、ツナの弟？」

私はリボーンを手で示し、わざとボケてみた。

「えっと、その、それは・・・」

「オレはツナの家庭教師、リボーン。ツナを立派なマフィアのボスにするために、日本に来たんだぞ。」

「ま、マフィア・・・」

くらっと、眩暈。

もう少し先で出てくる少女、三浦ハルの気持ちも分かる気がする。

リボーンは、漫画越しに見るより＋30%可愛かった。

そんなかわいいベイビーの口から、マフィア、なんて言葉が出てきたら、

はつきりいって異様だ。

「ちょ、リボーン！ 滝、じゃない厘、困ってるじゃねーか！」

「大丈夫。びっくりしただけ」

厘は笑って、しゃがみこむ。

「こんにちは、リボーンくん。厘ってよんでね」

簡単な挨拶をし、

リボーンのほっぺを触った。

とろけるようなすべすべのほっぺ。癒されるゝ（ハート

美容液とか使っているんだろうか・・・？

商品名とか、ぜひとも教えてもらいたいね、ウン。

「10代目、こっちッス」

もう一つの消火栓から獄寺が出てきた。

「リボーンさんに殺しのイロハをご教授していただいてたんです。」

ぷにぷにぷにぷにぷにぷに・・・

リボーンの頬をつつきつつける厘。ソレを見かねた獄寺が、

「おい、転校生！リボーンさんから離れやがれ！！」

「チッ」

厘はしぶしぶ突くのをやめた。

が、少し獄寺を睨む。

・・・コイツ、ぜってー私の敵だネ。

勝手に、敵宣言もしていた。

こっからも原作どおり。

暫くすると、爆発音。

「わお、マジでやってるう」

厘は暢気につぶやく。

他人事っぽいつて？

だって私に関係ないもん。

「ああ・・・もーだめだあ・・・」

タイムカプセルも埋まってないし絶対退学だよ・・・
京子ちゃんとお別れだよ・・・」

ツナがヘタツと座りこんだ。

すると、その額に銃口が向けられる。

「獄寺はそう思っ
てないぞ。
退学にならない方法があるはずだ」

引き金は引かれた。

「!?!」

リ・ボーン
「復活!!!!」

死ぬ気でグラウンドまっ
ぷたっーっ!!!!!!」

死ぬ気になったツナは風のようにダダダダダっ
と奔っていった。

「・・・・・・ツナ、怖あい」

厘のふざけた言葉は、爆発音に混じって、誰の耳にも届かなかった。

厘は二階の廊下の窓からソレを見ていた。

外から聞こえるのはどっかーんばっかーんという・・漫画だから許される音。

「15年のカプセルは出てこなかったが、代わりに40年前のカプセルが出てきたぜ」

獄寺が、40年前の根津の、ひじょーに悪いテストを見せて、事は終わる。

厘は荒地と化したグラウンドをみて、独り言をつぶやいた。

「派手にやったなーあの人たち」

そう。独り言のはずだったのだ。

「本当だね。」

「うはっ!？」

後ろの方で、ちゃきつと金属音がして。

首筋に冷たい金属棒が当てられた。

そおっと後ろを振り返ると。

分かったこと1。

この金属棒は、トンファーっぽいです。

分かったこと2。

後ろに、恐ろしの風紀委員長サマがいました。

命の危険、再び、のようです。いや、本^{マッ}気で。

No. 3 LET、S退学!? (後書き)

長いです・・・!!

あきらめた人、絶対いるはずです。

ここまで到達した人は、精神力がすごい人です。

あなたは選ばれし人です!!! ↑

これからは、コレよりすこし文字数が少なくなると思います。

作者的に、長いのはあんまり好きじゃないんで。

大体、200文字前後で屋低期待と思いますんで。

これから。どーかお願いします!!

8月10日

No. 4 LET、S命の危機!?

「あの・・・」

「何だい？」

「えっと・・・首のトンファーどかしてもらえると、とーってもありがたいのですが」

「無理」

「即答!?! しかも拒否!?!?」

普通に会話をしているように見えるが、片方の女子生徒はガタガタ震えている。

この風紀委員長様こと雲雀恭弥だって、厘がこの世界にトリップしたいと思った1つの理由だ。

カッコイイから。

並中に転校したら、雲雀サンの「咬み殺す」とかをコッソリ聞きたいなーとか思ってたのだが。

まさかの標的、私ですか。そうですか。

というか私、雲雀サンにトンファーを向けられるほど、変なことをした覚えはないのだが。

・・・増しては、殺気がびんびんですし。

「私、なんか悪いことしましたっけ・・・？」

まずは原因を聞こう。なんとか誤解を解きたい。

別に仲が良くななくても良いけれど、殺気を向けられることはぜ
ひとも避けたい！！

私は一般ピーポーなんだっ！！護身術なんて知るワケがない！！！！！！

「グラウンド、荒れてるね」

「ですね」

「こんなことしたの、君のクラスメイトだよね」

「・・・ですね」

「それが理由」

でS・・・。

「何故^{なぜゆえ}につつつ!?!?」

突如、叫んだ標的（私）の首に当てたトンファーに、力をこめる雲雀。

雲雀恭弥は並中を愛しているんだっけ？

たしか風紀を乱すものは容赦なくかみ殺してたはず。

でもさ。

「私、ぶっちゃけ関係なくないですかっ!?!?」

「ウルサイね、君」

「命が惜しいんです!!!!」

クラスメイトのせいでボッコ×2にされるなんていうのは理不尽じゃないか!?

グラウンドをあんなにしたご本人達!! ツナや獄寺に言えよっ!!!!

「クラスメイトでしょ? 責任とってよ」

「連帯責任ですか!?! ってうわっ!」

クラスメイトというだけでご臨終となるENDは想像しておりませんでした。ハイ。

とっさに避けると、首を押さえてるもう片方のトンファーが厘の頬を掠めた。

その頬に、赤く細い線が浮かび上がる。

「ひいっ」

「避けるなんてすごいね。」

「でしょ・・・?」

にっこり笑おうとしたが、どうしてだろう。顔の筋肉がちっとも動いてくれない。

すると雲雀は薄く笑って、首筋を抑えていたトンファーを外した。

「君、面白そうだね。じゃあ、始めようか」

「ん、何を、つつーかめっさ殺気が痛いのですが」

トンファーを構える雲雀。

「行くよ」

「え、ちょつま、タンマツ！」

願いは虚しく・・・

ガキンッ

金属の凶器は壁にあたり、その壁にクレーターができる。

「うひょっ!!?」

一撃で、クレーターできるんですね。知りませんでした。

0.0001秒で、この一撃が自分の体に当たったら、というシュミレーションをし、

結果。

もし、これがBボタン連打してるんだろうねっ!!

凶器を持った人の相手なんかしてられっか!!

しかし、狩られる方の足は、恐怖で上手く動かず。

「逃がさないよ」

「逃がしてください、私はこの世に未練がある!!」

駆る方も、追って来る。

こうして、二人は学校中を走り続け・・・

足を止める。

気がつくと、屋上に来ていた。

「諦めたの?」

何故、雲雀サンはまだまだ余裕っぽいんですか!?

息切れが激しく、足だってもう痛い。

「諦めたくはなかったんですけど、足が動かないんです・・・（ハアハア）」

ニヤリと笑った雲雀はためらいもなく。

「じゃあ、黙ってかみ殺されてね」

トンファーを振り上げ、振り下ろした。

そして、結果。

ガアンッ！！！！

「痛ああああああああああ！！！！」

私は両腕をおさえて叫んだ。

「抵抗しなきゃ良かったのに」

ごろごろと、痛みで床を転がり続ける厘。

「だって貴方、カンペキ頭狙ってましたからね!!」

雲雀もやれやれと、ため息をついた。

賢明な判断だったと思う!! いや、思いたい!!

あの時抵抗しなかったら、運悪ければ1日目でトリップ生活が終わるところだった!!

しかしながらも、少しは反省する。

「鞆が何かで防げばよかった・・・」

トンファーと、クロスさせた両腕が激突したのだ。

痛いどころの騒ぎじゃない。

黒アザ以上になっていると思う。

しかも、制服が夏用だから人目に触れるだろう。

「女の子に対しての遠慮というものがないのですか？」

「女だったの？」

「そっからですか!？」

「そんな事より」

「私の性別、軽く受け流されました!!」

雲雀は私の必死の論弁をすっかり無視し、笑って言った。

「君さ。風紀委員に入りなよ」

「無理」

きつつぱりと断る。

今、私は体も心もくたくただ。

風紀委員に入りでもしたら、精神的にも肉体的にも死んでしまう!!

が。

「うん。決定」

「タイム! 私断りましたよね!?! 『無理』って言いましたよね!?!」

「決定事項だし」

「本人の承諾、無視ですかっ!?!?」

「君、さっきからウルサイね。高血圧?」

「よけいな世話だ! つつーかまじめな顔して心配するなっ!」

夜。

「もう元の世界に帰りたい・・・」

ボロボロになった私は、初日から転生したことを後悔していた。

No. 4 LET、S命の危機!?(後書き)

雲雀さんと、やっと絡ませました・・・疲れた。

N o. 5 L E T、 S 連行!?

翌朝。

「今日こそは絶対に遅刻しないもんっつ!!」

昨日の失敗はしませんっ。

私は、通常時間に家を出る。

私……カンペキじゃね?

しかし、その日に限って、不幸は訪れた。

「やあ、滝本厘」

「うげっ」

・・・一番聞きたくなかった声が聞こえた。

というか、なんで私の名前知っているんですか？

「調べたに決まっているじゃないか。他に何があるの？」

さすが風紀委員長様。

「って、私の心を読まないでくださいっ！」

「君の考えてることなんてお見通しだよ。君の頭はすっかすかだね」

「ぐさあ」

私の胸の方から、グサリという矢が突き刺さる音が聞こえたのは、
気のせいだろうか。

「つーか、なんでココにいるんですか？」

「渡したいものがあってね」

学ランのポケットから取り出したのは、

-
-
-
-
-
-

「丁寧にお返しさせていただきます」

「何で？」

「いないから」

「受け取りなよ」

「ぜっつつつたいにやです」

ソレは。

風紀委員の「風紀」と書かれた腕章だった。

「第一、私風紀委員じゃないですし」

「昨日承諾したじゃない」

「してません」

「僕を誰だと思ってるの？」

「風紀委員長です。つか、いきなり権力を盾にしてきましたね」

「言ってくれるじゃないか」

「はい、トンファー出さない。しまってください。ついでに殺気もしまってください」

「うん、いい心構えだ」

「今、殺意というものが芽生えました」

静かにキレル厘。

雲雀
コイツには口ゲンカでは勝てないことを理解した。

・・・決して肉体的なケンカも勝てないのだが。

「まあ、君がなんと言おうがもう決まってるよ。

校長にも言ってるし」

「THE☆権力ですねコンチクショウ」

「ま、応接室きてくれない？」

「どうして疑問系なのに断れないんでしょうか・・・」

私は雲雀に連行されるように応接室に連れられた。

・・・警察に逮捕される犯人のキモチが、わかってしまったような気がします。

「いいにおい・・・」

応接室に、アッサムの香りが広がる。

雲雀は紅茶を持ってきた。

「雲雀」

「といひかなんで君も僕の名前知っているの？しかも呼び捨て？」

「世の中、知らなくていいことはたくさんあるんですよ」

「意味が分からないよ」

雲雀は、ハア・・・とため息をつく。

「あと、今日の放課後、応接室に来てね。風紀委員長命令」

「その前に、なんで私は風紀委員に入らなきゃいけないんでしょうか」

「成り行きで」

「なんか、貴方に敬語使うのが馬鹿らしくなってきました。

というか、なにが『成り行き』ですかこのヤロー。

きちつと説明しやg・・・ゴホン、説明してくださいませ」

「今少し地が出たね」

雲雀は、少し沈黙をおいてから、

「面白そうだったから」

「は？」

今日の本音。

まだ湯気が立つ紅茶を、雲雀の顔面にぶっかけたいです。

まあ、カクカクシカジカで、私^{ワタクシ}滝本厘はめでたく（？）風紀委員に

なりました。

応援、よろしくお願いします。

No. 5 LET'S 連行!?(後書き)

ぐだぐだっすね。。。。

まあ、いいんです。どーせ編集したって、それは変わりません。

この小説は、そーゆー運命なんです。

でも、これからも（恋愛感零、ギャグなし、シリアスなし、あるのはグダグダのみの）この小説を、見捨てずにどうぞよろしくお願い致します。

No. 6 LET、S自殺・・・未遂!?

「クソッ なんで私が風紀委員なんて・・・クソッ」

応接室を出てから、厘はぶちぶちと毒づいていた。

八つ当たりで、近くの壁をゲシゲシと蹴ってみる。

はっきり言って、ハタからみたら変人だ。

時は流れ、屋上で。

カキ――――ン

「たーっまやー」

厘は、空に向かっていくボールを眺める。

只今、標的5の『山本 武』。山本とツナが屋上からダイブ★する

お話だ。

体育の時間。山本が特大ホームランを打つ。

「ナイス山本！」

「さすが野球バカ！」

「たけしー」

「すてきー！」

チームからは歓声仲間が上がり。

女子からは黄色い悲鳴があがる。

「いいご身分ですね。ったく」

ぼそっとつぶやく厘。

「山本武。

ヤツの運動能力と人望は、ファミリーに必要なだな」

リボーンが、双眼鏡を持ちながら言った。

「そう思わないか？厘」

リボーンは、隣で観戦している厘に聞いた。

厘はリボーンと、体育の授業をさぼる・ごほん、見学していた。

「うーん。なんかなあ・・・」

言葉を濁す厘だったが、やがてきっぱりと、

「顔もよくて運動できて人望もいいとなんかムカツク」

正直は一番である。

「おめーのせいだぞダメツナ！！」

「トンボがけ1人でやれよ」

試合は終わった。疫病神^{ツナ}のいるチームが敗北、というカタチで。

「んじゃね、リボーン君」

厘は教室に戻ろうとするが、

「待て」

リボーンに呼び止められる。

「渡したいものがある」

今度こそ、風紀委員の腕章なんかじゃない、全うなものだと願いたい。

次の日の朝。

私は屋上へ向かう。

死を決意した山本に会いに。

「よう、山本！」

「!」

フェンスの向こう側にいる人影に声をかける厘。

厘は、給水塔の上で人影——山本を、見下ろしていた。

山本が気づくまで、声をかけないつもりだったが、山本はフェンスの向こうに突っ立ったまま20分以上気づかなかったので、じれったくなって声をかけたのだ。

「なんだ、滝本厘か」

「お、名前。フルネームで覚えてくれたの?」

「んまあな」

・・・いやいや、褒めてねーんだけど。

一言二言話した後、本題に入る。

「んで?なんで山本、フェンスの向こう側にいんの?」

「・・・」

沈黙する山本。

「飛び降り自殺でもする気なの？」

「……止めないでくれよな」

山本はガシガシと頭を掻く。

「オレさ、最近野球が全くダメなんだわ。守備も、打率も……」

その上、大事な右腕も骨折しちゃったんだ。

野球しか取り柄のないオレなんか、死ぬしかねえだろ」

背中で見えないけれど山本の右腕には、包帯で巻かれていた。

……なんだか私に言ってるみたいだけど、

私には、山本は自分に言い訳しているようにしか聞こえない。

ハア、と溜息をつく私を覗き込むように、山本は声をかけた。

「滝本？」

「そんなに死にたかったらさあ・・・

――さっさと死んじやいなよ」

「――ッ！？」

厘はいつもの良く通る声で。

突き飛ばす様に言い放った。

太陽の光が、二人の頬を照らし、風が、二人の髪や制服を靡かせる。

しかし、二人は時間は止まってしまったように身動き一つしない。

先に、沈黙を破ったのは山本だ。

「今、何て・・・？」

「止めてほしかったの？ごめんね。」

私はアンタを止めれる、キレイ事を言えるような良い人間じゃないの」

そして、ヒトの不幸に情をかけることができるほど、デキた人間でもない。

厘はやれやれ、と首を振ると、

「アンタが無様に死ぬのも、生き延びるのも自由。私の知ったことじゃない」

そう言って、山本に背を向け屋上を出た。

帰路に着く私。

『つむじ育毛スプリング弾』。あれは見物だったネ。

今日を振り返りながら歩を進める。

「しかし、どーすっかなー」

上を見上げる。

空は、いつものように青かった。

リボンから貰ったソレは・・・

「ま、機会があれば使おっかな」

厘は一人で満足そうに、妖しく笑った。

すれ違い様に、厘の笑顔をみた中年の主婦が厘と距離を置いたのは秘密である。

N O. 6 L E T、S 自殺・・・未遂! ? (後書き)

ぐだぐだですね、相変わらず。

だから、この小説、下のほうに埋もれちゃうんですね。

・・・涙出てきました。

8月17日

N O. 7 L E T、S ファミリー試験!?? 前編

それは、昼のこと。

「ね、滝本さん。一緒に昼ごはん食べない？」

後ろを振り返るとツナの想いの人、

笹川京子がにこにこ笑っていた。

そりゃあ、天使の微笑みで。

言わせてください。

めっさ可愛いです!!

健全なる私（ちよい疑わしいところもあるが）でも、ね、アレだね。萌えというものね。

「い・・・いいんですか・・・？」

緊張のあまり、それはそれはお間抜けな声が出た。

「滝本さん、そんなに堅くなくてもいいのに」

京子の隣で、黒川花が大人っぽく笑う。

「じゃあ・・・お言葉に甘えて・・・」

赤くなった顔で、厘はにへらっと笑った。

「ねえ、そういえば滝本さんはどこから転校してきたの？」

京子ちゃんが、屈託のない笑みで尋ねてきた。

さあ困った。

まさか「異世界からです」なんて言えないし。

言ったら言ったで頭がオカシイ子かと思われてしまう。

「うんと、隣町から」

・・・嘘をつくのには、こんなに罪悪感を感じるのは初めてです。

「そーなんだ・・・あ、私達、厘ちゃんって呼んでいい？」

「いいよ。そしたら私も京子ちゃん、花ちゃんってよぶね」

「「もちろん」」

にっこりと微笑む二人。

「ぐっ」

すると、悲劇は起きた。

お弁当の卵焼きが、気管支の方に行ってしまったのである。

「うがッはッ」

吹き出しそうになるのは阻止したが、むせ込む厘。

二人は、急にむせる厘を驚きの目で見る。

「ちょ、アンタどんだけむせる人なのよ」

花ちゃんが呆れたようにいう。

「え、ごめんなさい……」

萌パワーに勝てなかったただけなんです・・・。

可愛い女のコ二人に微笑まれたら、生きてられないに決まってるじゃないですか・・・。

「(って私、とっても変態っぽいんですけど・・・)」

とっ、とにかく、ツナの気持ちがあっても分かったランチタイムでした☆

放課後。厘は、ツナと一緒に学校のプール場に来ていた。

「つつーわけで獄寺を納得させるためにも、山本のファミリー試験をすることにしたんだ」

リボーンはプールでトロピカル★な雰囲気存分に味わっている。

「オレが納得できーん！」

山本はクラスメイトだぞ、友達だぞ！お前達の変な世界に巻き込まれて！」

結局、少し先の未来では、山本も巻き込まれるのだが・・・。

リボーンは、ツナの論弁に答えず、さらっと言い放った。

「もう獄寺に呼びにいかせたぞ」

「なんだってー！！？」

ツナは素っ頓狂な声を出して、グラウンドへと走っていった。

「あははー。ツナ、大変そうだなww」

厘はハハハッと他人事のように笑っていたが。

それは、リボーンの次の一言によって玉砕した。

「何お気楽そうに笑ってるんだ？ お前も受けるんだぞ」

なんだと？

「待つ、待てっ！そんなの聞いてませんがッ！？」

「当たり前ーだ。今言っただからな」

「大体私、裏社会で生きるつもりないんだけどッ！！？」

「おめーは、オレがマフィアって事知ってるんだ。

受けないっていうのなら、喋らせねーために口封じを――――
――」

「受けますッ！受けますッ！ごめんなさいイイツ！！！」

リボーンは懷から黒光りする『ソレ』を取り出したのをみて、

厘は受けることを（無理矢理）決意した。

「リボーンってオソロシイ子ね……」

「不合格者は死を意味するからな」

「んなーっ!!?」

「リボーン、そんな歳でそんな事いっちゃいけません!」

厘とツナは突っ込む。

片方はなんかずれてるが、気にしない方向で♪

つい最近まで荒地だったグラウンドはまるで何もなかったかのように整っていた。

びば漫画。スゴイです。

「マジでお前面白いな。気に入ったぜ」

ハハハッと、楽しそうに笑う山本。

.....。

一人状況を理解してない人がいた。

「山本って、将来大物になると思う・・・」

厘のつぶやきに対して、ツナはもげそうなくらい大きく首を縦に振った。

「お、滝本もがんばろうぜ」

「え、あ、ウン」

イキナリ振られたので、まともな返答ができない・・・

山本は、自殺未遂事件以来、フレンドリーになった気がする。

「試験は簡単だ。とにかく攻撃をかわせ」

「イヤイヤ、攻撃って何スかっ!？」

いつの間にか、リボーンの小さい手には大きいナイフが握られていて。

しかも、見るからに切れ味バツグン。太陽で、ナイフの先が銀に光る。

「まずはナイフ」

ビュッ　ビュッ　という音がして。

真っ青な顔をした厘と、山本に向かってナイフが投げられた。

「うおっ」

「ちょっと命中率高ませんかねリボン君!!?」

間一髪で避ける厘と山本。

・・・ここから恐怖のファミリー試験が始まったのである。

・
・
・
・
・。

この体験談、どっかのテレビ番組に投稿できるかもネ。

No. 7 LET、Sファミリー試験!? 〈前編〉 (後書き)

グダグダですねー。

まあ、気にしないで下さい。そーゆー作者なんですよ。

さってと・・・後編も、編集頑張るぜ!!

No. 8 LET、Sファミリー試験!? 〈後編〉

ぱらっと、厘の、艶のある栗色の髪の数本が、床に落ちる。

「えっと・・・」

この不自然の切れ具合は・・・

リボーンの方を見ると、リボーンはニヒルに笑っていた。

まさか・・・

「待てよりボーン！本当に二人殺す気かよ！」

ツナが、厘の髪が切れたのを見て、二人を庇う様に前を立ちふさがった。

が、そんなんで聞くヒットマン・リボーンではない。

「ツナもボスとしての基本を見せてやれ」

「はぁ!?!」

ツナも強制参加。・・・カワイソウニ。

「さあ、逃げろ!」

山本の一言で、ファミリー試験受験者〓山本、ツナ、厘が走り。
ソレを合図に恐ろしの試験監督者〓リボーンがナイフを構える。

「おっといい肩してらー」

「はッ!?! て、うわっ」

厘の肩すれすれにナイフが当たる。

「もうコレ、死なない方が可笑いんじゃないッ!!?」

そう叫ぶと、厘は、スカートを少し捲る。

白い太股には、茶色い革のベルトが巻きつけてあった。

そのベルトから取り出したモノを。

リボーンに向かって。

「反撃じゃあああああッ!!!!」

引き金を―――――引く。

パ
ア
ン
ツ

というよく響く音と、少しの火薬の匂い。

「なんで厘が、拳銃なんてアブナイもの持ってんのー!？」

「コレ？リボーンからもらったw」

「『w』じゃ済まされないから！」

野球の試合の後。

『渡したいものがある』

リボーンはそういって、隣においてあった紙袋を厘に向かってポーンと投げた。

見事キャッチした私は紙袋のものを見て。

『コレは一体？』

『わからねーのか？拳銃だ』

『それは分かるんですが、一体コレをどう使えと？』

紙袋に入っていたのは

32口径くらいの拳銃。

『っていうか、銃刀法違反とがあるのですよ？』

『日本だけだぞ』

『や、ここ日本だし』

『護身術だ。』

『殺しちゃうと思います』

『つべこべ言わねーでとっとと受け取れ』

『はい・・・（泣）』

というわけです。

が、さすがリボーン。

表情1つ変えないで軽々と避けた。

まあ・・・当たらないのは予想していたが、あっさりと避けました？

・・・というか、弾丸ってそう簡単に避けられるものなんだろうか？
（汗）

「甘いーぞ厘。ライフルかなんかじゃねーとオレは倒せねーぞ」

「使えないッ！！全く使えないじゃんコレッッ！！」

32口径の銃はこのファミリー試験において、全く意味がないことが分かった。

「しかし、さっきの滝本の拳銃だってナイフだって本物にしか見えなかったぜ」

「おもちゃだと思ってたの！？」

「尊敬するわ・・・」

偉大だ・・・

「次の獲物はボウガンだ」

走っていた私たちを見て、先回りしたリボーン。
すると、

「ガハハハハ リボーン見つけ！」

「次はなんだ？」

二階には、幼きヒットマン、ランボがいた。

おい。始めてみるな、ランボさん。

マジで頭もじゃもじゃなんだーと、暢気に考えてたところ、

一生懸命ランボは自己紹介するが――――

「続行」

リボーンはランボを完璧★スルーし、泣き出すランボ。

しかし、以外にすぐに泣き止み、ランボは武器をかまえる。

[illegible]

「ちねりボーン！」

ミサイルランチャーを撃ってきた。

ド
ド
ド
オン
ツ

「ンギヤアア！」

「ひいひいっ！」

背後で爆発。

怖いですまされない怖さ。何とかしてほしい!!

「リボーン！ 試験なんてやめよーぜ!!! 今の見たろ!? ランボがミサイル撃ってきたんだぞ!? 厘なんてもう顔真っ青じゃねーか!!!」

しかし、そんなんで聞くような家庭教師リボーンではない。

「次はサブマシンガンだ。まずは見習い殺し屋レベル」

これで見習いなんだっ!! 殺し屋侮ってましたッ、スミマセンでしたッ!!

「っひゃ————!!」

シュルルルル・・・

ドドドンッ

「うわああ！！！！」

もう、生きるためには逃げるしかない！！

ライオンに追いかけられる草食動物の気持ちは今分かった。

っていうか雲雀ッ！！

どうして愛する並中がこんなになってんのに何にもしないんだあ！！！！

そんな事を考えていると。

気づいたら、獄寺が参戦しようとしていて。

気づいたら、ランボが十年後になっいて。

「10年後のランボがやるしかないよな」

「しめはロケット弾だ」

「果てろ」

まさかの・・・

トリプル攻撃！？それ卑怯じゃない！？

バアッつと爆弾がばら撒かれて、

ドウツとロケットが向かってきて、

ドシューツとロケットランチャーが飛んできて、

ドガアアアアアアンツ

「ぎゃああああ！」

「ひやあああああ！」

ぐいっと引っ張られる厘。

これって・・・

「大丈夫か？ツナ、滝本」

黒煙が立ち込める中、山本は厘とツナに声をかけた。

「あ、ありがとう山本・・・／＼」

「た、助かった・・・」

山本が引っ張ってくれたおかげで私とツナは、直撃を免れたらしい。

いつの間にか、リボーンが近くにいて、

「山本、厘。試験は合格だ。お前らも正式にファミリーだぞ」

「サンキュー」

「お、おかげさまで・・・」

ほっと一安心すると、

一気に力が抜ける。

「疲れた・・・」

私はそのまま地面に倒れるように眠ってしまった。

N o. 8 L E T、S ファミリー試験! ? 〳後編〳 (後書き)

だれかああ・・・文才くださいイイツ

・・・サンタさんに、文才でも頼んでみるかな・・・↑

No. 9 LET、Sその後のファミリー試験!?

アンタなんか・・・産まれてこなければ良かったのに・・・

それが、母の口癖だった。

狂ったその瞳でそう叫んでいた。

いつも、いつも――――

やめて・・・それ以上、私を否定しないで・・・ッッ!!!!

「――」

ふと目を開けると、白い天井が映った。

今は・・・昔の頃のフラッシュバックだろうか・・・？

まだぼやける意識で、そう考える。

「厘!!」

白い天井しかなかった瞳に、ツンツン頭のツナが映った。

「ツナ・・・ここ、どこ・・・？」

厘はガンガンと鳴る重い頭を持ち上げて、周囲を見回す。

「ああ、ここはオレの部屋だよ」

「・・・え？」

どうやら厘のいる場所は、

ツナの家のツナの部屋のツナのベッドらしい。

私が起きてから十分後。完全に覚醒した厘に、ツナが優しく教えてくれる。

「厘、試験のあと寝ちゃったでしょ？」

「・・・あー」

死ぬ危機から逃れられたからね・安心したのかもしれない。

そして、ツナは氣を失った私をつれてきてくれたらしい。

「迷惑かけてゴメン……」

「うっ、うんうん、大丈夫だから」

ツナは首を横に振る。

な、なんていい子なんだツナ……。

「そ、そうだ。もう遅いから家でご飯食べていく?」

ふとしたツナの提案。

ということは……

ツナのママンⅡ沢田ママンの手作りご飯が食べられるというのかッ
!?

食べたい! ぜひとも食べたいッ!!!

「ツナ・・・ありがとうっ！」

思わず私はツナを抱きしめた。

向こうからしてみれば、お節介な提案をしただけなのだ。

ツナが頬を紅潮させていたのは、当たり前といえど当たり前だ。

ツナから見れば、

美少女が、自分を抱きしめている　　というものなのだから。

だが、厘から見れば、ただただツナママンのお料理を食べられる事に、興奮していた。

「り、厘。そろそろ離して・・・グボバツツ!!?」

突如、ツナの言葉が途切れる。

「?」

抱きしめていた手を離して見ると、

「ツナ。白昼堂々と痴漢行為か。許さねーぞ」

リボーンが、ツナの頭に蹴りを入れていたらしい。痛そー。

「厘。大丈夫か? ツナに変な事されなかったか?」

そんな事を言いながらも、リボーンは、私から抱きしめた事を分かっているかのように笑っていた。

黒い・・・黒いよりボーン君・・・。

「いただきます」

厘は丁寧に手をそろえた。

目の前の食卓には、ホカホカとおいしそうな湯気をたてるハンバー
グ。

「厘ちゃん、ゆっくりしていいね」

まだ会って5分もたってない他人に、ツナママンは快くご飯を提供してくれた。

流石ボンゴレボス10代目の母親にして、ボンゴレNO.2の妻。

心の器が違うね、ウン。

ハンバーグをお箸で切ると、いい匂いが辺りに広がる。

「ん・・おいしー」

「そーだぞ。ツナママンの料理は全部美味しんだ」

リボンさえも、認めたこの味。つか、ハンバーグってこんなにおいしいものだったっけ？

やっぱりツナママンはすごい。

「いいなー、ツナは。こんなに料理が上手くて美人なお母様がいて」

隣にいるツナに向かっていう。

「び、美人!？」

「あらあ、厘ちゃん、お世辞を言っても何も出てこないわよ？」

そう言いながらもツナママンは私のお皿にハンバーグを足した。

お世辞じゃなくて本気です。マジ。

「そーいや、厘って」

ツナには、悪気はなかったのだろう。

「厘のお母さんこそ、どんな人？」

「！」

厘の肩がびくんと揺れた。

それは、凝視していないと、わからないほどの揺れ。

隠そうとしたけれど、隠しきれずに、という僅かな揺れ。

「厘？」

ツナは黙ってしまった私の顔を覗き込む。

「ううん、何にもない・・・」

言葉を紡ぐ私。

「私さ、母親とはそんなに暮らした記憶なくてさ。

叔父さんちで育てられてたんだ」

楽しそうに笑う厘。

だが、それは同時に寂しそうな笑いでもあった。

「どうして？」

ツナは追求してくる。

が、

ドコッ

「痛ってえ！ リボーン、何すんだよ！！」

今まで会話に入ってこなかったリボーンがツナの頭を叩いた。

「なんとなくだ」

「なんとなくで叩かれて堪えますかっ!! 痛エよりボーン!!」

涙目で、頭を抑えるツナ。・・・おそらく、威力は抜群だろう。

それにしても・・・リボーン。

厘は、ツナとリボーンの会話に微笑を浮かべながらも、考える。

リボーンは確か・・・読心術が使えるんだっけ？

そしたら・・・さっきの私の思考も読まれたのかしら？

「有難うございました」

玄関先で頭を下げる厘。

ツナとツナママン、そしてリボーンが見送ってくれた。

「また来いよな」

リボーンがツナの肩の上で言う。

「うん、今度は泊まるから」

「ちょっとリボーン、何決めてんだよ！厘もノるな！！」

「ジョー談だよ」

厘はくだけた感じで言う。

「んじゃ、また明日、学校で」

「厘ちゃん、また来てねー」

手を振って厘は沢田家を出た。

夜。

今宵は新月。厘は、闇を引き裂くように前へ歩く。

もう住宅街には、誰も人はいない。静寂に包まれていた。

「母親、か・・・」

そんな中、厘は静寂を打ち破るように呟く。

いつもの、明るい厘ではない。

その表情は、翳っていた。

その瞳は、小さい少女のように、不安そうに揺れていた。

厘は父親の顔を知らない。

母親の顔だっておぼろげだ。

でも――――

頬の痛みはちゃんと覚えてる。

背中や身体の痛みだって忘れていない。

「忘れた————はず、だったのにね」

厘は自嘲して、

遅い帰路に着くのだった。

No. 9 LET、Sその後のファミリー試験!?(後書き)

なんとなく、におわせてみました。

が、ソツキョーで思いついたただけなんです。

あ、そこで納得しちゃいます？

8月19日

No. 10 LET、S家庭科実習!?

「厘は何味作るの?」

「ふえ?」

突然声をかけられたもんだから、びっくりして思わず変な声が出る。

後ろを振り返ると、エプロン姿の黒川花が立っていた。

いつの間にか、「厘ちゃん」から「厘」になっている。なんか嬉しい。

「ほら、調理実習のおにぎりよ。なんの味作るのかと思って」

「ああ・・・確かそんなのあったねー・・・。うーん、何にしよう・・・」

三角巾をかぶり、エプロンを後ろで結びながらごもる厘に、花ちゃんは口に手を当てて、小さな声で囁く。

「まあ、何味作るのがかっていうトコじゃなくて、『誰にあげるか』が問題なんだけど」

「?」

「この調理実習で、くつつくカップル少くないらしーよー」

「へえー」

そういう系には殆ど興味がないので、テキトーに聞き流す厘だったが、

「いいの?厘って、以外に男子と仲いいじゃん?」

「はぁッ!!!??」

花の言葉に、思わず素っ頓狂な声がでる。そこらへんにいた人達がこちらの方を一斉に振り向いたが、無視。

「何処がッ!???」

「やー、昨日は放課後、山本とかツナとかと一緒に、グラウンド駆け回ってたじゃない?」

「そ、それは・・・（とあるマフィアのファミリーの試験で、なんて言えない・・・）」

「しかも今朝、厘が登校してると、雲雀サンが来てたでしょ？
仲良さそうに鬼ごっこしながら学校まで走ってたじゃない」

「あれが仲良さそうに見えるのならば、この世界全てがバラ色だと思えます・・・」

今朝。

『やあ、滝本厘』

『ッ！！？（ビクウツ）』

登校中。

この世の中で、一番聞きたくなかった声が、前から聞こえてきた。

そして、5メートルほど先には、学ラン姿の委員長様が！！

『・・・・・・・・・・忘れ物したので取りに戻ってきます』

180度、体の向きを変えて走り出そうとしたその瞬間、

雲雀が腕を引っ張っているではありませんか!!

『痛いッ! 超痛いッ!!』

腕の痛みに、思わず悲鳴が出た。

『君、風紀委員のクセに、なんで昨日応接室に来なかったの?』

『・・・・・・・・あ』

忘れてた・・・。

すると、雲雀は・

『忘れたなんて・・・フツ、いい度胸だね』

『ヒッ、雲雀サーン!!? なんでトンファーを出してっっておわッ!
! 危ない!! スレスレでしたよね今!! って、こっちにトンファー

振り回しながら殺意マンマンで向かってくるな——!!」

回想が終わり、ハア、と溜息をつく。

「いいねえ、リア充生活は」

「違うッつつてんのー!!!!」

「あ、厘。エプロン縦結びになってるよ?」

「ん、ちょっと直してくれる・・・ってコラ!!!!話ズラすなー!!!!」

厘の苦悩は続くww

「今日は男子におにぎりをくれてやるー!!」

女子は一斉に言った。

「いいねエ、青春だ」

厘の視線は、顔を赤らめて男子におにぎりを渡す女子。

花ちゃんが言っていた、「くつつくカップルが多い」というのは本当らしい。

厘は、誰にあげよっかなーと少し考えて、

「ごーくでーら君」

「あアッ!？」

「ん、その反応なんかならない？」

にっこりと笑いながら、厘は獄寺の口におにぎり梅干味をおしこんだ。

「な、何を・・・」

獄寺は突然のことに驚きながらも厘に怒鳴る。

「女！何してんだテメー！！」

「食べたいでしょ、おにぎり」

「勝手に口に入れんじゃねエよ！」

「山本もいる？」

「お、サンキュー」

「無視すんじゃねエ！！」

獄寺はまたまた怒鳴る。

「いいじゃない、ファミリーなんだから」

「お、オレはファミリーと認めね「滝本」、もう一個」「ほい」ヒトの話の聞けエ！！」

獄寺の苦悩も続く W W

「あれ、ツナは？」

みると、ツナは京子ちゃんに差し出されたおにぎりを前に、緊張にせいかに固まっている。

「青しゅん……。」

京子ちゃんのおにぎりから、紫の湯気……じゃない、煙が出ていた。

そうでした。

この話、ビアンキがツナを殺そうとする話だったわけ。

獄寺と山本がポイズン化されたおにぎりを食べようとして――

「食べたら死ぬんだぞー!!」

「!？」

そして、

「死ぬ気でおにぎりを食うー!!」

死ぬ気となったツナがポイズン化したおにぎりを食べ。

「うまい！」

さすが死ぬ気弾。

っと暢気なのはそこまでだった。

「足りねー!!」

暴走したツナが無差別に皆のおにぎりをとって食う。

「だれか止めろー!」

「だめっだめーっ!!」

クラス中が騒然となった。

「まだ足りねー!!!」

ツナは、厘のおにぎりを取ろうとしたが。

「目を覚ますんだ! ツナヤロー!!!」

平手打ち、3往復。

そして、最後に鳩尾に上履きをお見舞いした。

さすがに死ぬ気のツナもそれは痛かったらしく、

パタンッ

・・・倒れた。

「・・・以外にあっけなかったね・・・」

ツナを見下ろし、ふと呟く厘であった。

一週間、厘は密かに英雄として扱われるようになったらしい。

が、獄寺にはその日ずーっとにらまれ続けた。

ああ、怖かった・・・。

「ごめんね、ツナ・・・」

通常になったツナに厘は土下座で謝る。

「や、大丈夫だから」

ツナの両頬には、厘の手形がべったりとついていた。

本気でやってしまいました。

全国のファンに土下座して謝ります。

マジですんませんした。

No. 10 LET、S家庭科実習!?(後書き)

編集終わりー!!

現実というものを見たくないですね、ハイ!!

それでは、また部活に行ってきます、では!!

8月22日

N O. 1 1 L E T、S 見回り!!

「それですね」

厘はごほんっと咳ばらいをする。

んんっと、声を整えて、目の前にいる人物に問う。

「どうして私がココにいるんでしょうか？」

「僕が呼んだから」

「当たり前です。貴方以外誰が呼ぶんですか」

私はフッカフカのソファ―に座って雲雀と会話している@応接室。

「私が聞いているのは、私の必要性です」

雲雀は大きいデスクで書類の整理をやっている。

応接室に来た厘だが、特に仕事の指示が出されていないため暇で暇でしゃーない。

「必要性って、君風紀委員でしょ？」

「風紀委員の仕事とか1つもやってませんがね」

はき捨てるように言う。

風紀委員に入ったものの、厘は風紀の仕事を一切やっていない。

この前、私はその事を風紀副委員長（噛みそう）、草壁さんに聞いてみた。

すると、草壁は一言。

『時がくれば解る』

『何ですかその偉大なお告げは・・・』

意味が解らなかったので追求はしなかった。

「じゃあ、コレやる？」

雲雀が指差したのは、山積みされた書類。

書類の一番上は、不安定に揺れている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

綺麗すぎる沈黙。

厘はそれ以上口を開くのをやめた。

そのまま十分ほど経つと、雲雀は手をとめ腕時計をチラッと見て言う。

「滝本厘、行くよ」

「は？って何処に！？」

瞑想中だった厘は意味がわからず、扉へと向かう雲雀に聞いた。

「並盛町の見回り」

「風紀委員の役目じゃないでしょうソレ」

光を商店街に奪われたような暗すぎる、建物と建物の間に――――

群れた不良がいました。ご愁傷様。

「・・・咬み殺す」

「わー、雲雀かっこいいー」

厘は、雲雀からの不良達への肅正・・・というか一方的な暴力を眺めていた。

床に倒れているのはもう見るも無残な。

厘は両手を合わせた。迷わず成仏してください。

一仕事終わると、雲雀はトンファーについた血を舐める。無駄にそれが似合う男だった。

「厘、次行くよ」

「イエッサー★・・・って、え？」

名前で呼ばれたことに対して驚く厘。

前までフルネームだったのに、今は名前だけで呼ばれた気がするの
は気のせいでせうか。

雲雀は涼しい顔、でもちよつと赤くなった顔で

「悪いかい？」

「べ、別にいいですけど・・・」

つか何でトンファー構えちゃってるんです？」

「返答しだいでは、床に転がってるモノみたいになってたけど。よ
かったね」

そつと足元を見る。転がされた軀。

「止めてください、ソレは」

視線を、首ごと雲雀に合わせる。

「感謝しなよ」

「感謝します」

頭を下げる厘。

顔をあげると、雲雀は底意地悪そうな、いつもの笑みを浮かべていたて見ていた。

すっかり雲雀のペースに飲み込まれていることに気づく厘だった。

それから、雲雀曰く草食動物の群れを片っ端から咬み殺していったが、

厘はそれを眺めているだけで終わった。

結論..私やっぱり仕事してたくない？

厘は知る由もないだろう。

厘が風紀委員に入ってから、委員長が暴れることは少なくなったことを。

雲雀が初めてと言ってよい、人に関心を持った人物だということを。

委員長を除く風紀委員全員が厘のことを、

『委員長精神安定剤』と呼んで密かに感謝していることを。

厘がそれらを知るのは、もう少し先のお話。

No. 11 LET、S見回り!! (後書き)

終わり!!

なぜかフラグが立ちそうで・・怖いです。

そんなつもりは全然ないんですがね・・

恋愛系は・・含むか含まないかはまだ未定。

ご意見をいただければ、幸いです。

No. 12 LET、Sビアンキ姐さん!?

「おい、女」

「女って呼ぶな。厘様と呼びなさい」

暑い昼下がり。スイカを持った獄寺の隣を歩く。

「なんでお前なんかと10代目の家に行かなきゃなんねーんだよ!」

「女の子にそんな事言うと罰が下るよ?」

・・・実際、この後獄寺にはビアンキに会うという重い罰があるのだが。

私は並中からの帰り道にばったり出会った獄寺とツナの家に向かっている。

獄寺はツナに会うため。私は――――

ツナの家にいる輝かしい美女に会うため。

この話は標的10の「ポイズンクッキング?」。

漫画で見るビアンキは美人だった。実物はもっと綺麗なんじゃね?のようなノリで。

ビアンキをこの目で見たら文句ない。

「おい、おんn・・・」

「獄寺君」

私は獄寺の言葉を制して言う。

「私、ツナファミリーの一員だよね？」

「ん・・・いや、それは・・・ああ」

気まずそうに獄寺は頷く。

「ツナファミリーをそんなに邪険に扱っちゃいけないよね？」

最後の一押し。

「だから、私のこともファミリーらしく『厘』って呼んでね？」

にこやかに笑うも、絶対オーラを出す厘に獄寺は白旗を揚げた。

「り・・りっ、・・厘・・・」

「うゝっ／＼／＼／」

獄寺が可愛いすぎる・・!!

思わず頬が赤くなる。興奮のあまりか思わず、厘の体がぐらりと揺れた。

「な、大丈夫かテメー!?!」

「うえ!?!ご、獄寺!?!」

腕を伸ばすと、獄寺の腕に華奢な厘の体が、すっぽりと収まる。

「あ、ありがと・・・」

「ったく・・・」

感謝の言葉を言うと、獄寺はそっぽ向きながら短く答えた。

この世界のヒト達は、ズルイと思います！！！！／／

そう心の奥で叫ぶ厘は、獄寺の顔が赤面していた事など知る由もない。

それから獄寺と、他愛もない話をしていると、数分で沢田家に着いた。

「十代目！」

「お邪魔しまーす」

その声を聞き、トンツトンツと二階から降りてくるツナ。

「獄寺君に厘、どうしたの？」

「このスイカ、一緒にどーすか、メチャクチャ甘いらしいんですよ」

「私も食べる〜♪」

しかし、ツナが口ごもったのを見て、獄寺の目が光る。

「トラブルッスね、なんならオレがカタつけますよ」

「や、あんたの『カタつける』は家一軒破壊しますから」

厘はボソツと呟く。

真実ッテ残酷ダナ。

次の瞬間。

ドキヤッという音がして、スイカが地に落ちた。

「「あ——っ スイカ——ッッ!!」」

息びったりで賞をとれるくらいぴったしに、厘とツナはハモった。

ああ・・甘くてすごい美味しそうだったのに・・

辺りには、スイカの甘い香りがいっぱい広がる。

つぶれたスイカの中身は、本当に真っ赤だった。・・・残念。

そして、獄寺の視線の先には・・・

「あ、アネキ！」

「隼人」

輝かしい美女がいた。

「（うわーっめっさキレイな人・・・）」

そう思っていると、

ぐきゅるるるるる・・・という素晴らしい音がして。

「失礼しました！」

獄寺は滞在時間00分でツナのうちを去った。

「獄寺君とビアンキって姉弟きょうだいなのー!？」

ツナは叫び声とともに獄寺を追って家を出る。

「腹違いのな」

リボーンの言葉に、美女・・・ビアンキの顔がわずかに翳る。

「ツナって慌ただしいな・・・」

ぽつと呟く厘。

「お、居たのか厘」

「その反応、どーにかなりませんかねコンチクショウ」

にこやかに、毒を吐く。

ビアンキはというと、

「貴方・・・まさかりボーンの恋人!!?」

「なんでその反応になるんですかねッ!!?」

くわっと目を開くビアンキ。怖いッ!!!

「違いますからッ!違いますからあゝ」

厘は、ビアンキの愛する恋人・リボーンに、視線で援護を頼む。

数分後。リボーンにたしなめられ、ようやく落ち着いたビアンキに自己紹介。

「私、滝本厘、ツナと獄寺のクラスメイトです！」

ビシッと敬礼！！

ビアンキは、ようやく厘に害がないと分かると、

「厘、ね。可愛いわね」

「有難うございます！！」

浮気相手じゃない事が分かった途端、ビアンキはすっごく優しくかった。

「あの、ビアンキさん・・・」

「何？」

「あのですね、唐突なのですが・・・」

厘は覚悟を決めた。

「私を弟子にしてくださいッ!！」

ツナがいたら「はああああ!?!?」という叫び声をあげていたと思うが、当のご本人は、獄寺から悲劇のヒストリー★を聞いているので、知る由もない。つかいなくてよかった。もしいたら、ツナの絶叫が近所中に響き渡っていると思うから。

「厘。お前、数分前までビアンキに殺されそうになってたこと、もう忘れたのか？」

リボーンも呆れ顔だ。

でも、でもッ・・・

ビアンキさんの傍に居たいんだもんッ！↑変態か

ビアンキさんはあっさりと、

「いいわよ」

といって、厘の頭を静かになげた。

滝本厘。師匠をゲット!!

ヤッタネ!!!

No. 12 LET、Sビアンキ姐さん!?(後書き)

はあゝ

文才がほしーです・誰かクダサイ↑オイ

N o. 13 LET、S自宅公開!?

「雲雀」

私は、自主的に応接室に通っている。

なんというか、応接室って落ち着く。冷房もあるし、お菓子もあるし。

「邪魔しに来たの?」

「その反応、酷いと思わない雲雀の根性が羨ましいです」

厘は紅茶を入れに行く。

数分後、厘は2つのティーカップを持ってきた。

片方を雲雀に渡し、もう片方には、

「厘」

「はい？」

「今、角砂糖何個入れた？」

「あは、見られちゃったかな？」

てへっと頭をかいて、舌をぺろっと出す。THE★誤魔化しである。

「可愛くないから。軽ーく5個は入れたよね」

「別に可愛さ重視でやったわけじゃないんで」

だってだって、甘い好きなんでもんっ。

「甘いもの好き、じゃ済まされないよね。君に使われて砂糖がかわいそうだ」

「そんな感情、砂糖にあるんですかッ!？」

「舌おかしんじゃない？」

「ひっ、人の勝手です。つか、丸無視ですかね」

「虫歯になるよ」

「歯磨きしてますから。ほっとして下さい」

「君、風紀委員じゃない」

「風紀委員に入ると、委員長様から虫歯の心配されるという特典がつくんですか」

数分後。

最悪な特典ですね、と呟いた厘は床に土下座していました。ハイ。

・・・イロンナ、合法的なやり方で。

「もう二度と言いません・・・」

「絶対だからね」

それを満足そうに眺める委員長。根性捻じ曲がってますわねこのヤロー。

「ということで。罰として今日は厘の家に行くよ」

「はぁ、ご勝手に・・・って、はぁぁッ!!?」

思わず流しそうになるくらい軽いノリだった。

「罰Ⅱ家に行くってどういう方程式ですか。理解不能なんです」

「もう決定事項だから。君の反論なんてだれも聞いてないよ」

「テメーは『ごーいんぐまいうえい』という言葉がぴったりですね
コンチクショウ」

「・・・どうしても君の『』のなかをカタカナに直せないよ。すごい
才能だ」

「褒めてるんでしょうか。馬鹿にしてるんでしょうか」

「馬鹿にしているに決まってるじゃないか」

「いちいちムカつきます」

結局、厘は雲雀には全てにおいて勝てないことを理解した。

厘の家に人影は2つ――――。

「部屋、普通だね」

「どんなのを想像してたんですか？」

「失望したよ・・・ハア」

「ねえ！どんな想像してたんだよ！」

ため息をついて雲雀はリビングにでかでかとソファ―に座る。

「客としてそれはいい態度といえるんでしょうか？」

「お客様だよ。来お客様。もてなさなきや」

「店じゃないんで」

ため息をつきたいのはコッチだよ。

「んで、なぜゆえにココに来たかったんですか？」

どーせ、特にないだとか、面白そうだとかゆうんだろう。

しかし、意地悪そうに笑っていた雲雀は、急に真面目な顔に戻った。

それは、まったくの無表情。

ここ最近は、厘に向けられていなかった冷たい表情。

群れる草食動物に向ける冷酷な表情。

「君ってさ」

平和に終わる。そのはずだった。

実際に、そう終わるはずだった。

そう、願っていた。

「君って何者なの？」

厘の動きが止まった。

そして――

ほんの一瞬、
厘に表情が、
死んだ。

No. 13 LET、S自宅公開!?(後書き)

なんとなくです。

厘がトリップしてきた事、暴露させちゃおっかな?っという軽いノリ。

物事決めるときはいつも、気分と腹の減り具合に任せます。

皆私に振り回されちゃいます。

それが音無です。あれ、失望はしないでもらえると有りがたいんですが。

8月25日

No. 14 LET、S暴露!?

「君って何者なの？」

逃げてきた、その言葉。

恐れていた、その言葉。

遠ざけていた、その言葉。

私はカラカラの声を振り絞った。

「やだなー、普通の一般人ですよ？他に何かあるんですか」

普通通りに。あくまで普段通りに。

しかし、手は僅かに震えているのが、自分でも分かった。

骨からの振動で伝わる自分の音^{コエ}も、変に揺れている。

鋭い雲雀が、それらに気づかないわけがない。

雲雀は容赦なく続ける。

「君、戸籍ないでしょ？」

「ッ！」

私の事は調べていたらしい。

「・・・」

言い逃れできないその言葉に、厘は黙るしかない。

「履歴だって、戸籍だってないし。それにさ」

雲雀は更に続ける。

もし、厘が黙らなかつたら雲雀は止めていただろう。

「君の登校初日、イキナリ職員室前に現れてたけど、あれはどういう事？」

見ていたようだ、あの瞬間。

「見て・・・たんだ」

気配は無かった、と私は解釈していた。

しかし、気配なんて、雲雀は簡単に消せるのだ。

「君の本当は何者なのさ？」

「・・・」

人は異なるもの——言ってしまうば『異物』をすぐに拒絶する。

『普通』ではないものを、決して受け入れない。

トリップしてきたた厘は『普通』ではない。

厘が、恐れていた事。それは、

ツナに京子ちゃん、花ちゃん、ビアンキさん、そして雲雀が、

一度は受け入れてくれた人達に『拒絶』される事。

数分前まで一緒に笑っていたヒトに、突き放される事。

私の事情は、誰にも話すことはないと思っていた。

絶対に――――

絶対に、話したくなかったのに・・・

『拒絶』されたくなかったのに・・・

「厘、答えなよ」

「・・・雲雀」

厘の顔は一瞬、ほんの一瞬、泣き出しそうに、小さな少女のように歪んだ。

でも、すぐにいつもの顔に戻って、

「話します。話せばいいんですよ？」

トリップのこと。異世界から来たこと。

『ここは漫画の世界だ』ということ以外は全部話した。

薬を貰ってテレポートできることも、全て。

特に長い説明は要らなかった。

『異世界から来た』ということは予想していなかったようで（当た

り前か)、雲雀は時折、驚いたように目を見開いた。

「異世界、か・・・」

雲雀は呟く。

「確かに、そんな雰囲気はしてたからね」

「・・・そーなんですか？」

「異次元とかは信じなかったけど、そんなのがあるなら厘みたいな人かな、と」

「どんな感じで？」

「一般人って感じがするんだけど、時々別人みたいにオーラが変わるんだよ」

例えれば、周りの人にはない薄い膜のようなモノが、厘を包み込んでいるような。

「ふーん……」

厘はどうでもよさそうな返事を繰り返したが、雲雀に意地悪そうな笑みを浮かべる。

「どう？私の事、奇人とも思いましたか？」

そんな厘に対して、雲雀はもっと意地悪そうな笑みを浮かべて、更

に鼻でも笑った。

「馬鹿じゃないの？」

「？」

キョトンとした厩に雲雀は言う。

「もともと奇人って分かってるから大丈夫。」

はあっ!!!?

「大丈夫じゃないです。全然大丈夫じゃないです」

………なんだか、とっても馬鹿らしくなってきた。

「何ですか『分かってるから』って。私の気持ち全く考えてないです
ね人権無視ですなー!」

「人権なんて君にあったの?」

「私はイヌかネコですか。つか、ホント人をムカつかせる天才です」

ね」

「君ほどじゃないけどね」

「おかげ様でねコンチクショウ」

分かったこと。

雲雀は、口は悪いし根性捻じ曲がってるしムカつくし意地悪だし戦闘マニアだけど、

私を『拒絶』したりなんかしない。

しっかりと、受け入れてくれた。

「ということで、早く晩御飯作ってよ」

「貴方には炭を食べるという勇気がありますかね？」

・
・
・
多分、
だが。

厘と雲雀はぎゃあぎゃああと喚き、

夜は更けていくのであった。

騒ぎすぎて時間が経つの忘れて気づいたらお日様が昇ってました☆
みたいなオチは、悲しすぎるので、あえて書かないでおこう。

・・・つか寝不足で、もうそんな気力ないッス。

No. 14 LET、S暴露!?(後書き)

シリアスなのは、私に似合いません!!

・・・まア、ギャグも無理ですが(汗

誰か、文才ください。けっこーマジで。

No. 15 LET、S落第!?(前編)

滝本厘、13歳。

夏休みのくせに学校に来てます。真面目なのでもなく、応接室に行くわけでもなく。

なぜかというと――――

「このプリントは宿題です。全問正解しなくちゃ落第ですからね」

1-Aの教室に「えー」という声がちらほらとあがる。

教室内は空席が多いが、数人が座り、先生に小さな反抗をしていた。

・ ・ ・ 私もその一人だけどネ。

「ツナ、滝本、一緒に宿題やんね？一人ずつより三人でやったほうがはえーだろ？」

山本が厘とツナを誘う。

厘は、勉強ができないワケではない。寧ろ、獄寺と並ぶトップレベルだ。

しかし、期末テスト、厘はテスト中に見事、全教科安眠中だった。

勿論白紙。零点。9教科の合計・000点。

真実は残酷だな、くどいけど。

という少し変わった経路で厘は補習に参加していた。

「ん、いーよ」

「それいいねー！どこでやる？」

本気を出しても、期末テストの成績が大して厘と変わらないツナが、その話に食いつく。

その時、

「うちでやればいいだろ」

声がした方を見ると、どっから湧き出てきたのかリボーンが机に乗っていた。

リボーンが机に乗る姿を見るとなんだか不思議に思えてくる。

机ってこんなにおっきかったっけ？ 的な。

それともリボーンがちb・・・ごほんごほん。

というかなり失礼なことを考えている厘をよそに、話はどんどん進んで言った。

「ってゆーか何でお前が俺たちが宿題やる場所決めてんだよ！」

「俺はツナの家家庭教師だからな」

「お、おい！」

そして、山本がなんかの賞をとれるくらいのボケっぷりを発揮。

ツナの家でやることになった。

ツナの発言なんて誰も聞いてないんだ・・・と思った厘でした。

てへ★

しかし。

「帰っていいですか？」

場所はクーラーの効いた応接室。

「駄目だよ」

「何故！？私そんなに悪いことしました!？」

「あの時のチャーハンの不味さは今も覚えてるよ」

「うゝっ、でも私、一応忠告しましたよね？」

問答無用で家に来た雲雀と食べた夕飯は、厘お手製のチャーハンだった。

『これをどうやって食べろっていうの?』

『雲雀サンの精神力があれば・・・あ、ウソです。ごめんなさい』

「過去を振り返っちゃいけません。未来を見据えて歩くべきなので
す」

「それだけすごかったんだよ。ということだ」

「……トイウコトデ？」

ヤベエ。嫌な予感しかしない。

雲雀は書類を厘に渡した。

それは、雲雀の腕力があって持てる量の、書類のヤマ。

「前、仕事がないって嘆いてたでしょ？」

「そんな時期もありましたかな？」

とぼけて、一気に応接室の出口へと逃走しようとしたが・
エスケープ

雲雀が、厘に細い腕を掴んで離さない。

「はくなくせくっつ!!!!」

なんだろう。なんで必死（厘）VS余裕（雲雀）で勝てないんでしょうか・・・ッ!!

「今日からちゃんと仕事してもらおうよ」

「イヤ-----ッッ!!!!!!」

厘の絶叫が、平和な並盛中全体へと響き渡った。

やっとツナの家に着する。

「お、ぎりぎりセーフ・・・ってトコかな？」

3時頃。やっと厘は書類の整理を終えた。

ツナの家へともうダッシュの結果、なんとか間に合ったらしい。

家には、山本・獄寺が待機していた。

「10代目！オレが全部教えて差し上げますよー！！」

にっこり笑顔で獄寺が言う。

熱血指導が始まりそうだw

「でもって、答えがこーなるわけです」

「獄寺ー、ソレ、ただ教科書読み上げてるだけみたいですがー」

獄寺の（ツナのみに対する）解説に一区切りがついたところで、厘が指摘する。

「るせえ！！解き方は全部載ってるんだよ！！」

「うんうん、そーなのな」

キター！！山本の「なのな」キター！！

と、興奮する厘。

「教科書見て、滝本と共同でやって、ほとんど全部解けたぜ。

いやー、ホント滝本って頭いいーな」

「えへへ、アリガト。でも、山本もけっこうデキるじゃん♪」

獄寺にプリントをひったくられながら、話し合う。

「チツ・・（合ってる）」

獄寺の呟きに、厘と山本はハイタッチ。

「んま、問7はわかんなかったけどね」

「うんうん、さっぱりな」

「がっはっは。まだまだおめーらは馬鹿だな！！！！」

しかし、馬鹿にした獄寺も分ならず・・・

「ガマン大会だ」

突如、リボーンが姿を現す。

「暑っ！」

コタツにマフラーに鍋に・・・

その空間だけ、冬気分だ。決して味わいたくないが。

「なにやってんだよ！お前は悪魔か！」

「俺じゃねーぞ」

「お前以外に誰がこんなこと・・・ッ！」

「ハルは悪魔なんかじゃありません・・・」

ユラア、という効果音とともに一人の少女が姿を現した。

「ハル！！」

ハルと呼ばれた少女、三浦ハルはツナに思いを寄せる女の子。

まだ話したことがない、多くのキャラクターの一人だ。

ぜひともここで仲良くなりたいが……。

しかし……

「な！もとはお前の事好きだったんだぞ！」

「いいのリボンちゃん……ハルは帰りますから……」

帰ってしまった。

え、帰っちゃった？

まだ私、話してもいないし視界にも入れてくれなかったのに。

できれば三浦ハルとも触れ合いたかった・・・。

がくつと項垂れる。

「もてんなーツナ。どーやって知り合ったんだよあんな名門の子と」

「え、名門？」

いやいやツナ君、モテるのトコを否定しましょーよ。

山本は続ける。

「あれ、緑中の制服だろ？このへんじゃ超難関のエリート女子校の」

「ハル、頭いいんだー」

「へーあのアホ女がねえ」

確かにまだ会って一分も経っていないが、頭よさそうな雰囲気はしなかったが・・・

山本が「この問題も楽勝だったりしてな」と言い、「ちょっとオレハルに聞いてくる!」とツナも急いで席を立つ。

そして――――

「はひ―――!」

お馴染みのハルの口癖がすぐ近くで聞こえた。

「(そーいや、盗み聞きしてたんだっけな・・)」

思いつきり忘れていた厘。

この話はそんなに細かく見ていないのだ。

厘はもっと真剣に読めばよかった、と反省しながら、

チョコでコーティングされていない部分をリスのようにこまかく噛み砕いた。

「これ学校で習いました。分かると思います」

流石超難関校の子。余裕の笑みで宣言する。

でも、たしか解けないんじゃないかなかったっけ？

その時、厘はふっと思い出した。

答えて、ネコジャラシの法則とやらだった気がする。

それを言っ
てあげようかな、
と思ったが言わないでおいた。

ツナ達の慌てっ
ぷりを見たかったのである。

雲雀のおかげで根性が捻じ曲がってきたと実感している。

あはは、笑えない・・・☆

ということでハルの空回りを見てみることにした。

N o. 15 L E T、S落第!?(前編)(後書き)

この小説、見ていただいてくれる人なんて、いらっしやるのでしょ
うか・・・?

すっげー不安なのですが・・・

8月26日

No. 16 LET、S落第!?(後編)

「あとちよつとです」

◇ 五分後 ◆

皆ニコニコ顔だ。

笑顔っていいな★

◇ 十分後 ◆

「もうちよつとです。」

ほんのちよつと皆の顔に焦りが生まれたが、山本が

「むずい問題だしな、ゆっくり解けよ」

という100点満点のフォローで嫌な空気は飛んでいった。

流石、山本空気洗浄機……。

◇ 1時間後 ◆

時計が一回転してしまった。

空気洗浄機も苦笑いする。

ちよつとずつ、険悪な雰囲気になっていき――――

三時間後。

「ごめんなさい！わかりませーん！！！！」

「「「（（何————ッ！！？）））」」

とってもよろしくない雰囲気になった。

「てめーっ！わかんねーならハナっから見栄きんじゃねー！」

「解ける気がしたんです・・・」

「うん、ほんとに頑張ったね・・・」

でもせめて無理なものは無理って言ってね・・・。

そんなことは伏せておき、厘はハルの頭をよしよしと撫でた。

ハルとは身長は数cmしか変わらないけど、なんとなくお姉さん気分だった。

「はひ・・何処の何方か存じませんが、有難うございます・・」

「私は滝本厘。厘って呼んでね」

「厘さん、優しいですね・・」

男三人がおろおろしている中で、女子二人の間には静かな友情が芽生えた。

「厘! ! なに友情育んでんだよ! ! ! !」

が、ツナの一言であっさり崩壊・・ああ・・

そんな時。

少し音の外れた歌と共に、ランボが窓から入ってきた。

が、そんなランボを優しく受け入れてくれるような環境は残念ながら存在しない。

そんなイタイランボを、厘は優しく撫でる。

「今お兄ちゃん達忙しいから後にしようねー」

要は、今はこっちくんなバカーと言ってるのだが、ランボには通じなかったようだ。

「じゃ、ランボさん静かにするー」

「うんうん、ランボ君偉い子だねー」

ちゃっかり抱くようにして、あちこち動き回るのを防ぐ。

制服のスカートから、飴玉の袋を取り出した。

・・・応接室から、ちょっと盗んできたものですが何か？

このお話で出会うランボさんのためにブドウ味を用意してきてあげましたよ？

まさか、動きを封じるために活用されるとは思わなかったですがねッ！

ともかく、ランボは喜んで飴を口にした。

「そーいや、お前、だれー？」

お前、というところに少しぷちっとキタが、仕方ない。原作キャラクターと仲良くなるためだ。

大体、そうゆうキレイない練習は、いつも応接室で行っているのだ。

「んーとね。厘っていうんだー。よろしくね？ランボ」

・・・まあ、仲良くなったと解釈していいだろう。

厘、ナイス!!という獄寺とツナの視線に、敬礼する厘であった。

「ああ!!この問題解けるような大人の女性知ってます!!」

ピッピツつとハルはケータイで番号を入れながら女性ビアンキの自慢話をする。

「あ、もしもしビアンキさん?」

「なっ。」

「えゝー！」

獄寺とツナの叫びが、沢田家に響き渡った。

獄寺はいきなり慌てだした。

「まてー！ ビアンキは呼ばなくていいー！！」

が・・・。

チリンチリーン

という音。なにを隠そう、ビアンキがきたのだ。

「速ー！！」

時すでに遅し！ 残念！

と他人事のように（だって他人事だし）考えていた。

獄寺はマッハの速さで階段を滑り降りていく。

でも、その数秒後。

「うぎゃああああっ！」

迷わず成仏しなされ、と静かに手を合わせた厘だった。

「そうね・・・」

こんなのもいいわ」

ビリビリッとビアンキはツナのプリントを破った。

ああ・・・3時間の、努力の結晶が・・・。

普通は嘆くところだが、厘は逆に、

「師匠、カッコイイです・・・」

賞賛の目でビアンキを見る。

「師匠!？ってどーでもよくないよ!俺の落第かかってんだよ!」

ツナは慌てだす。

山本が抑えてなければ自殺しそうな勢いだ（それはないけれど）。

すると――――

「返事がないのであがらせてもらったよ」

ドアから野太い声と、一人の大人の影が出てきた。

「誰？」

この家の住民であるはずのツナが言うのはその一言。

普通だったら見知らぬ他人が家にきたら110番通報をするのが当たり前だろう。

心が広いというかなんとというか・鈍感？

というか、ツナママン、防犯で鍵くらいかけましょーよ。

「あ、うちの父、大学で数学を教えてるんです。だから呼んじやいました」

いやいや、呼んじやいましたって・・・

にしても、ホントに勝手に上がりましたね・・・

なんて事を考えていた厘は、考えるのがめんどくさくなったので、水玉のパジャマを着たりボーンで目の保養をしていた。うん、本当にリボーンはおめめにいいと思う。下手な目薬よりも、何倍もの効果があるかもしれない。

「答えは3だよ」

自信たっぷりのハルの父の声は、睡眠五分前のリボーンに訂正された。

リボーンが普通の赤ん坊ではない事ぐらい分かっている。

それでも、赤ん坊の口から「ネコジャラシの公式・・・」と出てくるとこの義務教育の7年間、なにを勉強していたのかと、とっても不安になってしまうのは気のせいだろうか・・・。

・・気のせいにしておこう。じゃないと、色々キツイ。

「間違いないッ！彼こそ学界に時折現れて不可能といわれる問題のことごとく解いていく、幻の天才数学者、ボリーン博士そのものだ！！！！！！！！」

テンション高いなーと思う。

こんなのがお父さんだったら、すごく疲れてしまうだろう。

さすがルックス的にアホ女っぽいハルの父親だ。↑

「考えてみるよ、こいつまだ赤ん坊だぜ、世の中に似たやつなんて
ごろごろいるぜ」

「そーだよねっなわけないよね！」

「そ、そーだよツナ。コレが本当だったら私中学校やめるわよ・・・
」

ツナと山本、ハル、厘は「神童です！ 感動です！」と一人で感
激してる痛い人を眺めた。

結局、收拾がつかないまま終わる・・・。

No. 16 LET、S落第!?(後編)(後書き)

なんでこんなに長いくせにぐだぐだなのでしょうか・・・。

ダレカー、ダレカオシエテー

8月26日

No. 17 LET、Sお仕置き!?

「君さ」

家に帰った瞬間に、チャキツと雲雀がトンファアを構える。

「今までどこにいたの？」

ああ、かm・・・じゃない、仏様。

神様は当てにならないからね。

時は遡る。

「神羅あ」

私は神羅と話していた。

「なんだ？」

「私さ。元の世界に帰れんの？」

リボーンの世界に永住するのもいいが、それはそれでちょっと寂しいからな。

「ああ、その事か・・・一時的なら帰れるぞ」

「そーなの？」

「まあな。厘ははこの世界に『トリップ』してきただけで『転生』してるワケじゃないだろ？

向こうの世界でも、ちゃんと生命活動が続けているわけであって。

帰りたいんだったら、オレに言ってくればすぐ帰れるぞ。

ちよいちよいつと操作して、お前が元の世界からいなくなってから一秒も経っていないようにすればいいだけだからな」

「神様ってすごいな、地味に」

「地味とか言うな―――っと。そんなワケだから、お前は黒いマントをかぶりっている姿を、叔父さんにみられるからな。ま、ガンバレ」

「な、なんという他人事なッ!!」

読者の皆様のために付け足しておこう。

私は「必殺！ 馬鹿でもできる 神様への願い事」という本の儀式のおかげでこのリボンワールドに移住することになったのだが。

その儀式というのが……

1..マントを着用する。

2..ろうそくを準備。

3..『ё Я ж Ф Ч Ъ Б К Й Ы』を20回大きな声で口に出せ！

『できるかあああああああッッ！！！！』

読めねーしッ！！！！

と叫んだが、恥ずかしいのをこらえてソレを読みめでたく現在ココにいる。

「なんだ？元の世界に帰りたいのか？」

「うん・・もっかい原作読み直してくるわ」

少しリボーンの出来事を忘れてしまっているから。

「行きはオレがなんとかしたる。他の世界に行かないようにな。

帰りは自分でココに来るんだぞー。時間軸調整すんのも忘れずになー」

「らじゃー」

神羅が、パチンと指を鳴らす。

「――」

目の前が、真っ白になった――

で、現在に至る。

「人の家に勝手に上がって言う言葉じゃないと思うのですが」

だいぶ雲雀の殺気に慣れてきたのかどうか分からないが、厘はため息をつくが。

「そんなのどーでもいいよ」

・・・前言撤回。

「質問に答えなよ。今まで君、どこにいたの？」

「ええっと、元の世界・・・です」

雲雀には先日、異世界から来たことがばれてしまった。

だから、別に言ってもよくね？ ああもう言っちゃえ、と投げやりで答える。

「突然行方不明になるからびっくりだよ」

「迷惑かけてスミマセンでした・・・」

「学校には『病欠』って届いてたけど、家にもいなかったしさ」

「迷惑かけてスイマ・・・って『イエニモイナカタシサ』・・・?」

ひっかかる言葉があったので、尋ねてみる。

「あの、私のいない時に何回きたんですか?」

質問に対して、普通に答える雲雀。

「ほぼ毎日」

「なにゆえにッ!!?」

「風紀委員の仕事をやらせようと思ってね」

「出張版スか!??ってそんなに仕事、多かったんですか?」

雲雀はハアッとため息をつく。

「当たり前でしょ。体育祭があったんだから」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
タイイクサイ？

「二つ・・・つかぬ事をお聞きますが、私、何日休んでたんですか？」

まさか・・・。

「三週間だけど？」

「ノオオオオッ！！？」

思わず叫んだ。

突然に、神羅の言葉を思い出す。

『時間軸の調整、忘れずになー』

「忘れてました――――ッッ!!!!!!!!!!」

ムンクの叫びの完全コピー『THE☆厘の叫び』。

リボンワールドのイベントを数個見逃したわけで。

「ショックすぎる……」

部屋の隅へとヨタヨタと歩き、体育座りをしてしくしくと泣き出す厘。

そんな厘に、雲雀は面白そうに言った。

「プチ鬱になってるときに悪いけど、今から学校行くよ」

「プチじゃないですよ・・・」

「もう授業始まってるけどね。いいから早く並中の制服に着替えて」

「やです。とーこー拒否です。行きたくありません」

「早く」

「タダイマオカケニナツタデンワバンゴウハ、ゲンザイツカワレテ
オリマセン」

「早くしろ」

「ハイ」

私が、魔王・雲雀に勝てる日は来るのでしょうか・・・？

数分後。

制服を着て、ローファーをはき終えた厘は、絶句。

「貴方、一体何歳ですか・・・？」

雲雀はバイクに乗っていた。

「後ろに乗って」

「ちょっとは常識に絡まりましたよ……」

もう雲雀に勝てないと理解した厘は、しぶしぶとバイクの後ろに乗った。

しかし、後悔すでに遅し★

「ひひひひひ雲雀サン……」

「やっと呼び捨てで呼ばなくなったね」

「じょじょじょじょ状況がそうさせてるだけですよ・・・」

厘はヘルメットの中で叫ぶ。

「降ろせエエエツツ！！！！！！」

風紀委員の腕章があるからか、誰もこのスピード違反のバイクを止めようとしなない。つか止めろ。頼むから、だれか止めてくれ。

ジェットコースター大好きの厘が言うのだから、それはそれとはとてもよろしくないスピードになっているのだろう。

「勝手にどーぞ」

「どーぞじゃねーよ！！私今降りたら死ぬわッ！！死ぬ自信あるわッ！！」

必死に叫ぶ厘。地の言葉遣いの悪さが出てしまってる。

雲雀は厘の態度に、更にバイクのスピードを上げる。

「ええッッ！？ちよっ雲雀サン！？」

「言葉遣いが荒いよ、君。どんな教育受けてきたの？」

「すみませんでした雲雀サマ！！マジでスピード落としてくださいっ！！」

逃げたい。逃げたい。
逃げたい。逃げたい。

厘の叫びも、ドップラー効果をともらったただとかW
W

No. 17 LET、Sお仕置き!?(後書き)

こんにちは。

「そーいや、厘って元の世界で死んでなくね?」と思い立って書いてみました。

グダグダという才能に磨きがかかってないといいのですがね・・

No. 18 LET、S爆発!?

あの時は死ぬかと思ったぜ。

でも、その後は、皆が病氣（仮）復帰を祝ってくれました。

優しかったね。雲雀とは大違いで。

そんでもってその日のイベントはイーピンのツナ暗殺未遂で。

なんも私、関係なく突っ立ってただけだから悲しくなったよ。

今日のイベントはというと。

「どーしたの獄寺君。」

「まさか美術の補習だとはおもっていなかったの・・・」

「はは、なんじゃそりゃ。」

ツナ、獄寺、山本の順番で話す。

「うるせーっどーみても富士山だろが！」

どーみてもヒヨロい木にしかみえない、アートじゃない物体を作りながら寺は怒鳴った。

今日は標的24のランボVSイーピンだ。

大人イーピンを見たかった私は補習はないが山本たちについてきたのである。

「（獄寺にもできないことはあるのね・・・。）」

勉強も運動もそれなりにできる獄寺の、唯一の弱みをにぎった厘は、小さくガッツポーズ。

初めて、獄寺に勝った気分だった。

「ガハハハ」

ツナの部屋に、ランボとイーピンが入って来た。

「これこれ若いの、危ないぞー。走ったらいかんぞー。転ぶと痛いぞー。」

「厘! ? なにその孫にいうような口調は! ? 」

「いーのいーの。ボスさんはちっせーことを気にしちゃいかんぞー。」

イーピンが机を走る。

ランボもソレを追おうとするが・・・

ドーンッ

ランボが獄寺の粘土を破壊した。

怒りの矛先は今度はランボに向けられる。

「お前今わざとオレの狙ったよな！」

ぎゅうううっとランボの首を絞める。

「（そろそろか・・・。）」

もう一回リボーンの漫画を復習したおかげか、だいぶ物語の流れは分かるようになっていた。

そして。

「子供をいじめちゃだめだって何度言ったら分かるんですか!!」

よく通る声のハルが叫ぶ。

「あ、厘さん。病氣復帰、おめでとうございます。」

ハルは私にむかってペコッと頭を下げた。

どーして知っているんだろう・・・？

「また勝手にあがってるし。」

ツナはうんざりしたような声でいう。

それで、ハルはイーピンに気がついた。

「貴方がイーピンちゃんですね。」

が、相手は冷たかった。（？）

「シューマイの化け物だ！（リボン翻訳。）」

「ぐすっぐすっ」とシューマイは泣き始めた。

当たり前前行為だが。

シューマイは、「近視なんですか？」と鞆から近視用の眼鏡を取り出す。

それをイーピンに渡した（いいんだろうか？）。

そして――

「女の子が見える。」

イーピンはハルを指差し言った。

「よかったです・・・。」

シューマイ・・・じゃない、ハルは安堵の息をつく。

そしてイーピンはそのままブロッコリーの化け物Ⅱランボをみる。

「馬鹿が見える。」

ランボはもつと酷く変換されてしまった。

イーピンは、早速ランボに餃子権をお見舞い。

「が・ま・ん・・・」と泣き叫ぶランボ。

「お前なんかしつぽ頭ー！！しつぽあたまあー！！」

すると・・・・・・・・さばあぁとイーピンから大量の汗が出る。

脱水症状とか起こさないんだろうか・・・・・・・・？

「人間爆発のカウントダウンだーっ」

ツナが真っ青な顔で言う。

こっからは原作通り。

や、別に説明がめんどくさいんじゃないんだよ？

ランボの十年バズーカーをカウントダウン中のイーピンに当てた。

どかーん、もくもくもく・・・・・・・・っと、煙が晴れて・・・

「ありっ！なんで？なんで出前の途中のはずなのに屋根の上にいるのかな？」

「いーぴん・・・、かわいい・・・。」

十年前の弁髪姿が想像できないくらい、大人イーピンは美人だった。

「イーピンって女の子だったのー！？」

ツナは思わず叫ぶ。

「いけない、ラーメンのびちゃうわ、川平の叔父さんうるさいのよねー。」

あ、沢田さんだ！こんにちは！」

イーピンはすごくいいスマイルでツナに挨拶。

ツナ&獄寺はイーピンに問い詰める。

ん？私？

私はそおっと沢田家を出る。

もうそろそろ、イーピンが爆発するから。

腕時計をちらっとみて、カウントダウン。

「5，4，3，2，1・・・」

「ゼロ。」

ドオオオオオン

爆発した。

「あははー、ツナがんばー。」

厘は無責任に笑って、

帰路に着いた。

「え、オチは!？」

No. 18 LET、S爆発!? (後書き)

パソ禁、出るかも・・・

そのときはみ、見捨てないでくださいネ!?
泣いちゃいますから!!

No. 19 LET、S壊滅!?

話を始める前に1つ。

私はとある普通のマンションにすんでいる。

（高級マンションとかじゃないからね。極めて普通のマンションだ。）

家から並中までの道のりの間にツナの家があるのだ。

だから、並中に行こうとしたら必ず沢田家の前を通るのである。

今日もまた、いつも通りに並中へ行こうとしたが・・

なんでしょうか、この物騒さは。

私はツナの家の前で立ち尽くしていた。

半分が銃を磨き。もう半分は弾の数を調べている。

一般ピーポーがみたら恐ろしい光景だ。

今日のイベントは標的28の「ディーノ再び」。

山本や獄寺が誘拐されたツナを追って危険を顧みずヤクザに乗り込む！

という感動的・・・ではないが、まあそんな話。

目の前にいる物騒なスーツの男達は、

キャバッローネファミリーのボスであるディーノさんの部下だ。

警察よ、こんな時のために住人を守ってあげてくれ。

そう思っていると沢田家の扉から、制服を着たツナが出てきた。

まだ一般ピーポーであるツナも目の前の出来事にびっくりしている。
(そりゃあな。)

私はそんなツナに近づく。

「ツナ、これを何とかしろ。」

「む、無理！　ってか厘！？」

話していると獄寺が出てきて、ツナに100%スマイルで挨拶をする。

「それよりなんスか、この連中は？」

一瞬で別人の様に目つきが変わる獄寺。そして、

「よお、悪童スモークン・ボム。」

「そのタトウ・・・跳ね馬のディーノ・・・！」

「めっさ美形・・・。」

ちなみにディーノ↓獄寺↓厘の順だ。

漫画でもカッコイイとやっぱ実物もカッコイイんだな、と実感する。

獄寺は犬の様に威かk・・・げほげほ。

とにかく殺^やる気マンマンだ。

が、

「何やってんだおめーら。遅刻するぞ。」

山本がツナと獄寺の肩をつかんだ。

やっぱり山本は空気洗浄機だ。

あ、そーいや今日空気洗浄機の安売りのチラシ入ってたなー 神羅
に買ってもらおう、前のお詫びもあるし。と考える厘。

「前のお詫び」というのは、厘が元の世界に帰った時に時間軸のせいで色々なイベントが見れなかったというもの。厘は食べ物の事、それから恨みなどは絶対忘れない。

そのことを勉強に使えよ、と思った方。貴方は正しい。

山本はディーノに小さく挨拶をし、「滝本、行こーぜ。」と厘を促して並中へ向かう。

「あいつは先代が傾けたファミリーの財政を立て直したのは有名な話っス。

マフィアキャバツローネファミリートつたら今じゃ同盟のファミリーの中でも第三勢力ですしね。」

流石マフィア。獄寺はディーノ、そしてキャバツローネファミリーの事を語る。

少し雑談をしていると――――

フォオオオオン・・・ギャギャツ

フェラーリ・・・だっけな？

車に関しては全く知識はないんだけど、一台の赤い車が私達のすぐ横に止まった。

そして・・・

ビュッと縄が飛んでくる。

「え!？」

縄はツナの体に巻きつき――――

「ウソー!？」

そのまま車は逃走、ツナは叫びながら連れて行かれた。

「ありゃ、ここら1帯をしめてるヤクザ、桃山会の車だな。
ヤクザといえバジャパニーズマフィアだ。大人マフィアに中学生の
お前らがかなうわけがねえ。ここは警察に任せろ。」

いつの間にかリボーンが厘たちの後ろに立っていた。

やっぱりいつ見てもリボーンは可愛いねえ。

と、一人関係ないことを考える厘。

「任せられません！」

「警察は頼んだぜ、小僧!!」

「帰ったらほっぺたぷにぷにさせてねー。」

「何関係ないこと言っただよ!!!」

厘は獄寺に怒られながらも、二人のあとを駆けていった。

「吐けよコラ！！！！」

「皆さん、ご愁傷様。黙って並盛中風紀委員（仮）にかみ殺されてね。」

「居場所教えてくんねーかな。」

なんか辺りにモザイクかけたくなるような戦場へと化していた。

一人は気絶。一人は泡を吹き。

約一名ストレス発散として暴れている。
(並盛中関係ない。)

雲雀と会話する事で疲れてんだヨ。

そんな時、ツナとディーノが姿を現した。

「十代目!ご無事で!」

「元気そーじゃねーか。」

おめーらも元気だよな。

呆れたように厘はため息をつく。

「何してくれてるんだ？おまえら。」

声ができる方に目を向けると。

100人が100人イメージするようなジャパニーズマフィアがいました。

おお怖。

と一人暢気がつっていると、ディーノが鞭を振るった。

姿はとてもカッコイイ。姿だけは。

問題はその後だ。

ベチッバチッガスッ

鞭が獄寺に、山本に、そして当のご本人に当たった。

私は・・・必死で避けた。死にたくないもん!!

思ったとおり、ヤクザは嗤う。

「こいつら皆口きけなくしてやれ!」

が。

ズガンッ ズガガンッ！

銃声が2つ。

それらは全てツナにあたった。

LET、S死ぬ気タイム！

つつかサブタイトルこれでよかったんじゃない？

ツナの両方の甲は元の数十倍のデカさになった。

「^{リ・ポーン}復活！死ぬ気でヤクザを倒す！！」

パンツ一丁となった（しかもハート柄）ツナは次々とヤクザを倒していく。

そして山本と獄寺も加勢した。

うーん、拳銃は使わないほうがいいかな、と厘は戦略を練っていたが・・・。

ヤクザの一人が厘に殴りかかる。

ぶちっと厘はキレた。

「乙女の肌に傷つけようとするなんて！」↑

とっさに出てきた回し蹴り。

ああゝっ!?! 誰だ今「こいつ乙女だったのか」って思ったやつは!?!

いまなら出張費無料で殴りにいってやるぞ、ああゝ!?!

と、読者に喧嘩を売っているうちに、

桃山会は壊滅した。

わー、すごいね。

その夜。

存在自体を忘れていた、
神羅にもらったケータイが鳴った。

『もしもし、厘。』

「切っていいですか？」

思わず言ってしまう厘。

相手は何をかくそう雲雀さんでした。

「私ケータイ番号教えた記憶ないんだけど？」

『僕が調べたのさ。』

「調べないでください。」

はあっとため息をつく。

雲雀ならやりそうな手だったのでもう怒る気力もない。

『今日は学校来なかったけど、どうしたの?』

「警察のお役にたっていました。」

『ついに頭が壊れたかい?』

「え、何その、ついに、って。私壊れる事前提?」

『じゃあ本気?』

「本^{マジ}気です。」

『じゃあ、明日、並盛病院来てよね。かみ殺してあげる。』

「話が繋がってません。」

『決定事項だから。』

「私にだって人権というものがあるんですよ・・・？」

なんとか口答えしてみたが、明日、厘の足が病院に向かっている事は決定だろう。

No. 19 LET、S壊滅!?(後書き)

まったく・・・

公文の英語の宿題意味分かりません。

猫なんて勝手に空飛べねーんだよ! わかったか! ? と紙きれに喧嘩売っています。

感想ください。

厘) 「話つながってなくね?」

黙ってろ。厘。

No. 20 LET、Sお見舞い!?(前書き)

前の二話は、消去して、そこに違う話の小説を書こうと思っております。

・・だって、あの2つは特にグダグダがヒドイ。

ですから、先にこちらを編集させていただきました。

N o . 2 0 L E T 、 S お見舞い! ?

「いくよ」

「え、ちょ、待」

「スタート」

「（雲雀イイイイイイ! ?）」

少し回想しよう。

「明日、並盛中央病院に来てよね」

雲雀からの指令。いや、命令。

説明すると長くなるが、雲雀は時間に厳しい。

放課後に書類の整理をしるとか見回りにいけとか、応接室に呼ばれることがあり、そんな時遅れてしまうとアラ大変。めでたくかみ殺されてしまうのである。

残念ながらそのシーンを見せようとすると、年齢制限が必要となってしまうのでロシアンシークレットとしよう。

とにかく、雲雀は本当に時間にウルサイ。

それを心得ている滝本厘サンは、10時ピッタリに並盛病院の雲雀サンの病室に到着しました。

「君が時間を守るなんて。天変地異でも起こるんじゃない？」

「そんな能力持ってませんよ」

ひょいっと、床に転がってる軀を飛び越え、雲雀のベッドへ向かう。

いつもは雲雀にぎゃーぎゃーと突っかかる厩にしては、この冷静なリアクションは珍しい。

なぜかというと、

‘雲雀の皮肉には決して突っかからない事。ストレスが増えるだけです’

今月の目標を達成すべく、雲雀の言葉を流しながら、お見舞いである花束（仏花ではない）を花瓶に入れ替えるからだ！！

このまま平和にお見舞い終えてさっさと帰ろっと。ツナの咬み殺されシーンは見たくないし。

「ところで厘」

「・・・」

厘は 必殺★聞こえないフリを 発動 した!!

「厘」

「・・・今日ハイイ天気ダナー」

ふっふふーんと鼻唄をわざとらしく歌って雲雀の言葉を見殺す。

‘雲雀の『ところで』は見殺す事。ロクなモンじゃない、

今月の目標Part 2。私はそれを遂行すべく、ガン見殺す。

が、

「咬み殺すよ?」

「ゴメンナサイ」

雲雀の口癖と、鋭い金属音と共に目標達成は見事粉碎した。武力はいけないと思う、とかぶちぶち呟く厘だが、体は正直だ。土下座しながら床に額を擦りつけている。

「厘。ゲームしようよ」

「ヤです」

キッパリと断る。

雲雀考案のゲームは、安らかに睡眠中の雲雀を起こさなければいいのだが、相手は葉っぱが落ちる音もキャッチする聖徳太子並の聴覚を持っている。（資料参考・家庭教師ヒットマンREBORN!）

しかし、断っただけで諦める雲雀ではない。

「君に拒否権ないから」

「私はイヌかネコですかッ!？」

「それ以下」

「滝本厘の存在全否定されました!!」

がーん、と驚愕を露にする厘。

その隙を突き、雲雀は問答無用のゲームを開始したのであった・・・。

さて、と。

厘は静かに椅子に座りながら、床に転がった屍達をじっと見つめる。

なんだろう、急に仲間意識が芽生えてくる。

かすかな寝息と共に、肩を上下させる雲雀。

あーあ、なんでマンガではカッコイイと感じるのに、コッチの世界ではムカツク口しか叩かないんだらうと――――

「・・・・・・・・」

ヤバイ！！可愛い！！雲雀の寝顔、超カワイイ！！

いつもの肉食動物っぷりが連想されない！何コレ！！

あどけない雲雀の寝顔に、興奮する厘。今の姿は変態サンといわれ
てもおかしくないだろう。

記憶だけに留めておくのはとっても残念なので、記念写真でも撮っ
ておくか！！

厘は、黒いフリルの付いた短いスカートのポケットから、ケータイ電話を取り出す。

しかし、とっても大切なコトに気づいてしまった。

ケータイのカメラをとるとき、シャッター音がするんじゃないか？と。

「・・・・・・・・」

――命を取るか、好奇心を取るか――

長い時計の針が、2回ほど回転する。

そして―――決意。

こんなチャンスあったまるか!!

トンファーごときでビビッてたら、ミーハーの名折れだッ!!

なんて、理解不能な思考回路を通し、ケータイのカメラでピントを調整し・・・

ばちーん。

「やあ、滝本厘」

結果..起きました。ハイ。

「おはようございます・・・」

保存の終わったケータイを床においたまま、厘は作り笑いで雲雀に答える。

チャキツとトンファーを構える死神。

死を覚悟し、厘はぎゅっと目を瞑ったが、

銀の凶器を振り下ろす気配はなかった。

「僕は安静にしてなきゃいけない身分だから、また今度にしてあげるよ」

「おオ、よかったー」

雲雀も少しは優しい所があるらしい。

私に明日の希望が差し込んできた。ヨカッタヨカッタ。

「で、さっきケータイで何してたの？」

笑顔が、凍る。

次の瞬間、私のケータイは驚くべき速さで雲雀の手元にあった。

そして、雲雀は……

「寝顔を撮ってたんだ、ふーん……」

だらだらと、厘の冷たい汗が流れていく。

そして、

‘写真 一件 消去，’

「消去————！！？」

「ケータイ全部壊されなかったんだから、まだ良いと思いなよ」

覚悟を決めて撮った雲雀の寝顔写真は、消去されてしまいました・
・残念。

「さて、と・・・じゃ、罰として林檎剥いて」

「・・・ハイ」

ヒドイ・・・と生気が抜けた厘は、言われるがまま林檎向きを始め――

「スミマセン・・・」

「なんか予想してたけどね・・・」

雲雀はハア・・・と嘆息する。

数分前にはまだおいしそうだった赤い林檎は見る影もなく。

物体Xとなっていた。

「君には料理の才能がないのかい？」

「・・・ないですけどなんか文句でも？」

「開き直ったね」

自分でも結構目の前の林檎にショックだったのか、雲雀に對抗する
厘のテンションはやけにローだった。

そんな時、

「え、雲雀さん!!・・・って厘も————!!?なんでココにいの————!?!」

ツナが、雲雀達のいた病室に入ってきた。

むっと、厘との会話に水を差された雲雀はツナに微量の殺気を向ける。

「あいかわらずテンション高いな沢田クン・・・」

二度の精神的ショックを受けた厘は、そのままふらふらと立ち上がり、ツナと入れ替わるように病室を出ようとする。

そしてすれ違いざまに、

「ツナ・・・頑張っつかみ殺されるがいいさ・・・」

「何だよその遺言っぽいヤツはッ!？」

ツナの叫びを無視し、厘は「そんじゃー・・・」と片手を上げて病室を出て行った。

ま、本当にツナはトンファアの餌食になってしまうのだがww

そして数分後――――

ドオオオオオオオン！！！！！！

イーピンらしき仕業の爆発が病院から遠ざかる厠にも聞こえた。

厠はくるつと後ろの病院を振り向き、静かに手を合わせたのでした。
・
・
・。

「ツナ・・・ご愁傷様」

No. 20 LET、Sお見舞い!?(後書き)

ハイ、編集しても私の文才では無駄です、ウン。仕方あるまい。

んで、話変わってですね。

最近、一ヶ月・二ヶ月近く更新しておりません。

大変申し訳ございません。

部活が・・・(ゴニョゴニョ

はつきりいつてこれからも平気で1ヶ月更新しない時があると思います。(汗

「更新が遅い(＋グダグダ、というのは伏せておきます・・・)のはイヤだ!」という方は他の小説をお勧めします。

・・・苦情は受け付けません、というコトですね、ハイ。

「別に更新が遅くてもいい」という方。(圧倒的に少ないと思われるますが)

これからも、この小説を、そして音無ソラを宜しくお願いいたします。

以上! 終わり!!! サヨナラ!!!

10月8日

N O. 20. 5 L E T、 S 番外編! ? (ケーキ食べたら出会いました) (前

ええっと、お見舞いの続きはN O. 20にあります。

見ていない方は前話までお戻りくださいまし。

No. 20. 5 LET、S番外編!?(ケーキ食べたら出会いました)

「まあまあ、厘。落ち着けて。」

「十分落ち着いているわよ・・・。」

「や。そのなんか負のオーラやめろ。なんか人の視線が痛い。」

「神羅あゝ。じゃあケーキおごって・・・。」

「なんでそーなんの!?!」

今の状況を確認しておく。

場所..並盛町

時 ..雲雀のお見舞いの帰り

人数..2人。厘と神羅

格好..厘を神羅が慰めている。

病院でのショックはまだ抜けておらず、

厘の魂もお金の単位がEURO^{ユーロ}のところで飛んでいってしまったている。

慰めるだけじゃ絶対抜け殻だろう。

神羅はそう結論付けると懷から財布を取り出す。

その中に、福沢諭吉が数人いるのをみて、

「厘！ケーキ奢ってやろっか？」

「ケーキ……。」

マッハの速さで厘の魂が本体へと戻っていくのが神の目で見えた。

「行くううううっ！！！」

目を爛々と輝かせ、厘は犬の様に背の高い神羅を見上げる。

はふはふという息をしていたら絶対首輪をつけられそうだ。

実際、神羅は厘に犬のしっぽとふさふさした耳が見えた。

今の厘にはケーキではなく、ドッグフードが似合いそうだという思いは秘密だ。

「厘・・。」

「なあに？ 神羅君。」

厘は上機嫌で神羅の問いに答える。

それに対して神羅はげっそりとしていた。

「どんだけ食べ続ければ気が済むんですか・・？」

財布の中に数人いた福沢諭吉が厘の胃袋に吸い込まれている。

「え、っと気が済むまで？？」

その笑顔は絵になっているのだが、残念ながら厘のテーブルに大積みになった皿がそれを阻止し、あまりにも釣り合っていない。

並盛町から少し離れた大きな街。

そこの一角にあったケーキ屋に厘と神羅は座っていた。

「好きなだけ食べていーぞ」と神羅が言ったのをいいことに、厘は何個もの（よりによって高いヤツばっか）ケーキを注文している。

はっきりいうと、店員の顔が引き攣っている。

のくせにまだ足りないらしい。

胃袋の中でピラニアを飼っているのだろうか。

このままじゃ、電車運賃もなくなってしまう。

「お願い、厘・・・勘弁してくれ・・・。」

「すみませーん。チーズケーキも一個ください。」

「神羅あゝ。好きなだけ食っていいって言ったじゃんけー。」

「限度というものがあるんだよ。」

結局、電車賃は残らず。厘と神羅は歩いて帰っていた。

「けっこー歩きましたぜ旦那。あとどれくらいあるけばいいの？」

「これの倍。」

「NOおおおっ!?!」

よりによって並盛町から遠く離れている。歩くと1時間半は余裕にかかってしまう。

しかも。

「なんで毎回毎回踏み切りとかで引っ掛かるんだよっ!？」

「知るかつ。」

歩きつかれた二人は、グチグチと文句を言いながら、踏み切りでとまった。

さっきから、随分と工事とか信号などで止まりっぱなしだ。

「私達不幸パワー持ってんじゃね? 上条○麻みたいに。あれ、あつてたっけ?」

「これだけすごいとそれだけしか考えられなくなるなー。」

ははは・・・と笑いあう二人。

だんだんと現実逃避したくなってしまふ。

その時。

「お兄ちゃんっ!!」

後ろから走ってきた女の子。

大体5，6歳だろうか。長く伸ばした水色の髪をしていて、とっても綺麗だ。

そして、その女の子は――――

「!っ」

踏み切りの向こう側の少年に手を振り、遮断棒をとおり超えようとする。

電車はもう近くに来ているっていうのに・・・

踏切事故で助かることは少ないんじゃないかなかったわけ？

とにかく、この女の子が飛び出したら絶対に電車に挽かれる。

助けなきゃ。

そう思った刹那、厘は遮断棒を乗り越えようとする少女を抱くようにして座り込む。

「な、なにするの!？」

「阿呆!死にたいのか!？」

「とにかく離してっ!!」

女の子はじたばたと抵抗する、その瞬間

すごい速さで電車が通り過ぎた。

顔を青くする少女。

「このままいってたら、アンタ死んでたんだよ?」

知らない人をアンタ扱いした私はそう言って少女の顔を覗き込んだ。

あれ、どっかでみた事あるような顔なんだけど・・・？

むっと考え込む私。そして少女を掴んでいた手をそっと離れた。

遮断機があがる。自動車、そして歩行者が動き始める。

「ブルーベルツ！飛び出しちゃ駄目って何度もいっているだろうっ
！！」

少女が手を振っていた少年——私より3歳程年下の子が、少女に近づく。

ブルーベル・・・。

「お兄ちゃん！」

少女——ブルーベルと呼ばれた少女は立ち上がり、少年の体に抱きついた。

ブルーベルって・・・まさか・・・

少女の綺麗な水色の髪をみて、厘は思い出した。

ブルーベルって真6弔花のブルーベルかつ!?

少年は私達にぺこっと頭を下げた。

「妹を守ってくれてありがとうございます。この子はブルーベル
といいます。」

少年は丁寧にお礼をいうが、私の耳はなかなかそれを拾ってくれない。

少女、ブルーベルをまじまじと見つめる。

気が強そうな目は、まさしくツナ達ボンゴレファミリーが未来で戦うミルフィオーレの守護者の一人、
ブルーベルだった。

10年後とそっくりだなー、でも以外に可愛いなーとか思いながら、
ブルーベルの兄の話の聞いたフリ。本気で、10年前のブルーベル

はすっごく可愛いです。マフィアっていうのが信じられないくらいに。

「ほら、ブルーベルもお礼言つて。」

ブルーベルは素直に兄の言うことを聞いた。

「ありがとう、お姉ちゃん。助けてくれて。」

ちよこつとブルーベルははにかんで笑った。

やべえ・・・めっさ可愛い・・・／／／／

「どういたしまして、私、滝本厘っていうの。よろしくね。」

ポーカーフェイスで倒れるのを踏ん張る厘。

「厘ってよんでね。」

笑顔でキメた。

「りん・・・？」

ブルーベルは、厘↓りんに変換するのに少し時間がかかったが、

「ありがとう。りん。」

呼び捨てかよ、と思ったが自分で言った事だしと結論付けて、

厘はブルーベルの髪をなぜた。

夜。

「やー、ブルーベル可愛かったなー!!」

神羅は何度目になるかわからない厘のセリフを聞きながら、

厘の（脅され）晩ご飯をつくっていた。

「（オレ、なんでこんなヤツトリップさせてきちゃったんだろうか・
・・）」

神羅の苦悩は続く。

N o . 2 0 . 5 L E T 、 S 番外編！？（ケーキ食べたら出会いました）（後書

やー、ワタクシブルーベルが結構好きなんです。

リボーンの隠し弾の四冊目、ね。以外に悲しい過去持ってたんだなあこいつ。的に。というかただMという人に洗脳されただけなんですけどね。

ぐだぐだだけど、時間があつたらなおしますんで。どうか見捨てずに宜しく願います。

No. 21 LET、S雪合戦!? (前書き)

10日以上かかってやっと終わったZE☆

ホントスミマセンでしたあ——！

あと、お気に入り登録15件に増えました。ありがとうございます
！！

夢オチじゃなかったらうれしいです！！

No. 21 LET、S雪合戦!?

寒い！寒い！寒寒寒！！

マフラー。手袋。コート。完全防備の私でも寒い。

昨夜、雪も降ったそうだ。

いつもだったらこんな寒い時には神羅君を脅S・ごほん、神羅に頼んで買ってもらったコタツの中に丸くなっているんですけどね？

しかし。

これには大切なワケがあるので――――

「俺達もたまにはチビ達と遊んでやろーと思ってな。」

「考えてみたら10代目はチビ達の世話ばかりですからね。」

「こんな日ぐらい手伝うぞ。」

「水くさいぞ沢田！」

「ツナはやっぱりボンゴレボスより保父さんの方が似合うと思うんだけどー。」

ディーノ↓獄寺↓山本↓極限男（話したことないし）↓厘の順だ。

なんだかいつも一人だけ周りとはズレているのは気のせいにしておう。

厘がいくら寒くても外に出ている理由――

それは、標的37の「雪合戦」に触れ合うためである。

ツナはジーンと胸を打たれたらしい。少し涙目になっているのが見

えた。

でも、次の言葉達でツナの涙はどっかに吹っ飛ぶ。

「やるなら雪合戦ですよね！」↑獄寺

「おー！！燃えるなそれ！！！」↑山本

「顔面狙う。」↑ヤケに黒笑している厘

「かってー雪玉作るぜ！！！」↑ディーノ

「合戦！なんていい響き！」↑極限男

「（いや！この人たち子供だー！！）」↑ツナの心の叫び

「チーム分けはオレが決めていてやったぞ。」

一瞬の早業で戦国時代風になった赤ん坊がどおんっという効果音つ

きで現れた。

突っ込みどころ満載だけど可愛いから許せるような気がしてくる。↑

「東軍はツナ・イーピン・フウ太・厘。白マフラーだぞ。

対する西軍はディーノ・獄寺・了平・ランボだ。赤マフラーな。」

獄寺の反論は一言で終わり、リボーンはルールを説明し始める。

それらは厘は元の世界によって全て記憶しているため、聞かなくても問題はない。

「雪玉と塹壕を作って30分後に開始な。」

小説というものはいいネ。時間がスムーズに流れていく。

「開始。」

ぶおっという貝の音で試合は始まる。

向こう側から極限男・・・改め了平が塹壕の前に出てくる。

定石どおりに、白マフラー軍団も山本フォームが出る――

ブ
ア
ッ

「わあ、すごい！」

「でた！山本のフォーム！！」

が。

バ
コ
オ
ッ

「え」

「なっ」

「そんななまくら玉。この極限ストレートの前ではマシユマロも同然！」

「流石常時死ぬ気男・・・。」

「ホントに京子ちゃんの血縁者なんだろうか・・・。」

ツナと厘はなんか言っではいけない事を呟き、両方の言ったことにうなずきながら恐ろしそうな目で未来のツナの部下を見つめる。

「極限連射^{ラッシュ}!!」

熊でも倒しそうな勢いだ。

「俺達も山本を援護しないと!」

「そうだね、ツナ兄^{にい}!・・・って厘姉^{ねえ}、なにやってんの?」

あら、ばれちゃった。

うふ、と笑ってフウ太に言った。

「やっちゃいけない事。」

1. 近くに転がっている石ころを調達。

2. 石ころを雪玉の真ん中につめる。

3. 発射！

「だってふつーの雪玉だったらあの人に勝てないじゃん。」

口を尖らせて弁解。

厘の『必殺！ 雪玉に石をつめる技！』はフウ太とツナの引き気味の目線であえなく中止となった。

無念！

原作通り、事が進んでいく。

おされ気味の白マフラーから、ひゅつと弁髪の子が塹壕の前に出る。

雪玉がボンッボンッと叩き落される。

これはまさか・・・と思った勘のよい方。

ご名答。将来有望な殺し屋ランキング第三位のスーパーホープ、

イーピンの仕業であった。

「やっぱすごいやイーピン！これで互角だよ！」

フウ太、ツナが叫んだ。

たしかに威力抜群だ。これなら優勝も夢じゃな・・・

思い出した。

風の向きで、餃子エキスがこつちの軍団の方に流れてくるんだった。
白マフラー

「うがっ」

「なんだ・・・この空気は・・・。」

「ぐっ。」

すっごく苦しいんだけど・・・

にんにくの匂いで鼻がいつぱいでなんかもう・・・っ

これは新手の拷問でしようか級である。

「弾幕がうすいわ！光る玉はもらったぞ！」

了平が叫んだが、そんなのも気にしてられない状況。

「ピンチだよツナ兄！」

「わかってるけど・・・。」

「やっべ。」

「ツナ・・・とりあえず鼻水と涎拭きましょ・・・？」

喋るのも辛い。ツナなんか今のこの姿を京子ちゃんに見られたら絶対振られるであろう。

皆が負けを覚悟した途端、

ドカアアアンッ

「ば、爆発・・・？」

「うお！無念！！」

了平が爆発に巻き込まれた。

「10代目。スパイ活動が終了したのでそちらに戻ります!!」

スモーキング・ボム。あっさり寝返り（笑

ということで、赤マフラーは遊びつかれて寝ているランボを除き、
ディーノ一人だけになったかと思われたが。

「ならば我々も！」

「?」

あら不思議。雪の下からスーツ姿の中年男が数人出てきた。

「ボスを守——る!!」

こんな大人になりたくないな・・・。

滝本厘（13歳）はキャバッローネのファミリーの方たちを見てそう決意したのであった。

「こんなんでいいのかよ、審判！」

「うん、予想どおりだ。」

「お前また遊んでんな！」

ぎゃあぎゃあど騒ぐりボーンとツナ。

「これでボンゴレ対キャバツローネってわけだな。なら話が早い。」

「果てろ!」という獄寺の名言とともにダイナマイトがばら撒かれる。

ヤベえな・・

厘は宙に放たれたダイナマイトを見て焦っていた。

今の今まで忘れていた事があったのだ。

休日でも、並中愛する風紀委員長がこの騒ぎを窓から見ているであろう。

絶対に、後で「風紀委員のクセになんで止めなかったの？」的な理由でかみ殺されるだろう。

そお・・・っと厘は後ろにある校舎の、応接室の窓を振り向いてみた。

「?。」

すぐに振り返る。

・・・視線があってしまった。

その目は「かみ殺してあげるから大人しく待ってるんだよ。」という意味がこめられていた。

雲雀と応接室で長く時間を過ごす厘は、雲雀の表情から考えが分かるようになってしまっていたのだ。

嗚呼嬉しくない……。

帰りたい……

しかし、長い付き合いの厘にはわかっているのである。

「待ってろ」といわれた時に待っていないと。わざわざマンションまでやってきて、家のドアを破壊してまで土下座を数百回とさせられる羽目になるのである。ついでに「お詫びとして作りなよ」とご飯も食っていく。（んで、「まずい」といわれかみ殺される。）

つまり、ここは意地でも帰ってはいけない。

ここから、厘の違う意味での恐怖の雪合戦が開始されたのである……

・。

一人パニックになっている間にビアンキ・ランボ・イーピンの第三勢力誕生。

え、イーピンついさっきまで味方だったじゃん!? という厘の心の叫びは誰にも届かない。

というか誰も聞いてくれない。

孤独って寂しいワネ・・・

なんて感傷に浸っている厘の頬に雪玉が掠めた。

厘の頬が少し裂かれる。

「・・・え？」

ビアンキとディーノが叫ぶ。

「油断大敵毒入りボーボーよ。」

「なるほどそっちがその気なら・・・」

実弾入り雪玉！！」

ビアンキたち、『毒牛中華飯』はポイズン化した雪玉を投げて、ディーノたちキャバッローネファミリーは雪玉の中に、ね。実弾が入っているというオソロシイ物を発射する。

マジですかあああああ！？

孤独の悲しみ（？）も忘れて叫ぶ。

「今のうちに行こーぜっ。」

殺しの部類に入る雪玉を持つ二つのヤヴァい軍は、ボンゴレ組の存在を完璧忘れて危ない雪合戦を開始。

それをみた、未来のボンゴレボスより数百倍リーダーシップを持つ山本が、厘たちを促した。

「ツナ・・・負けていられないねっ!!」

「なにをだよ!」

よく分からない厘の言葉はすぐにツナに突っ込まれた。

・・・ブシュウウとかズガガガとかR15の効果音をバックに。

その時、厘は痛い殺気を感じた。

信じたくないね。現実逃避したいね。

何を隠そう、その殺気の震源地は応接室である。

『今すぐそっちへ行くからね。大人しく（・・・）待ってるんだよ。』

テレパシーだろうか。なんか恐れている声が聞こえた。

とたんに顔が真っ青になる。

信ジタクナイ。信ジタクナイ。信ジタクナイ。信ジタクナイ。信ジタクナイ。

連呼しながら厘は応接室から3階、2階、1階と鋭い殺気が降りてくるのを感じた。

ヤバイね・・・。

ついでに、

「そーは」 「させないぜ、ツナ!!」

背後の出来事もやばいね・・・。

実弾入り雪玉&ポイズン雪玉がこちらめがけて投げられる。

はつきりいうと、ホラー映画より怖いよ。

向こうの世界では「ツナたち大変だなー。」とか暢気に笑ってたのに、
いざ体験しようと思うとそれなりの覚悟がいる。

ツナは見た目的にはダメダメだけど、実は度胸が人一倍なんだろう。

ツナのいろんな意味でのすごさを知った厘であつた。

「やっぱり我慢できないよ。皆そろってるんだもん。ランキングせずにはいられないよ。」

フウ太のランキングする時の無重力のおかげで危ない2パターンの雪玉を回避。

ホント漫画の世界ってすごいと思います。

フウ太はランキングでの策を提案し、獄寺がダイナマイトを投げる。

どがーん。ね、どがーん。

『早く止めなよ。』

雲雀からのテレパシー（というか厘の想像の声。が妙にリアリティーがあって怖い）が聞こえる。

そこからは原作通り物事が進みました、というと石を投げられるので一応説明しておきましょう。

山本がディーノと本人曰くラジコンを追いかける一騎打ち。

しかしながら、皆様お忘れでないでしょうか。

え、私の存在？誰だそんな事いったヤツ。ぶっとばすぞ。

はい、よい子の皆は正解！　キャバツローネファミリーのボスさんは、周りに部下がいないとダメダメになってしまう、究極のボス体質をお持ちなのです！

「ミスった!!」

「なにをミスったらこーなるんですか——!!?」

会談からディーノが雪だるまとなって転げ落ちてくる。

わざとだと思えないのは気のせいだろうか。

……気のせいだ。そう思わないと精神的にキツイ。

「ダイナマイトでとけた雪玉にあいつを落とすつもりだ。」

「あいつ・・・？」

「エンツィオ！！」

ディーノ、リタイアしたにも関わらず、やっぱり迷惑。

山本との一騎打ちの際にコートの裏のポケットから落としたようだ。

このメガエンツィオのおかげで、たしかビアンキ師匠、イーピン、フウ太、ロマーリオ・・・そしてビアンキの顔をみて倒れるという変わったルートで獄寺がリタイアする、はず。

でも、ね。その人達は漫画の役者エンツィオに蹴られよーが踏まれ

レギュラー

よーが命の保障はあるわけだ。

しかし、トリップしてきたイレギュラーである私、滝本厘は命の保障は

ない。

気力で逃げるしかないのだ。

「え、もしかして残ったの俺と厘だけ——！？」

はい。気力で逃げましたさ。

あと数ミリの気力がなければサヨナラだったけどネ。

とにかく、この状況で逃げ切れた私はすg・・・

「ぐは!？」

なんの忠告もなしに、酸欠状態になる。

誰かにコートの襟を掴まれているのだ。

振りほどこうにも振りほどけない、なんという力。

まさか・・・

「あの、つかぬ事をお聞きますが・・・」

「何だい？」

「雲雀、でございましょうか・・・？」

「そうだけど。」

「Noooo!?!?」

さらっと言われたね、ウン。ちょっとは否定してほしかったな。

とにかく、群れてた&校舎の破壊でかみ殺されるであろう。

どーやって逃げ出そうか・・・そんな事を考えていたとき、

「あ、いた！レオンTURBO^{ターボ}！」

「こんなんで勝っちゃっていいのかな、後で恨まれないかな・・・？」

残ったツナがレオンターボを追いかける。

「雲雀、放して下さい。」

「やだ。」

「すっげー苦しいんですけど。」

「僕には関係ないよ。」

「そーだけどさー、と雲雀の無茶苦茶な理由にハア・・・ツとため息をつく。」

今日が命日にならないためにもぜひとも理由を考えなければならぬのだ。

久しぶりのだめっぷりを発揮したツナ。足が滑って見事にコケる。

雪に倒れこむツナの前方を走っていたレオンターボは、ほかの誰かによって取られた。

その『誰か』はというと――

「何これ？あとそれとデかいカメ。」

「ヒバリさん！！ってかなんで厘捕まってんの！？」

「つなあゝへるぷ。」

雲雀を見て、ツナの顔がサッと青くなる。

「なんでヒバリさんが日曜日にく!?」

「せっかくの雪だ。雪合戦でもしようかとね。」

「といっても群れる標的に一方的にぶつけるだけだけど。」

「（なんでこの人捕まんないのー!!!?）」

そりゃあイロンナ力ちからをお持ちだからね、呟いた途端、襟から手が離された。

「死ぬかと思った・・・。」

そのまま厘は抵抗なく雪に倒れこむ。

雲雀は手に取ったレオンターボを（すごいスピードで）ツナに向かって投げようとする。

「ひいっ!・・・?」

ツナは情けない声を上げてなんとか顔面を盾で守るが――――

「と思ったけど、風紀委員の仕事がたまっている。

今日はこの風紀委員を回収しにきたただだから。またね。」

「回収いうなー！」

結局暴れなかった雲雀は雪の上に倒れている、見た目重症患者の厘の襟を、

今度は優しく引っ張りながらぶら下げて校舎に戻っていった。

ずるずると雪に足跡を残す重症患者は、雲雀に惚れているイーピンを盾にしていたことに気づいたツナをほほえましく（そんな状況じゃないけれど）眺めていた。

校舎の中に入る。

それを気に、ちょっと問いかけてみた。

「雲雀。」

「何だい？」

「か、かみ殺す？」

「当たり前だよ。」

「う・・やっぱりかあ・・。」

雲雀のトンファーはだいぶ慣れてきたが、それでも痛いものは痛いのだ。

「たっぷりお仕置きを受けてもらうよ。」

「たっぷりいやだあゝ、お仕置きいやだあゝ。」

数分後、救急車に運ばれている自分を想像してしまう。

「私だってまだ若いんです！！死にたくないんです！」

「知らないね。」

「一言ですか！？」

「他になにか言ってほしかったの？」

「ぐっ、痛いところを突いてきますね……。勝てない……。」

「僕に勝とうとするなんて百年はやいよ。———厘。」

「ふえ？」

突然名前を呼ばれるもんだから、思わず変な声がでる。

「そろそろ敬語、使わなくていいよ。」

「……え？」

びっくりしてしまう厘。

「呼び捨てと敬語のアンバランスさが気になるだけだよ。」

ふうん、と呟く。

引きずられているので、振り返っても黒い学ランしか見えない。

それでも、

「雲雀……。それはどーゆー心変わりっすかねー。」

「別に。」

「照れてたりする？　ってうわ！！」

首を押さえていた手をイキナリ離された。

雲雀の手で体を支えていた厠は後頭部を床に打ち付ける。

「いってえ。ジョーダンだっつの・・・。」

座り込んで頭を抑える厠を背中に、雲雀はすたすたと先を歩いていた。

そのポーカーフェイスに、わずかに赤みがさしていたことは誰も知らない。

No. 21 LET、S雪合戦!?(後書き)

すみませんでした。ホントに。

それと、読者の皆様!! もうちょっと先でまた番外編をやりたいと思ってます! それで、厘を誰かと絡ませようと思っています。その人物で只今絶賛お悩み中ですので、アイディア、募集しております!!

率直に言えば、ネタをください。マジで。

花粉症でずびずびいっている音無はまた今日中にもう一話更新できるかも、です。たぶんできないと思いますが、できたらまた後で。それでは。

N o. 2 2 L E T、 S お花見! ? (前書き)

前話の雪合戦、終わりました!

ホントにすみませんでしたあ!!

No. 22 LET、Sお花見!?

お花見とは、桜の花を観賞することです。

平安時代の貴族の間では桜の下で花見の宴が催されました。

これが武家社会にも受けつがれ、その一方農村でも花見が催されていたといわれます。

江戸時代には貴族の花見と農村の花見が受け継がれ、庶民の間でも花見の風習が定着しました。

この知識、一体どこで役に立つのでしょうか？

只今、ケータイがぶるぶるいってます。

誰かからの電話です。

なんとなく相手はわかるので、出ないことにしました。

プルルル・・・

プルルル・・・

プルルル・・・

プルルル・・・

何回かけてくんだよ、アイツ。

下手すりゃ一日中ずっと鳴り続けるぞ。

プルルル・・・

着信拒否。

プルルル・・・

着信拒否。

プルルル・・・

着信拒否。

この動作だけで今日のイベントは終わると思う。

イベント・・・？

チラッとカレンダーを見て思い出す。

今日・・・リボーンの標的43の『お花見』じゃね？

そう思い立った瞬間、近くにあったスプリングコート（ダッフルコート）っていうのかな？）に袖を通して玄関に向かう。

その時厘は完全に忘れていた！！！！

『お花見』にアイツが来ることに！！

ピンポン

インターホンを押す。

「はい・・・って厘!？」

目の前の扉から、ツナが顔を出した。

「ツナ君、あーそーぼっ！」

「子供かよ！」

向かったのは沢田家。

花見に行く際に合流しようと思ったのだ。

「ちょうどよかった。今厘を呼びに行こうかと思ってたんだ。」

「ん、どっか行くの？」

感づかれてもアレだし、とわざとボケてみた。

ツナはにっと笑う。

「花見だよ。」

久しぶり、三ヶ月ぶりのイベント。結構楽しみである。

十数分歩くと、桜の木がいっぱいの綺麗な場所を見つけた。が、

「ここからは立ち入り禁止だ。」

輝かしいリーゼント姿の学ランがぬつと現れた。

「この桜並木一帯の花見場所は全て予約済みだ。出てけ。」

なんかどっかで見たことがある顔だ・・・。

ついによく見る学ラン・リーゼント・腕章の3コンボだ・・・。

ようやく厘はこのお話の内容を思い出す。

一気に冷や汗が吹き出てきた。

どさっと学ランが倒れる。

獄寺の膝がみぞおちにヒットしたらしい。ご愁傷様。

そして――――

「何が騒々しいかと思えば君達か。――厘。」

「ゲッ？（―”―）」

一番聞きたくない声。

一応スライディング土下座をしておく。↑

「スミマセンでしたああああ！！」

「ふうん・・・わかってるんだ。」

そっと見下ろしている雲雀をみる。

あとでたっつっつぷりお仕置きするからね的な顔だった。

ついでに雪合戦のときの分もという顔でもあった。

怖えええええ・・・

やられた風紀委員を見て冷たく言う。

その風紀委員からすれば、死刑宣告のようなものだろう。

「弱虫は――――土に還れよ。」

ガッとトンファーで風紀委員を殴る雲雀。

「！ 仲間を！」

「見ての通り、僕は人の上に立つのが苦手なようですね。屍の上に立つ方が落ち着くよ。」

「口調かけーけど内容はめっさ怖いよ雲雀君。」

同時に、シャルの場違いな声が響く。

「いやーっ絶景！絶景！ 花見ってのはいいねー♪
っかーっ やだねー男ばっか・ん、この娘誰？」

そか、シャルと話すのは初めてだ。

100万ドルの笑顔で挨拶。人は見た目が大事っスからね。

「滝本厘っていいます！宜しくです！」

「厘ちゃんかーよろしくな。」

よし、原作キャラとまた一人出会った！

心の中で密かにガッツポーズしながら、抱きついてくるシャマルを避けた。

「赤ん坊、会えて嬉しいよ。」

雲雀が嬉しそうに、そして好戦的に笑う。

「オレ達も花見がしてーんだ。どーだヒバリ、花見の場所をかけてツナが勝負すると言ってるぞ。」

「なっ…何でオレの名前出してんだよ——！！！」

必死で慌てるツナ。そりゃそうだ。

「ゲーム…いいよ、どーせ皆潰すつもりだったしね

じゃあ、君達3人と、それぞれサシで勝負しよう。

お互い膝を付いたら負けだ」

雲雀は言い、小さく「厘」と呟いた。

「私、ツナとお花見するために来たんだよー？」

「君に拒否権はないよ。」

「うう・・・っ。」

厘はどうやら雲雀側となってしまったよう。

シャルが雲雀に近づく。

「へー、オマエが暴れん坊主か。いーねー、青春だねー。」

雲雀は短く一言。

「消えろ。」

「のへ——っ!!」

「(医者いなくなった————!!)」

そして、獄寺が雲雀に向かう。

「テメーだけはぶっ飛ばす!」

「いつもまっすぐだね、わかりやすい。」

ビュッ、とトンファーで殴りかかる雲雀の攻撃をすれすれで避けた獄寺は、

「ぼ・・ぼむすれっず・・。」

THE☆新技。噛みそうだけど。

が・・

「!」

「厘!？」

ツナが叫ぶ。

すでに短くなった導火線は、雲雀・・・

そして、その近くにいた匣を巻き込み、

「果てな」

ドガアアン！！！！！

爆発した。

「厘・・。」

「滝本・・？」

山本と獄寺がぽつと呟いた。

その時、

「で・・？」

「ごほっごほっむせたあ。」

煙の中から二つの声。

「続きはないの？」

「獄寺あゝ恨んでやる・・げほっげほっ。」

無傷の雲雀・そして厘の姿がしっかりとたっていた。

「なっ・・・トンファーで爆風を!？」

無事な厘に安心しながらも、驚きを隠せない獄寺に向かって雲雀は鮮やかにトンファーを振るう。

「二度と花見を出来ないようにしてあげよう。」

なんとかかわす獄寺だが、しゃがんだため膝をついてしまう。

「獄寺は膝をついた。ストップだ。」

リボーンがそう言うが、そんなんで止まる雲雀ではない。

「やだよ。」

ヒュッと雲雀はトンファーを振り上げ――。

キン！！

金属音。

名づけて『山本のバット』がトンファーとぶつかり合った。

「次、オレな。」

「山本！！」

「・・・！」

不満そうに顔をしかめる雲雀。

「これならやりあえそーだな。」

山本がにっと笑って言う。

しかし、雲雀は余裕の表情。

「ふうん・・・」

どーかな？

僕の武器にはまだ秘密があつてね」

「？ 秘密・・・！？」

山本がフシギそうに雲雀を見る。

するとトンファーがジャキツと音を立て。

どこを触ったのか、仕込み鉤が山本のバッドを掴んだ。

「ぐわっ」

そのまま投げ出される山本。

厘は山本に駆け寄り、

「大丈夫？」

「ああ・・・怪我はしてねーみてーだ。」

「そう・・・よかった。」

にっこり笑うが、厘は獄寺を見てじっと睨む。

・・・睨み返してきた。

ガン付けには勝ち目がなさそうなので、そのまま首ごと視線をそらす。

そんな様子を見て、雲雀が不機嫌になる。

そして、リボンがツナに死ぬ気弾をうつ。

「さっさと暴れて来い。」

ズガンッッ！！

「リ・ボン復活！！ 死ぬ気で雲雀を倒す！！」

レオン———!!」

レオンははたきが変わる。

はたきって武器として使える・・・ようだ。威力弱いけど。

「うおお!!」

「君は変わってるね。強かったり弱かったり、よくわからないから・
・

———殺してしまおう。」

すごい殺気にりんの体がぴくりと震えた。

「だぁ!!」

ギインギインと言う鋭い金属音に対抗するぽふ、ぽふという雰囲気崩れる音がする。

そうすること五分。シュウウウ・とツナの夢の（？）死ぬ気タイムが終わり、顔が真っ青になるツナ。

ソレに対してお構いなしに振り上げられるトンファー。

だが――――

膝をついている雲雀がいる。

「わりーけど、超えてきた死線の数が違うのよ。

ちなみにコイツにかけた病気は桜に囲まれると立っていられない、『桜クラ病』つってな。」

この病気が、黒曜編に響くとは、まだだれも予想していなかっただろう。

雲雀はふらふらと立ち上がると、

「約束は約束だ。せいぜい桜を楽しむがいいさ。

厘。行くよ。」

「えー、私ツナと来たのにーっ。」

「知らないね。それと、応接室まで君のテレp・・・」

「わーっ!!」

慌てて『テレポート』と言おうとした雲雀の口を塞ぐ。

『ツナ達には言っていないの! そのキーワード禁句!!』

『ふうん・・・貸しができたね。』

『ギクッ。』

小声で話し合う二人。

そんな様子を一同は不思議そうに眺めていた。

N O. 2 2 L E T、 S お花見! ? (後書き)

ネタくさいいいいい

No. 23 LET、S新学期!?(前書き)

厘と絡ませるキャラ、ノントルマS様、帆乃女様、有難うございます!!

参考にします!!!!!!

まだまだ募集中です!!

できれば、この小説をお気に入り登録してくださっている、17名の神様の意見も聞いてみたいと思います!!

それでは、音無のグダグダワールドをどうぞ♪

No. 23 LET、S新学期!?

新学期です。

中2です。

進級です。

このリボンワールドでは知り合いがほとんどいないので、残念なことに「進級祝い」はもらえませんでした。

すっげーショッキングでした。

その翌日、神羅の体はバンソーコーだの包帯だの、いっぱいはって・巻かれていました。

無意識って怖いネ、と実感しました。

こんにちは。忘れないで、滝本厘です。

さっきも言ったとおり、今日で並盛中学二年生になります。

「んで、雲雀ィ〜！元気〜！！」

「ウルサイな。耳元で叫ばないでくれない？」

「どーも人に接するような態度ではない！！幼稚園の先生に言われなかったか！？」

『話をしている人の目を見なさい』って！！」

「新学期っていうのに、君はなんにも変わらないね。テンションが高い。」

「残念！滝本厘さんは年中無休、24時間ハイテンションですよーだ。」

「かみ殺していいかい？」

「スミマセンでした。滝本厘、新学期から7時〜11時までの営業となります。」

やっぱり新学期になっても権力は変わらない。

「というかさあ、最近、読者に私の存在が忘れられてないかとめっさ心配なんすけどっ！！」

「だれも君の存在なんて覚えてないよ。というか読者って何？」

「恐るべし、時代の波!!」

「聞いてる？」

「ぶ・・武力はいけないと思いマース・・。」

一瞬の早業で、厘の首元にトンファーが突きつけられる。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
いイイイイ!!!!」

厘はごめんなさいを連呼し、やっとトンファーが首元から外された。

朝。春らしい朝日を浴びる校舎の一角――

つまり、応接室で雲雀と厘は騒いでいた。

・・・もっぱら騒いでいるのは片方だけだが。

厘は目を閉じて、ふっと息を吐く。雲雀相手には、どうしても休憩が必要である。

再度目を開けると、厘の瞳は雲雀ではなく、窓の外が映っていた。中学の扉を通ってすぐそこに、何枚かの紙が、ボードに張られていた。

その紙は、クラスの名簿。

つまり、「クラス替え」ということである。

「よかったな、沢田。」

「ツナ君、今年度もよろしくね!!」

「ここであつたも何かの縁だ。よろしく! ツナ、獄寺、山本!」

「こっちこそよろしく! 厘、京子ちゃん!!」

花ちゃん、京子ちゃん、厘、ツナの順番で軽うく挨拶をした。

山本はやけにフレンドリーによろしく、と、そして獄寺は非協力的に「ケツ」と返された。

ちなみに秘密だが、厘含めてこの6人は元々、クラスがばらばらだったらしい。が、厘はこの並中の頂点に君臨する風紀委員長様に頼み込んで同じ2-Aにしてもらったのである。

・厘は、初めて風紀委員に感謝したときであつた。

そして――――

「さあ、席に着けよ。今日は担任に不幸があつたので、代理のリボ山です。」

「「（また出たー！！）」」

厘とツナの考えが見事にシンクロシンクロナイズした。

昨年度、厘は恐怖の授業参観を体験している。

その時の感想は、と聞かれると、『恐ろしい ああ恐ろしい 恐ろしい』（五七五）。

・・・極めて単純な俳句であるが、これがなかなか使えるんだね。

「腹減った」バージョンも作れる。あ、言っておくけど、成績表が気になる人は、国語の時間にコレらを使輪ないほうがいいぞ。作者と同じ道を辿る事になるからね。

と要らない知識を披露した厘を置いて、話はどんどん進んでいく。

「さっそくだが、今日はクラスの代表委員を決めるぞ。」というリボ山が言うと、おっさん生徒で、地元のトマゾファミリー8代目候補の家庭教師でもあるマンガスタが、ロンシャンを推薦する。

それに対抗するかのように、不良生徒で、ボンゴレ10代目ボス候補の右腕候補でもある獄寺も、負けじとツナを代表委員に推薦した。

まさに、ボンゴレV^{バーサス}Sトマゾが、ボスの座……ではなく、代表委員の座をめぐって、戦いが始まる——！！！！

と、かつこよく脳内アナウンスを務めさせていただく滝本厘は、ロ
ンシャン・ツナの自慢(?)、「テストで赤点しか取らないこと」
でしょっぱなからずっこけた。

恥じるべきことを自分から言っただけという、偉業を成し遂げたト
マゾ代表、ロンシャンに賞賛ではなく哀れみ÷同情×非難の視線が
クラス中から送られ。

その後も、トマゾファミリーは良い所をアピールしている・・・つもりらしいが、逆にイメージダウンの所を紹介し続け、いったん勝利の女神はボンゴレに微笑んだかと思われた。

しかし。

「ロンシャン君、こっち向いて！。」

推薦者、マングスタは片方の耳を押さえて、小型中の引き金を引いた。

ズガアンツと銃声がした。ロンシャンが床に倒れこむ。

クラス中がざわめき・・・

「お先真っ黒こげ。過去も真っ黒こげ。」

ロンシャンは、懺悔するかのように泣く。

LET'S 説明たあいむ!!

マングスタが撃ったその弾は嘆き弾という、トマゾファミリーの秘弾。

撃たれたものは、一度死んでから 自分を嘆きながら生き返るとい
う、それだけ聞くと特に意味のなさそうな弾だが、

「笑顔の下にこんな悲しみを背負っていたなんて。」

「学級委員くらいやらせてやろーぜ。」

「そーだね。」

その途端、マングスタの顔が華やぐ。

「嘆き弾はその悲しみゆえに、周りの人間を同情させることができるのです。」

・・・メーワクな弾だ、と思うのは厘だけではないだろう。

一度はツナの方に傾いていた天秤。が、それは嘆き弾という秘弾であつさり逆に傾いてしまった。

負けたご本人は「よかった・・・」と肩を撫で下ろしている。

ダメツナと呼ばれることだけあって、いちいち負けに気にしないのだろう。

でもまあ、厘はウジウジとした性格より、負けを受けとめる性格の持ち主の方が好きだ。

「ツナ、まあダメツナの割には頑張ったんじゃない？」

厘はツナに近寄り、ポンつと肩を軽く叩く。

「わりにはってなんだよ!？」

言い返すツナを、厘はうふつと笑ってスルーした。

No. 23 LET、S新学期!?(後書き)

やっと・・・

やっとリボーン33巻が買えたー!

「遅っ!」と自分でも思いましたが、ゲーセンだの、CDなどで財布がぺっちゃんこになる悲劇が・・・

以外にシモンファミリー好きなんですよねー。とくにアーデルハイとが♪

No. 23. 5 LET、S番外編!? (着地失敗) (前書き)

パソ禁出てたんですが、ちょいっとアクセス解析を覗いてみたら、やべーな。悲惨だな。言葉にできないな。

というワードしかありませんでしたので、夜の二時から創作！めっさ眠いので、文章表現が間違っていたり、誤字、脱字があったら感想の「悪い点」までlet、sgo!!

N O. 2 3. 5 L E T、 S 番外編！？（着地失敗）

ふっと意識が飛び――――

気づいたときにはもう遅かった。

「クフフ・・・」

暗く、じめじめとした場所。ところどころ崩れている床や壁。

「クフフフ・・・クフフ・・・」

独特の含み笑い。

相手は楽しそうに笑うも、その声の主から発せられるさっきは尋常じゃない。

「く、くふふ・・・」

信じたくない現実と今の状況が重なるので、向こうに合わせて笑ってみる。

まだそんな季節でもないけれど、背中につーっと流れる雫。

「クフフ・・・」

「くふ・・・ふふふ・・・！」

細くて、折ろうと思えば折れちゃうような。でも、それで何かを突き刺せるくらいの鋭い槍の矛先が、厘の首にぴったりと突きつけら

れていた。

「どなたですか？」

「・・・。」

一言、言おう。言わせてもらおう。

やっぱりそーなるのかあああああああ！?!?!

理由は・・・わかるだろう。旅行帰りの惨事というモノだ。

このシーズンはロンシャンたちのイベントだろう。

しかし、厘は特別ロンシャンなどのトマゾファミリーが好きなわけでもない。

そんじゃ、私、この世界にいる意味なくね？

というワケだ。

元の世界っていうのは・・・んまあ、十文字でいえば『トリップしてきました』。

・・・自分でも忘れそうなことだが。↑

はい、回想しゅーりよっ☆オツカレーツ☆

厘は場違いな笑顔を作る。

世間はこれを「作り笑い」とか、「営業スマイル」とか言うそうです。

「どうして笑っているんですか？」

「世間はこれを「現実逃避」というんですよ」

「そんな事、知りません」

「（くっ、相手が真面目すぎるっ！！雲雀よりムズいぞ今回はっ！？）」

んで、ここで痛いミス。

瞬間^{テレポート}移動用のために頼りn・グオッホンッ 神様から貰ったカプセル。

便利なものにも必ず不便なモノがついてくる。(叔母さんの名言)

このカプセルは、意識が途切れるほんの前に願った場所に着地する
そう。

そして、リボンワールドに旅立つ前に、黒曜編のトコを読んだの
が失敗でして・・・

どーやら私、「骸に会いたいっ!」と思っちゃったらしく。

その願いは今、叶えてほしくなかったんですが、

今現在、私の目の前に、なっぽーさんⅡ骸がいます。

そしてその憧れの骸は、

私に向かって殺意がすげーです。

「誰ですか、貴方？」

骸が再度、優しく尋ねる。でも、その優しさの裏には「今言わなかったら殺すぞ」オーラが大量に放出されていた。

状況を言うと、私は座り込み、骸はそんな私の首に三叉の槍を突きつけている。英語で言うと『いんぐ』。

「た・・滝本・・です」

「名前は？」

「・・・」

「ないんですか？」

「ち、ちげーっす。厘だよ厘。お前の殺気が痛えんだよオオオオオオ
！！！！」

「変わった方ですね」

「う・・嬉しくない・・」

『危険人物ではない』ということ判断したのか、彼の武器である三叉の槍の先は床へと向く。

「そういえば、厩は先ほど何処から沸いてきたのですか？」

「湯ですか！？私はお湯ですか！？」

・・・ふふふ、私には能力ちーとがありましてね、ふははは」

ウソですただのお薬貰っただけです。能力侮辱しました、ごめんな、学園都市。

「・・・ふんぞり返っていると、背中痛めますよ。」

まあ、僕にも能力くらいありますしね」

くらいって言ったな、コイツ。私以上に無能力者侮辱レベル0したね？

「ところで・・・そういうアンタは？」

「は？」

「ナツpp・・・じゃない、君の名前は？」

こちらからしてみれば、相手は未来のツナの対戦相手。同時にツナの守護者。

でも、相手からしてみれば、私は「どっかから湧き出てきた得体の知れない女」だろう。

自分が知ってたら間違えなく裏の人間と勘違いされて殺される。
マフィア

賢明な判断じゃね？と心の中でどや顔してみた。

・・・心中だけでなく、顔にも出ていたらしいが、骸君は優しいのでスルーして質問に答える。

「僕は六道骸です」

「・・・」

「どうしたんですか？」

「・・・いえ、ただすごい名前だなあと、感心しております。」

生^{ナマ}で耳にすると、とっつってもすごい名前だということが分かりました。はい。

ただ、本人はどーして気にしないんだろうか？という疑問はあえてしないでおきましょう。

厘は、しげしげと骸の顔を見つめていた。

多分、整った顔なんだろう。美形といえば美形なのだが、

ナツポーヘアーと右目の赤い瞳がその調和を乱している。

割合でいくと、オッドアイが3割。そしてナツポーヘアーが7割。

どうしてそんな南国果実の髪型に愛着が沸くのか、フシギでたまらないのは厘だけではない・・・はず。あ、全国の骸ファンの方、ごめんなさい。殺^ヤるなら一緒に作者にやろうね♪

すると、骸はナツポーヘアーではなく、右目のオッドアイを見てみると勘違いしたようだ。

「ああ、この右目ですか・・・」

ちげーよ、ナツポーだよ。

とか思ったが、私の超直感・・・ではなく、フツの理性が「そんな事言ったらミンチにされるぞミンチに」と言ってきたので黙っておく。

「貴方は、前世を信じますか？」

前世、かあ。

そんな偉大な質問されても困るが、

「信じるね、面白そーだし」

ノッてやろうじゃないか。

「では、六道輪廻という言葉をご存じで？」

「ロクドウリンネ？」

一般ピーポーが、そんなマニアックな言葉知ってたら疑うだろ、という意味で「そんな言葉、初めて聞きました」的な顔にする。

「人は死ぬと、6つの冥界のどれかに行く、というヤツですよ」

「はあ」

冥界って地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天界道だよな・
よくマンが見てんな、私。

「僕は、6つの冥界すべてを廻った記憶がありましてね、その冥界から1つずつ、戦闘能力を授かったんですよ」

「それが君の能力？」

「ええ」

それらで人殺して牢獄に入れられてたんですけどね、と続ける。

・・・。

「すまん、その補足説明怖い。まじ怖い。ふつーにでんじやらすな言葉禁止!!」

だいたい並盛襲撃の2ヶ月ほど前か。そしたらココは・・・『黒曜ヘルシーランド』？

骸は再度聞いてくる。

「厘はどんな能力ですか？」

「相手を怒らせること」

「まさにその通りですね」

「コイツ納得しやがった!!!!そこは突っ込むところだよ!？」

「違うんですか？」

「違います!!」

頭を抱える厘を面白そうに眺める骸。ひでエ。

雲雀と口論的にもどっこいどっこいだと思う。

「厘の事ですし、そんな大層な能力だとは思えませんがね」

「! ひ、ひつれーな!! 能力は人格を選ばない、ハズ!!!!」

「根拠もない事を・・・全く呆れます」

「呆れてねーよな!？お前の表情呆れてねーよな!？むしろ楽しん

でんなコイツウウ!!!」

そこらへんでゼエハア・・・と息を整える。やっぱり体力が持たない。

滝本厘・充電モードに移行シマシタ。

「まあ、お互い能力持ち同士、頑張りましょう」

「なにを頑張るの!? ねえ、ちょっと聞いている!?」

「いつかまた会えたらいいですねという意味で」

「私的には会いたくない!! こんなに私を疲れさせるなんて1000人に1人の人材だよ!？」

「それはそれは・・・」

「私はいつか、日本のため、そして世界のためにお前を殺す!!」

「やれるもんならやってみなさい」

「ムカツク！」

エネルギー不足の厘はしばらくぐつと骸を睨んでいたが、ふつと視線を外した。

「また会えたら、か・・・」

「？」

骸はそんな厘の様子をフシギそうに見る。

「病気ですか？」

ちよいとイラつく骸の発言はスルーし、厘はそのまま視線を外したまま小さく呟いた。

「次、会ったときは――――」

われた窓ガラスの向こうから、春らしい暖かい風が黒曜ヘルシーラ
ンド内に流れ込んでくる。

その風は、小さな眩きを攫って、解けていくように消えた。

眩きは、眩いた本人以外の耳には届きはしなかった。

無論、骸にも。

「んじゃ、私、そろそろ帰るわ」

「どこに？」

すかさず骸は問うが、テキトーに返しておく。

「宇宙のハテ」

「テキトーですね・・・」

厘は立ち上がり、骸にっこりと笑いかけた。

「楽しかったよ、ムカついたけど」

「クフフ・・・僕も楽しかったですよ」

「・・・『クフフ』はやめようぜ、『クフフ』はさア」

はぁ・・・っとため息をつく。勿論、小声で、だ。

厘はジーンズのポケットから瞬時移動用のカプセルを取り出し、

「じゃね、骸」と手を振ってカプセルを飲み込む。

刹那、今までそこにいた厘が幻のように、跡形もなく消えた。

骸は驚いたように目を見開いていたが、

「これが能力ですか」と独りでに納得し、再度含み笑いをした。

・・・少し違う気もするが。

「骸様、只今帰りました」

いままで外出していた、骸の部下、柿本千種と城島犬が廃墟に姿を現す。

「ん、骸さん、やけに上機嫌れすね」

なにかあったんれすか、と犬は含み笑いをする骸に質問した。

「ええ、少しばかり、ね・・・」

骸はあいまいに返し、微笑したまま窓の外を見つめた。

「・・・Finch? un giorno per veder
e di nuovo、厘」

まるで、その日を楽しみにしているかのように――――

N o. 2 3. 5 L E T、S番外編! ? 〔着地失敗〕 (後書き)

皆様、このサイトで小説を書いていることは、皆様の友達に伝えてあるんですか？

今、ちょっと私の友達にこの小説がばれそうなんです。なんとなく聞いてみたくなりました。それだけです。では。

No. 23. 9 LET、S番外編!?! お恵みください、いやマジで(前

なんで、いつもこんなメーワクなじかんとーこーなんでしょー。
やべえー。眠くて頭が回らないー。

ということぞー。文章的になんか変なトコがいっぱいあるのでー頑
張ってかいどくしてくださいー・・・

No. 23. 9 LET、S番外編!?? お恵みください、いやマジで

「腹減った。まる」

空っぽの冷蔵庫をパタンと閉める厘。節電の為、コンセントを抜いておこう。

すぐそばの床には、うすっぺらい財布が落ちている。

・食料不足って、1人暮らしにはかなりの強敵だと思う。

骸と別れて、数時間経過。

はじめの1時間は、「骸オオオ!!」と、興奮していたが、

叫びすぎたのが原因なのか、それとも「マンションなんだから、そ

んな大きい声だすんじゃないよ！」と隣家のオバさんに怒られえたのが、分らないが、とにかく腹の虫が泣いてきた。

冷蔵庫とお財布を確認して・・・戻る。

とにかく、食べるものも、なにかを買うものもない。

恵んでもらうしかなさそうだ。

インターホンを鳴らす。まったく、インターホンの音まで高級そうですこと。

「・・・・・・・・・・・・・・・・り、厘？」

「→この空白は一体何なんだね？ 獄寺クン」

ニッコリと、効果音が出そうなくらいのとびきりの笑顔で笑ってみる。ちなみに私、どっかの書記さんと一緒に、怒っているときは笑顔の輝きが増すんですよ。うふふ。

「な、何しに来たんだよっ!？」

「ふははは。聞いて驚くなよ」

私は、期待させるように間を取って、背中で隠しておいたお茶碗と箸を前に突き出す。

「突撃☆隣の晩ごはん★」

次の瞬間、二人の間に静かで激しい戦争が起こった。

まず、扉の向こうにいる人物、つまりはこの高級マンションの一室の住人は、すごいスピードで玄関のドアを閉めようとする。

が、厘は、そのドアの間に右足を突っ込んだ。

ドアの隙間で、激しい睨みあい。赤と青の火花が今、バチバチと交わり・・・

「何しに来た？」

折れたのは、向こう側。滝本厘の勝利！！あいむういなー！！

「その問いかけ、2回目だよ獄寺君」

ため息をつく厘だが、扉の向こう側・・・獄寺隼人の質問に答えてあげるとしよう。

「つまりね、獄寺君。ようするとお・・・」

・・・要してないが、と1人漫才って悲しいな、とかみ締めた厘は、

「晩御飯、恵んで？」

「・・・は？」

「やー、冷蔵庫ン中空っぽでさー」

「なんか買えばいいじゃねェかよ」

「それが、財布も空っぽで・・・って、よほど私に晩御飯を恵ませてくれないのね・・・」

くすんつと鼻を吸る。勿論演技だが。

ちっ、白い目で見やがって。獄寺のヤツ・・・チツクシヨ！。

その時、ふっとアイディアが浮かんだ。

「ううっ、じゃあいーや。山本んち行こっ」と

「・・・」

「山本なら、快く受け入れてくれるもん。・・・獄寺と違って」

「!？」

傷つけられてる・・・傷つけられてるよ、獄寺のプライドが。

「やっぱり、獄寺より山本の方が、安心感があるよねー」。

・ ・ ツナもそーゆーのが好きだと思っただけだなー」

とどめの一押し！この一言で決めるッ！！

「やっぱ、十代目^{ツナ}の右腕、山本が適任だよなー」

・ わざと聞こえるくらいの独り言を呟き、厘は獄寺に背を向ける。が・

ガシッ

流石ピアノをやっていただけある。獄寺の大きい手が、厘の肩を掴み、立ち去るのを阻止する。

「夕飯はうちで食べる。だから」

なんとなく、次の言葉が分かってしまった気がする。・・・まあ、誰でも分かるか。

獄寺君は、予想通りに言葉を続けた。

「十代目の右腕はオレだ」

やっぱりな・・・そんなにツナ命なんだ・・・。

まあどーなれ、計画通りだからいいか。

獄寺の前で「山本のほうが右腕っぽい」と言えば、ムキになる。獄寺を観察して、そういう結論を出した厘はソレを餌にして、見事に『晩御飯』という大物を釣り上げた。まさに、『海老で鯛を釣る』というコトワザがぴったりだ。

そーゆー事だけは、滝本厘の頭の回転が速いのである。だけは、だ

が。

そして、獄寺は、急に顔が赤くなって弁解し始める。

「ご、誤解すんじゃないよ!! 別に、オレはただ十代目の右腕として――――」

なにを誤解するんだ？

厘はフシギそうに獄寺の顔を見つめた。

夕飯のメニューは、

•
•
•
•
•
○

アサリの Pasta。

お前、そこまでボンゴレ好きかッ！！

とツツコミたかったが、口に出したら追いだされるのは目に見えてるのでやめとく。

お味は・・・以外に美味。ポイズンクッキング級の料理の才能を持つ私には、どーしてだろう・・・？さっきから獄寺のバックが妙にキラキラに見えるや。

「・・・そーいや厘、今まで何処にいたんだ？」

「？・・・あ、ああ・・・」

思い出したように厘は頷く。

そーだ、私、元の世界に帰っていて、その期間はココでは『行方不明』になってるんだった。

・・・てきとーにでっち上げるか。

「んつとね。家出」

「反抗期かッ！！」

「・・・じゃあ、山籠り。滝に打たれてきた。滝本だけに」

「何の修行だ！？しかも最後関係ねえし！！」

「・・・そしたら『母を捜して三千里』」

「何の為に！！しかも選択肢いくつあんだよ！！」

「・・・フツ（キラッ）」

「なんだその笑い！！怖えよ！！！！」

「獄寺って激しいんだね・・・いっがい」

「おめえがそうしてるんだろ！！」

「?何が?」

「っ、・・・なんにもねエ」

「なにソレ!!」

ある意味、いちいち突っ込ませるというのも一種の才能なのかもしれない・・・と獄寺は考える。

しかも、本人がその能力に気づかないという・・・極めて重症。

・・・獄寺の中で、厘〓UMAの可能性という式が出来上がりつつあった。

「にしても広いねー。このマンション。流石高級なだけあるわ」

フォークを口に運びながら、厘は辺りを見回した。

厘の住んでいるフツのマンションの1.5倍はあるだろう。

グランドピアノまであるし。私の家に置いたら、床が抜ける。絶対に。

「♪美味しい」

表情が柔らかくなる。

「・・・厘って謎多いよな・・・」

「は？」

イキナリ獄寺がボソツと呟いた。

当のご本人は、口から出たとは思っていなかったらしく、少し慌てる。

「っ！だ、だって、突然行方不明になるわ、かといって心配してたら、住所教えてもないのに嗅ぎ付けてきて『夕飯恵め』なんて・・・意味わかんねェだろ！！」

「住所、嗅ぎつけたなんて・・・失礼な！品がないのか！！」

「事実だろ！？じゃあ、どうしてココがわかったんだよ！！」

「ふっ・・・ちょっと頭使っただけで簡単にできるのよ」

厘はトントントンと、自分のコメカミらへんをたたく。・・・決まってるぜ！！

「ケータイにさ、GPSって付いてるでしょ？位置発信機できなもの。

それをね・・・君にどっかにつけてるんだよ、獄寺君・・・」

「!?!?」

すかさず服のポケットなどに手をあてて探し出す。

そんな様子を、厘はフォークで麺を絡めながら、楽しそうに眺めていた。

実際に、獄寺にはGPSは付けていない。というかそんなモン持っていない。犯罪ではないが、そんなモノ作れる能力は残念ながら私にはないしな。むしろあったらコワイ。

所持してる、瞬間移動用カプセルを使ったのである。

ただ、格好をつけてみただけである。

ははは☆

「チツ、挙句の果てに寝やがった・・・」

獄寺は、舌打ちする。

あの後、厘が爆笑しながら「一般人がGPSなんて持ってるわけないでしょ！ハハハッ！」と暴露され、そしてそのままアイツに弄ばれて・・・

にしても、疲れていようが、よくヒトの家で寝れるよな・・・

呆れたように、熟睡している厘を眺めてから、近くにあった薄い毛布を掛けてやった。

もし風邪でも引いたら、「お前のせいで風邪引いたんだ!! 土下座しなさい!」っていわれるのがオチだからだ。しかも、葉持って来いだの果物切れだの、「病人」という権力を思う存分振りかざして、パシリに使われるだろう。

悪夢だと思うだろうな、絶対に。

・・・でもまあ・・・それはそれで楽しいかもしれないな・・・

そういう自分もいてみたりする。

人間って面白エなと思いながら、獄寺隼人はケータイを取り出した。

一キロほど離れた地点。

「そ、そーなんだ・・・厘、見つかったんだね・・・」

沢田綱吉は、自宅の受話器を持ちながら、安心したような声を出した。

「うん、ありがと、獄寺君。また明日ね」

通話ボタンを切ると、ツナの頭にリボーンの小さい足がヒットした。

「ったあゝ。なにすんだよ、リボーン！！」

もはや日常となりかけているこのシーンだが、どこかツナの顔が曇っている。

「あ、そーだ、リボーン。厘、見つかったって」

「そーなのか、よかったな」

ここ何週間か、厘が学校にも、家にもいない事は誰もが心配に思っていた。勿論、その中にはリボーンも含まれている。

「どーしていなかったか、聞いたか？」

「うん・・・でも、『家出』とか『山籠り』だとか・・・」

なにか、隠してるみたいだったって・・・」

「隠してる・・・か」

リボーンの考え込む姿に、ツナは不思議そうに問いかける。

「リボーン？」

「厘は・・・一体何モンなんだろうな」

「・・・え？」

「厘の事を調べてみたんだが、

厘の戸籍も、厘の家族構成も、厘の履歴も・・・オレにも何一つわからなかった」

「どういう事？」

リボーンはやれやれ、という感じで訳す。

その動作も、やはりいつもとは違い、キレがなかった。

「まったく、やっぱりダメツナだな。厘は・・・いや、滝本厘という存在は、元から存在していなかった、っていう可能性があるって

いうことだ」

「!!」

ツナの栗色の瞳が大きく揺れた。

「厘・・・」

ツナは、その名を呟く。

「君は一体、何者なんだよ・・・」

不安という色で塗りつぶされた声は、居候のランボの能天気な笑い声に掻き消された。

「へくしょんっ!」

同刻、厘は小さくくしゃみをした。

「ヤベ、風邪ひいた？」

隣で獄寺が、げ、と少し顔を青ざめた。

N o. 23. 9 L E T、 S 番外編! ? お恵みください、 いやマジで (後

テスト週間なのに、こんなに夜更かししていいんでしょうか？
と、私が聞きたいです。ええ。本当に。

No. 24 LET、S夏祭り!?

遠くから、ぴーひゃらぴーひゃらと、笛の音が聞こえてくる。

辺りには、人、人、人で埋め尽くされていて。

屋台には、人ばかりと、ときおり大きな歓声。

そして、隣には……

「コラ雲雀。危ない武器を一般人にかまえないでね、冗談ヌキで」

「群れてる……」

「当たり前です、夏祭りなんだから」

今にも暴れだしそうな雲雀をやんわりと止めながら、厘はあたりを眺める。

・・・まあ、群れる事の嫌う雲雀にケンカ売っているくらいに、大勢の人々であふれている。

でも、今日は年に一度の夏祭り。そりゃあテンション上がって人も多く集まるのは、毎年恒例の出来事でしよう。

といっても原作を読んでも人達にはわかるけれども、雲雀は夏祭りを好んで来たわけではなく、ただシヨバ代を回収するためにココへ足を運んだのだが。

ちょうど近くに、カキ氷の屋台があった。

カキ氷は、多くある夏祭りの醍醐味だと思う。

「雲雀、カキ氷いる？」

「ん」

「・・・そーすか」

・・・いらないそうです。

ちっ、奢ってもらおーと思ったのによオ。

一瞬悪女思考になったが、

「すみませーん。カキ氷のいちご味一つくださあーい」

「それとシヨバ代5万円」

厘はお財布から、200円を取り出すと、屋台の人は慌てた様子ですぐに両方とも手渡してくれた。

雲雀が他の屋台のシヨバ代を回収するため、足早に厘に背を向ける。

その背中には、「とっとなついてこい」と書かれていたので、

スプーンを口にくわえたまま小走りに急いで、雲雀を追った。

・・・その際に、カキ氷屋の隣の屋台がシヨバ代を払わなかったからなのか、

厘と同じ腕章をした、風紀委員（の下っ端）達が屋台を「潰していた」のは見なかった事にしておきます。

「5万」

「頑張っているかね、皆のども」

ふんぞり返っている厘。

ツナ達は、というと。

「ヒバリさん———!!? っつか厘も———!?!」

「てめーら何しに来やがった!」

ツナ、いつか顎が抜けるよアンタ。

「なんで風紀委員にシヨバ代ー!？」

「活動費だよ」

雲雀は短く答える。

「ふっふっふ。その活動費の半分は、ケーキと化して私の腹に収められるのだ」

「ちがうよ」

「・・・・・・・・・・」

すばやく雲雀に突っ込まれた厘は顔を手で覆い、しくしくと泣き出す。

「ん、厘、浴衣なんだなー」

三人の中で一番冷静だった山本が、話を振ってきた。

呼び方が「厘」になったこともあり、急に上機嫌になった厘も笑顔で答えた。

「そ、似合う？」

「おお、似合うぜー」

ちなみに、浴衣は深い藍色をしていて、中身をさておき、外見は「
儂げな美少女」の厘に良く似合っていた。

獄寺も、その話に反応したようだ。頬を少し赤くして口を開く。

が、厘は……

「まあ／＼／＼……よく似合「ツナ」どお？ 似合う？」おいコラ聞け
よ！！」

「まあまあ、落ち着いて」(笑)

「笑うな！！」

ツンデレを見てると、少しいじめたくなってしまう主義でもある。

怒りで顔を真っ赤にさせて、大声でどなった。

それを愉快そうに見る風紀委員を見て、雲雀恭弥は、不愉快そうに少し殺気を混ぜるが、本人は気づかない。

ツナは、5万を取り出し、びくびくした様子で雲雀に渡した。

「たしかに」

そういつて去っていく雲雀に、声をかけた。

「すまんのう雲雀ー。我は京子ちゃんやハルと待ち合わせしとってのー」

「いつの時代の会話!?!」

それを聞いていたツナは、思わず突っ込む。

雲雀はというと、気にしていない様子で「ふうん」と足を止める。

「僕に関係ないし、かまわないけど・・・あんまり群れないでね」

「いえっさーボス!!」

敬礼ッ！

厘は、雲雀の制服が見えなくなるまでそのポーズで居続けた。

「風紀委員って・・・大変だな」

山本が、ポツッと呟く。

カクカクッと、敬礼しながらもげそうなくらいの勢いで首をタテに振った、唯一女子の風紀委員だった。

「コ・・カラー!!」

神社の階段。ツナと思われる人物が、同年代くらいの少年を追いかける。

・もうすぐ、戦闘か？

「はひ？厘さんどうかしたんですか？」

とある屋台。

隣にいた、浴衣姿のハルは、ちっと顔を歪める厘に問う。

「用事でも思い出した？」

同じく浴衣姿である京子ちゃんも、不思議そうに見た。

・・・ケンカに、助っ人すっかな。

「ちょ、ちょっと用事で・・・は、花火までには戻ってくるね」

可愛い女子達よ、私の罪を許せ！
おなご ウソ

・・・と、危ない思考をする厘は、浴衣の裾を持ち上げて、石畳の地面を蹴る。

神社方面の人だかりの中に、1つの浴衣姿が混じり、見えなくなつた。

「うれしくて身震いするよ。うまそうな群れを見つけたと思ったら、追跡中のひったくりを大量捕獲。」

ところで厘——なんでいるんだい？」

「いたら悪いっすかねー」

厘が来る前に、もう雲雀が来ていたようで、一対のトンファーを構えながらこちらに質問してくる。

「やー……一言で言えば……暇つぶし？」

優に50人を超える敵を、まるで玩具を片付けるような軽いノリで言っただけだ。

案の定、周りの空気が「怒り」へと変わる。

そして、ツナが死ぬ気モードになり。その隙に獄寺、山本もやってきて、このケンカに参戦。

「気に食わねー相手がぞろぞろと・・・」

相手の主将が血管を浮かばせながら呟いた言葉に、厘は鼻で笑った。

「その言葉、また後で聞けるといいんだけどね」

そういつて、鞆の中から銃を取り出す。

説明しよう！

この銃は一年程前に、リボーンから貰った、あの銃ではないのです
！！

フーキイインとか、フーキイインとかのツテで購入した麻醉銃、『ハッシュパピー』と呼ばれるもの。

・・・流石に、リボーンから貰ったものを使ったら、死人が出るからね。

ちなみに、消音銃サイレンサーなので、夏祭りを楽しむ人々は気づかないだろう。

そして――――

数分後。

こちら側の人数の、10倍ほどいた敵は、全て地面に倒れ伏せていた。

一人は悶絶。もう1人は熟睡。さらにもう1人は気絶。

・・・カップラーメンよりはやかったね、コレ。

どーんどーんと、暗闇の空に大輪の花が広がる。

先程合流した、ハル、京子ちゃんの隣で・・・厘は寂しそうに笑っていた。

もうすぐ・・・黒曜編、ヴァリアー編が始まるということを感じて。

この・・・ハチャメチャな日常だけでも、楽しい日常から、あっさり・・・死と隣合わせになることを感じて。

でも・・・

厘は、周囲を見渡す。

ツナも、獄寺も、山本も、リボンも。京子ちゃんやハルも、これから起こる事に気づかないけれど・・・みんな、笑っていた。

だから・・・

たとえば、どんな事が起こっても・・・どんな方法でだろうと、

この笑顔が続けばいいなと――厘は、心の底から、そう思った。

No. 24 LET、S夏祭り!?(後書き)

これにて、日常編しゅーりょーです。

これからの目標について・・・少し紹介させていただきます。

作者的には、今までギャグっぽくしようと頑張ってたわけですけど、や、なってないですけど。

シリアス要素、含むかも・・・です。

それと、恋愛系は含めませんのです。

厘「なんで？」

作「や、恋愛系つつたら・・・」

厘「つつたら？」

作「主人公が死ぬのが、一般的じゃないか!!!! (キラッ)」

厘「殺すなー!!!!」

・・・です。

これからも、よろしくお願いします。ホントに。

No. 25 LET、S襲撃!?

終わりは必ずやってくる。

誰が言ったかは知らないが、

この脆く儚い日常は、終わりを告げる。

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ・・・

冷房のかかった朝の応接室には、キーボードを打つ音のみが響く。

カタカタカタカタカタカタ・・・

ソファ―に座る厘は、テーブルにノートパソコンを置き、書類をまとめていた。

彼女の顔にあるのは「疲れ」。それ以上でも以下でもない表情。

カタカタ・・・カタッ

ついに耐え切れなくなった厘は、パソコンを閉じ、大声で叫んだ。

「疲れたー！！！！雲雀ー、休憩しましょー！！！！！」

その声に反応して、後ろの大きいデスクで同じく書類整理をし、肩に学ランをかけたいつもの格好をした雲雀も口を開く。

「僕、紅茶」

「・・・いれてくれないんだ」

軽く舌打ちをし、応接室の奥にある給湯室に入る。

ここの応接室は、お客様をもてなすための簡単なキッチンがあるのだ。

薬缶に水を入れ、湯を沸かせる。

そしてUターンし、先程まで座っていたソファーに座りこんだ。

「はあ、一体どんだけ書類整理すれば気が済むのさ・・・」

書類整理はいつも多いが、今日は常時の倍以上。見るだけでぶっ倒れそうな量だ。

内容は・・・医療関係だとか、イベントの延期や中止のお知らせなどが主である。

「仕方ないっつーのはわかってんだけど・・・」

はあっとため息をつく。

そう、仕方ないのだ。

いつもは町名からして平和の並盛町に、事件が起こっているのだから。

並盛中の・・特に風紀委員の生徒が、何者かに襲撃、重体となっている事件。

そして、それは黒曜編——ツナたちの最初の試練となる戦いに繋がっている。

「雲雀は事件の敵のしっぽは掴んでんの？」

ここにトリップして一年強。どんだけわざとボケて来たんだろう、と考えながら、厘は今日もボケる。

「データが少ないからね」

「・・・」

あえて「わからない」とは言わない。雲雀らしーや。

厘はテキトーにまとめる。

「よーはわかってないんでしょ？・・・使えねーな」

最後の方は小声で言ったハズ・・・なんだが、聖徳太子も真っ青の、鋭い聴覚をもつ雲雀はちゃんとそれを聞いていた。

自慢のトンファーを、厘の頭へと叩き込む。

が――――

人間には「慣れる」という特性がある。

元々反射神経の良く、雲雀とは一年以上の付き合いをもつ厘は、岩さえ砕く一撃を、「慣れ」で瞬間的にスクールバッグで防いだ。

バコッ

・・・なんともいえない音が出る。

雲雀も、厘がその一撃を防ぐことも予想していたし、冗談だと言う事もわかっていたので威力はそれほどはない。またデスクに座りなおした。

「ふん、私も、もう腕で防御するようなバカな真似はしないのさ」

あれは、ホントに大変だった。何ヶ月アザ残ってたと思うんだよ雲雀サン。

厘の言葉と同時に、薬缶が鳴り始めた。

「ん」

お湯が沸いてら、と呟くと、小走りに給湯室へと入っていく。

数分後、彼らはそれぞれの場所に座り、紅茶を飲み干していた。

雲雀は書類整理を再開するも、厘は仕事を始めない。

単に、あの数のまとめる事項があると、見るだけで疲れるからだ。

ソファーに座ったまま、ぼーっとしていた。

すると突然――――

♪ 緑くたなびく 並盛のく♪

「うはっ!?!」

我ながら、情けない声。

でも、予告もなしに、わが校の校歌が流れ出すんだから、驚くに決まっているだろう。

♪ 大なく小なく 並くが いいく♪

ピッ

校歌が止まる。

「もしもし」

「っってお前の着うたかー!!」

音の元を探していた厘は、雲雀がケータイで通話しているのを見て、全力でツツコム。

「――ふうん。わかったよ」

「！」

それは、短い電話。

そして、雲雀の顔には、好戦的な笑みが浮かんでいる。

思い当たる節は一つだけ。

「僕の街の風紀を乱すモノを、？み殺してくる」

ああ、やっぱり……

さっきの電話は風紀委員からだろう。中身は……言わなくてもわかる。

六道骸を、倒しに行くんだろう。

でも・・結果は、敗北。大ケガを負った。

本当は、ココで止めたいけれども。

「ん、いってらー」

私は、トリップ者。異端者は原作を、変えてはならないから・・・。

結果がわかっているのに止めない、罪悪感。

なんとなく、目を合わせられない。

「・・・行かないで」

思わず、蚊の鳴く声よりも小さな呟きが、厘の口から漏れる。

その言葉は、雲雀には伝わったのか伝わらなかったのか。

ふいに、肩にわずかな重みを感じる。

「？」

見ると、雲雀の学ランが、厘の肩にかかっていた。

「雲雀・・・」

「外は暑いからね」

短く返してくる。

冷房の効き、少し肌寒かった応接室。

雲雀の体温の、残った熱が暖かい。

「じゃあ、行ってくるよ」

ばたんっど・・・でも優しく閉められたドア。

カツカツと、足音が遠ざかっていく。

そして、痛いほどの静寂。

厘は、罪悪感で顔を歪めていた。

「行かないでよ・・・雲雀」

ぎゅっと学ランを握り締める。

蒸し暑い季節。アスファルトからも熱が伝わってくる。

厘は何を怖がっていたのか・・・

雲雀は、無表情ながらも、それを疑問に思っていた。

目の前には、錆びれた門。

一撃でそれを破壊した。

太陽のまぶしさに目を細めながらも、雲雀は廃墟を見上げる。

「すぐに噛み殺してあげる」

並盛の風紀を守るために。

そして———彼女に、あんな悲しげな顔をさせないために。

「すぐに、ね———」

No. 25 LET、S襲撃!?(後書き)

日常編、終わっちゃいました。

なんか少し寂しいです。

と、黒曜編にいったワケですが、ちっとも上手く書けません。

なので、これからも期待しない方が良いかと。

あ。わかってるって？

.....。

じゃ、テスト勉強してきます。総合的には普通でしたが、一番悪かったのは国語です。↑ウン、だからだね、グダグダなのは仕方ない！

ということで、これからもよろしくお願いします。(・◇・)ノシ

N o . 2 6 L E T , S それぞれの戦い・・ぽいやツ!!

雲雀が去って、どれくらい経っただろうか。

「・・行けば、間に合うかな」

時計は、30分進んでいた。

黒曜ヘルシーランドには、歩くと25分ほどかかる。

今から止めに行けば、あんな大ケガにはならない――――――

「・・駄目だ」

私は首を横にふり、思考を中断させる。

――トリップ者は、原作を壊してはならない――

でも、それで雲雀が怪我するのを、黙ってみていいのだろうか？

「行かないのか？」

ふと、声がする。

顔を上げなくてもわかる、よく通る声。

「神羅・・・」

「ん、元気ねーな」

厘の、いつものあの元気っぷりは欠片もなく。声も、どこか弱々しい。

「行かないんじゃないって、『行けない』んだよ」

厘は、神羅の質問に答えた。

「私らしくない、かな・・・」

「らしくねーな」

神羅は、呆れたようにため息をつき、言葉を紡いでいく。

「オレの知ってる厘は、そんなじゃねーな」

「そんなんじゃ？」

ふっと顔をあげると、厘の碧眼と、神羅の瞳が合わさった。

「いーか？ オレの知ってる厘は、そんな『自分らしくない』って
いうような、

そんな弱っちいヤツじゃねーよ」

「なんか、褒められてんのか貶されてんのかわか「黙らっしやい！」
・・ハイ」

・・・怒られた。フツーにツツコんだら怒られた。

「オレが知ってる厘はな？」と、神羅は私の目を覗き込む。

「オレの知ってる滝本 厘は、迷惑で、突飛で、意味わかんねーヤツだぞ」

「だからソレ、褒めてなくね？」

「黙らっしゃい！」

「・・・ハイ」

今のは私が正論だと思う。

神羅は、頭を掻き筆ると、面倒くさそうに言った。

「どーせ、お前は、元から原作なんてぶっ壊れた世界に生きてんだ。だから——」

一拍おいて、神羅は微笑^{わら}った。

「お前も一緒に、ぶっ壊れて来い」

滅茶苦茶な理屈だと思った。

でも、

「そーだね」

私も微笑^{わら}った。

「原作なんて、もうぶっ壊れてんだ。そんならもう木っ端微塵に壊してやるか」

そう言うど、私は肩にかかっていた学ランをとった。

「じゃ、骸を倒しに行って来ますわ」

雲雀の、ソファーに掛けた学ランを見つめながら。

心配して、風紀委員の印でもある学ランを貸してくれたけど、

もう、大丈夫だから。

厘は、薄く笑って・・・神羅に向き直る。

「神羅クン」

「ん？なんだ？」

もしかして、礼でも———と呟く神羅に対して、容赦なく告げる。

「誰が迷惑だって？誰が突飛だって？」

「・・・あ・・・それは・・・」

ダラダラダラダラダラダラ。冷や汗を流す神羅。

「ウン、これはお礼ね、そんなコト言ってくれたお礼」

いい笑顔で、言い放った。

「いや、そんなお礼はいらないさ・・・？なんで指コキコキ鳴らしてんだ？軽くストレッチもしてるし・・・っておわ！なんで回し蹴りしようとしてんだ！？しかもすれすれだったぞ今！？え、「次は本気で行く」って？え、え、いや、ホントすいませんでした、許してください、いいからその拳を下ろせ、え、あ、ちょ、ま、ば、あ、ア――！！！！！」

窓の外は、死ぬ気のツナと、骸の影武者・・・ランチアが戦っていた。

ツナは、ランチアの放った硬球を受け止めると、今度はランチアに硬球を放った。

乱気流に巻き込まれ、硬球に当たるランチア。

これを廃墟の中で見ていた骸と千種も感嘆の声を漏らす。

「あれがボンゴレ・・・」

「これは驚きましたね・・・」

しかし、あの程度では、僕の先輩だった男は倒せませんよ」

骸は相変わらずの微笑みで・・・告げる。

「いるのでしょうか？――――厘」

「ちっ、バレてたかあ」

気づかれない自信あったのに・・・と厘は呟きながら錆びた重いドアを開けた。

ちなみに、厘の格好はさっきと同じだ。リボンの付いていない制服のシャツに、十字架のネックレス。短めの黒いスカート。

・・・ところどころ返り血でシャツが赤に染まっていたが、気にしないでおこう。

「やあ、骸。久しぶり」

「久しぶりですね、厘」

千種は、武器のヘッジホッグを構えていたが、骸に窘められて武器をしまった。

「しかし・・・厘がボンゴレ十代目と友達だったとは驚きましたよ」

「案外、世界って狭いのかもね」

フフツと笑う。

骸は、窓の方に視線を向けると、ツナとランチアの勝負が終わったと判断したのか、千種に足止めさせることを命じた。

そして、ただ広い部屋に、二人きりになる。

「んでさあ、骸」

「なんですか？」

「前会った時――――私が言った事、覚えてる？」

「前会った時、ですか」

考え込む骸。

「まあ、ちっさい声だったから聞こえなかったのは当たり前かもしれないけどさ」

『また会えたら、か・・』

私は、あの時。

『次会った時は――――』

敵同士、かもね』

「ということで、戦っとく？ 流れるに」

「軽いノリですね」

にこやかに笑うも・・・厘の手には、拳銃が握られていた。

それは、リボーンから貰った、人を殺める事のできる銃。

それを見て骸も、自分の武器を取り出す。

「………？棒？」

骸の武器は、三叉の槍。だが今持っているものは、刃がなく、ただの持ち手だけである。

「僕は本気を出しませんよ」

「なにソレ。どんだけ私戦力外なんだよ」

むっとしたようにいう厘に、骸は言った。

「それもありますが……」

僕と厘は、同じ種類の人間ですからね、できれば戦いたくない」

「同じ種類の人間？」

一緒にされたくないが・・・なんのコトだ？

「そうです。僕と厘は――――」

――――大人に、親に失望している、人間」

一瞬、碧眼が大きく揺れるも・・・すぐに取り戻す。

「私の思考でも読んだの？」

「ええ。厘の頭の中はスツカスカなのでね」

「うん、それずっと前、ある人から同じように言われたわ」

はあ、とため息をつく、厘は骸を真っ直ぐ見つめた。

「じゃあ・・・お手柔らかに」

わかっている。

勝負をしたって、私が絶対に負けることなんか。

そして、すこし笑って。

狙いを定め。

引き金を、引いた。

「発砲音が・・・止まった」

同じ、黒曜ヘルシーランド内にいた、ツナは小さく呟く。

ついさっきまで、うるさいほど聞こえていた発砲音は消え、あたりは静寂に包まれていた。

「きっと、骸と誰かの勝負が終わったんだろ。どっちが勝ったかはわからねえが」

リボーンは、相変わらずのつぶらな瞳で、ツナの質問に答えた。

「でも、この発砲音のおかげで、骸と誰かが戦っていた場所・・・つまりは、骸の居場所がわかるんだ。ありがたかったな」

ツナ・リボーン・そしてビアンキの視線は、目の前にある、重く、錆びた扉。

この扉の向こう側に、骸はいるはずだ。

ツナは意を決したように、その扉を、開けた。

ドアがきしむ音。

密閉されて、蒸し暑いその室内。

真っ直ぐ前のソファーに座っている、一人の男性。

そして、右の方に倒れている――――

絶句。

3人は、目を見開く。

「り、厘・・・？」

ツナが、3人の驚愕に代表したように、名を呼ぶ。

その、戦場と化す場所には

いるとは思わなかった1人の少女が、気を失い、眠るように倒れていた。

N. 26 LET、Sそれぞれの戦い・・・ぽいやッ!! (後書き)

うん、暑いですね。

グダグダですね。

なんか、『グダグダ』というワードが挨拶文句になっちゃってるほど悲惨っすね。

編集・・・がんばりますわ。

そんじゃ。部活に行って来ます。

N O. 27 LET、S 終わりとそれから・・・です。ハイ。

「――――」

話し声がする。・・・誰？

まどろみから覚めた私は、重たい頭で考える。

・ そうだ、骸に棒で、頸動脈を一時的に止めさせられたんだっけな・

銃のリロードを変えている間に、首筋に強い衝撃を与えられた。

人間は、頸動脈を刺激されれば、一瞬で気を失う。

厘もそのように、気を失ったのだが・・・

まだ神経が麻痺しているのか、身動きができない。

だが、聴覚だけは正常に働いているようだった。

（ちっ、あのナッポーめが。覚えてろよコンチクショウ）

思考がはつきりしていくうちに、口調が悪化していく。

次会う時は・・・もし私が生きてたら、リング争奪戦か・・・

骸め。3倍返しだぞこのヤロー。

呟くことができないので、心の中で思いっきり毒づいていると。

「マフィア間の抗争が、お前の目的か」

ふいに聞こえた、リボーンの声。

可愛らしい声色だが、言っている中身はハンパない。

と、考えているうちに・・頭の中が、霞んでいく。

あー・・・やっぱ、昨晚ゲームやりすぎたかなー・・・

シリアスモードをぶち壊すかのような、厘の暢気な思い。

「世界大戦・・なんてベタすぎますかねえ」

・・・ベタすぎつぞボケ。

骸にツツコミ、そして意識が朦朧とする中・・・

何故か、骸の言葉を思い出した。

『大人に失望した人間』ねえ・・・

意識が闇に、沈んだ。

数日後。

並盛中央病院の、とある病室にて。

「雲雀・・・だいじょーぶ？」

ドアを開くと、ベッドに横たわっている雲雀の姿があった。

厘はただ眠っているだけだったので、入院は無かったが（その代わりに、リボーンの強烈なキックで叩き起こされた）ツナや雲雀は勿論、獄寺、ビアンキなどは重症を負っていたため、この病院で入院しているのだ。

・・・筋肉痛が『重症』なのかは微妙だが。

「・・・」

「おいコラ。見舞いに来てやったのに、何故睨む」

厘は、ベッドの隣にある椅子に座った。

ちなみに、見舞い品は果物。・・・パイナップルはないが。

「なんか食べる？」

「・・・・・・・・」

答えが無かったので、テキトーにバスケットから林檎を取り出した。

そして、制服のポケットからピーラーを出して、剥き始める。

・・・包丁で剥いたら凄い事になるからな、H A H A H A。

「・・・・・・・・どうしてあそこにいたの」

雲雀が、ふいに口を開いた。

『あそこ』とは、黒曜ヘルシーランドのことだろう。

視線は林檎に向けたまま、答える。

「さー・・・なんででしょーね？」

雲雀は諦めたようにため息をつく。

そんな様子に、厘は言い訳するように話し始めた。

「・・・私だって心配したんだよ？相手が相手だからね」

「知り合いだったの？」

「まあ・・・いちおー」

「・・・・・・・・・・」

なんだ、その無言は。痛いじゃないか。

沈黙は流石に嫌なので、少しジョークを混ぜてみる。

「もしかして・・・妬いてる？」

『ドキヤッバキッベキッドゴッ』

・・・骨が異常にでる寸前まで殴られました。

「冗談だよ、冗談。あめりかんジョーク」

冗談も通じないのかコイツは・・・と思いながら土下座する。

なんとか許してもらったので、また林檎剥き再開。

「でも、雲雀が無事で、ホント良かったよ」

「僕をだれだと思っているんだい？」

お決まりのセリフに、苦笑する。

でも・・・

私・・・『滝本^{イレギュラー}厘』がいる限り、原作通りには進まない。

運が悪ければ、原作の内容も変わってしまう事もあるのだ。

「・・・ふう」

額の汗をふく。

林檎をむき終わったので、棚から皿をだし、そこに林檎をのせた。

「・・・・・・・・何だい、コレは？」

雲雀は、皿の上ののった異様な物体Xを指差し、厘に問いかける。

「え、林檎ですが・・・・・・・・なにか問題でも？」

・・・・・・・・。

とりあえず、ぶっ飛ばされた。

一ヵ月後。

野球場の、とある観覧席にて。

厘は、リボーンの隣に座って、野球を観戦していた。

山本が飛ばすホームラン級のボールを眺めながら、リボーンは厘に話しかける。

「厘」

「なに、リボーン？」

近くの売店で買ってきた、炭酸水をストローで吸い上げながら、厘も答える。

厘の手にあるコップの中には、もう氷しかない。

だが、厘はそれを一生懸命吸い上げて、ズゴズゴと音を立てる。

「骸とは、面識あったのか？」

一瞬、ズゴズゴが止まるが・・・また、鳴り始める。

「一回だけね」

ズゴズゴ。

「迷って黒曜ヘルシーランドに行っちゃったことがあって」

ズゴズゴ・・・ズゴズゴズゴ。

「その時に骸と会ったんだ」

ズズズズズゴー。

「意地汚エぞ」

「あう」

ばしっととられるコップ。うう、まだちよつと残ってたのに。

うなだれる私に、リボーンは、容赦なく告げた。

「おめエは一体、何モンなんだ？」

「は？」

単刀直入っすね。だが、言いたい事は全くわかりませんが。

リボーンは、わかりやすい説明とともにもう一度繰り返す。

「お前は、まず戸籍がねエ。一般人ならもってる戸籍がな」

「はあ」

・・神羅め。なぜ作らなかった。すっげーめんどい事態になってるんだが。

「そして・・・、百発百中といわれる、フウ太のランキングブックにもお前は映ってねェんだ。お前は、女だが・・・並中のケンカランキングでは絶対10番以内に入っているハズだからな」

それは知らなかった。やっぱり、イレギュラーの私は映らないのか。

ほオ、と納得する私に、リボーンは言い放つ。

「だから、考えられるのは、唯一つ。ツナを狙ってる、とな」

「・・・・・・・・」

私はトリップ者なんですよ、といえば簡単だが、それだと精神病院に連れて行かれそうなのでやめておく。

「私が、そんな人間に見える？人を殺せると思う？」

今度は私がリボーンにたずねる。

ウラの人間であるリボーンならわかると思うのだが。私がソツチには手を出していない事くらい。

「ツナ達と一緒にいると、それはそれで楽しいし、満足してるよ。」

第一、私には、ツナを生かす理由があっても、殺す理由がない」

にこっと笑う厘。

「それでも、私は信用ならない？」

リボーンは、黙考。そして数分開けて、笑った。

「個人的には、オレはお前を信用してるぞ、なかなか面白エ人だしな」

・・・ほめられているのだろうか？

「————ただし」

懷から、黒光りする拳銃を取り出すリボーン。

「もし妙な真似をしたら・・・容赦しねエからな」

私は苦笑し、ホールドアップ両手を上に上げる。

「わかってるって」

その時・・・

異様な気配。

振り返ると、5歳くらいの男の子と、母親らしき女性が手をつないで通り過ぎていく。

その男の子に・・・リボーンは、母親に聞こえないように、呟いた。

「1人はさみしそーだな。またいつでも相手になってやるぞ」

厘も、同じように呟いた。

「次は7倍返しね」

・・・増えているのは、気にしないでおう。

「また・・・いずれ・・・」

男の子の右目は、赤く染まっていた。

そして、遠ざかっていく、親子。

「さて・・・と」

また前を向いて、にっこり笑う私。

「これ、どうしよっか」

目の前は、顔なじみのメンバーの、喧騒で素晴らしいことになっていた。

そして――――

皆はまた、いつもの『日常』へ戻っていく。

そう、長く続きはしない、日常に。

No. 27 LET、S 終わりとそれから・・・です。ハイ。(後書き)

次はリング戦ですね。

ええ。

オリキャラは・・・多分、増えないと思います。

・・・考えるの、面倒だか(殴

ごほん。

その前に、「えくすとら」をやるかもしれません。

詳しい事は、考えてません。

さてと。ブーイングされる前に去っておきます。それでは、あうふ、ういたぜん。

No. 28 LET、S嵐の到来!!

やー、秋も深まりましたなー。

厘は、並中の屋上のフェンスに背を預け、呆っとしていた。

秋風は彼女の体を通り抜け、輝きながら解ける糸のように消える。

今日は日曜日。教師と補習組以外は、この学校に人影はない。

雲雀は、給水塔の上に寝転び、気持ちよそうに昼寝を満喫中。

小さく上下する雲雀の肩に乗っている黄色いカタマリ。

一ヶ月ほど前に起きた黒曜戦でいつの間にか雲雀が手懷けた、ヒバードである。

ちなみに私^{ワタクシ}、そんなヒバードの世話係をしている。

肉体的労働が多い風紀委員の仕事（雲雀との会話も含む）で、ヒバードは唯一の癒しなのだ。

ぽかぽかとする日の光に、まぶたがだんだんと重くなってくる。

眠気に抵抗しないまま、厘の意識は――――

「？」

肩に、温かいモノがのった気がする。

目を開くと、肩にはヒバードが乗っていた。

雲雀は給水塔から飛び降り、屋上の出口へと歩いている。

「どこかしたの？」

雲雀が、用も無く昼寝を中断するなんて珍しいので、尋ねてみる。

「・・・？み殺してくる」

後ろを振り向くと、納得。校門らへんで、100人ほどの男達が立っていた。

雲雀に下克上でもしにきたのだろうか。

それぞれに、金属バッドやら、折りたたみ式の椅子やら。いやー、物騒ですなあー。

1対100の、弱いもの虐めを観戦しようと、厘はスカートのポケットから望遠鏡を取り出す。

数分後。

結果は・・・記述はしなくても良いだろう。

今日も並盛市内の病院は、大繁盛です。

午後の並盛町。

人々の賑やかな喧騒の中に、ひととき賑やかな大所帯。

「だからアホ共は呼ぶなっていったのに」

「アホってだれですか！」

獄寺の呟きに、つつかかるハル。

おなじみの、原作の登場人物達である。
レギュラー

「ハルちゃん、とりあえず落ち着こう」

それらに、イレギュラーの厘を加えて、ぞろぞろと道の真ん中を歩く御一行。

ツナに視線をやると・・・京子ちゃんを見て、頬を紅潮させている。

「（ツナ、ツナ）」

小声でツナを小突く。

「（?厘、どうした?）」

それに答えるツナに、アドバイスを送ろう。

「（ツナ……鼻の下伸びてる）」

「（ハッ／＼／＼）」

京子ちゃんをみて、何を考えていたのやら。慌てて無表情になるツナに、アッパークットをお見舞いしてやろうかな？

と、バイオレンス要素たっぷりの考えをしていると、ある建物が見える。

色とりどりに光るネオンは、ゲームセンターという文字を彩っていた。

厘たち御一行は、その建物の中へ、吸い込まれるように入っていく。

「ほい、獄寺、山本」

「お、サンキュー」

「・・・ケツ」

獄寺と山本と自分の分、計3つのサイダーを自動販売機で買い、二人に渡す。

・・・二人とも、お金はゲーセンで勝負し、使い果たしたらしい。
子供かお前等は。

「あ、ちなみに二人とも。レートは2.5だからヨロシク」

「ボるなあ」

厘の言葉に、苦笑いする山本。ちなみにサイダーは150円だ。

「取れるところからありったけとるのサ、厘チャンは」

へっへっへ、と高笑いする厘。まるで悪徳会社のシャチョーさんだ。

「ケツだれが払うかよ」

獄寺は、ぶつぶつと呟きながらペットボトルに口をつけた。

「・・・・・・（プチッ）」

イラッときた厘。バックの中から、ソレ・・・・プリクラのシールを取り出す。

そこに写っているのは、獄寺・山本・ツナ・厘の4人組。

「さあ獄寺クン。これを学校にばら撒かれなくなったら、今の言葉撤回しなさいな」

あろうことか、獄寺は満面の笑みで写っている。

普段はこんな顔しない獄寺の写真は、獄寺ファンクラブにとってはレア中のレアだろう。

「な！てめー卑怯だぞ！！」

がたと椅子から立ち上がる獄寺。日常と変わらぬ光景だ。

そう・・・日常。当たり前、『いつも』。

しかし、この世界にはもう、日常は訪れない。

今だって・・・

日常が、終わりを告げようとしているのだから。

ド――ン

ドガ――ン

そこにいた人々全員が、動きを、止める。

ドゴオツツツ！！！！！！！！

建物が、崩れる音。

地面が、揺れる音。

周りの人々は、数秒固まり、そして悲鳴を上げながら逃げて行く。

音のした方は、煙で霞んでよく見えない。

だが、そこから飛び出した、少年のシルエットは、

近くにいた少年——ツナの体の上に、落ちる。

「大丈夫か、ツナ!!」

「十代目——!!」

ツナの右腕（自称）は、逃げる人々の波を逆らい、敬愛する少年の下に駆け寄っていく。

山本も、慌てて走り出す。

「嵐、到来……か」

厘も少しも躊躇せず、後に続いた。

No. 28 LET、S嵐の到来!! (後書き)

やー夏休みですね!

まあ、部活で忙しくなりますが、更新は少しは早くなるはずです。

ハア・・・部活か・・・この炎天下で・・・

暑さにはあまり慣れてなくて・・・去年まで比較的涼しいところに住んでたので・・・最高気温、38度? お風呂の温度なんかですかね? みたいな。

っと、忘れてた。

えーと、この小説に出てくる主人公、滝本厘を、睡蓮 鏡華サマと、シン・シャネット様に描いて頂きました!!

絵心のない私には、お二人の絵を見ると、自分が惨めに思えてきます・・・。

ぜひぜひ、「みてみん」でお二方の描く厘ちゃんをご覧になつては? それでは、また! あうふ・ういたぜん!!!!

No. 29 LET、S嵐の到来 PART2!?

急いで、ツナに駆け寄る。

「いてててて・・・」

ツナは顔をしかめているが、さらっさらヘアー（後にいうバジル）の少年の体重が軽かったのか、たいした怪我はなさそうだ。

チツ・・・心配して損した。↑オイ

でもまあ・・・リボーンを振り返って「何事？」と、聞いてみる。勿論演技だが。

リボーンは、厘の問いに答えず、エスプレッソを片手に呟いた。

「なんでアイツがここにいるんだ？」

はいはい、それはリングを届けにきたからです。

と、暢気に心の中で呟いていると、

「うゝおおおい!!」

誠にうっせー声が、頭上から聞こえてきた。

上を見ると、白髪・・・ゴホン、白銀の長髪の男が、剣を片手に見下ろしている。

「邪魔するカスはたたっ斬るぞお!!」

そう言うと、ロン毛ヤロー（失礼）は、剣を構えて大きく振った。

何もない、目の前の空気に向かって――――

「？」

なにをしたかったのだろうか？と眉を顰めたその刹那。

アスファルトの地面が、切り裂かれるように、悲痛な音を立てた。

「爆・・・弾・・・？」

「ひいっ何なのあの人！？ すんげーやばいよ!」

ツナが鼻水を垂らしながら叫ぶ。鏡で自分の顔を見せてやりたい。

ツナより（精神的に）遥かに大人のリボーンは、京子ちゃんの肩を突いて、冷静に言う。

「女、子供は避難するぞ」

流石、一流のヒットマン。銃刀法違反のトコロをわざわざ一般人に見せるハズもない。

「厘。お前も手伝え」

「はいはい」

私だって、（一応）女のコ。喜んで避難します。

・・・でも、「手伝え」って何？

と首をかしげながらも、京子ちゃん・ランボ・イーピン・ハルと共に少し離れた建物へと入る。

既に、そこにはざっと十数人が避難していた。皆、考える事は結局

同じだ。

「ねえリボーン、どのくらいの時間避難していたらいいのか・・・
って!？」

いつの間にかリボーンは、（どこにあったのかは不明な）コスプレ
に着替えていた。

「リボーン、そのコスプレは・・・」

「『植木』だ」

「まんまだよね!?! 驚くべき、そのまんまだよね!?! ちっとは創意
工夫とかしようよ!?!」

「お気に入りのコスプレだぞ」

「THE☆リボーン美学!! 理解不能です!! って、じゃなくてで
すねえ!!」

私達、どれくらいの間避難してたら安全なのかって聞いてるんすけ
ど、きーてますかー!!」

リボーンのペースに溜息をつきながら、大声で問いかける。

そんな厘の姿に、リボーンはいつもの笑みで、

んでまた、あの（ハル流にいうと「ですとろい」系の）場所に戻ってきて……

「リボーン、私も女のコなんだけどなあ」

……現在に至る。

「厘、お前————女だったのか？」

「おいコラぶっ飛ばすぞ」

溜めておいてなんだその失礼なワードは。

リボーンと少し話しながら、自動販売機付近、つまりはロン毛y・ゴホン、スクアーロの死角の地点で息を潜めていた。

地面には、獄寺と山本が倒れている。

厘達が避難してから、かなり時間が経っていた……ようだ。

スクアールは、身動き1つしない獄寺に、剣を大きく振りかぶるが・

ガキッという、鈍い金属音。

今にも倒れてしまいそうなほど、息切れしているバジルが、剣を受け止めている。

直後、ブーメランっぽい武器と、剣が交じり合っている・・・

らしい。が・・・速すぎてなんも見えないのは私だけでせうか。

「ひいつ、ど・・・どーしよー!! やばいよー!!」

近くにいたツナが、体を震わせながら叫んだ。

そんなツナに、

ドゴオッ

「ふっ！..?」

後ろからこーっそり忍び寄って、正拳突きをお見舞いしてやる。

「いふっいふっ……な、なにすんだよ、厘！！！」

厘の、華奢な拳から放たれたとは思えない、強い威力に思わず地面に倒れこむツナ。

「いやゝ、護身術って大事だと思わない？」

「今ココで関係ないよね！？つかオレ、サンドバック！！？」

即答で返されました。

「ツナ、君も、イタリアのマフィアのボス（仮）になるヤツなんですよ？」

あのロン毛ヤローを倒してきなよ。応援してるからさっ。ふぁいとっ」

「めっさ他人事っぽく言われました！しかもノリ軽い！！！！部活の練習試合かよ！！」

厘の言葉に、2倍ほど威勢よく言い返すツナ。

その頭に、ぽふっと降ってきた……手袋。

それと共に降って来た、可愛い声。

「手相見せるときも、夏のうだるような暑い日も、その手袋はつけとけ」

「な、おまえ!!」

「リボン、ソレ、周りに溶け合っていない・・・」

『植木』となったりリボンに、それぞれ違うリアクションを見せる二人。

その時、バジルが地面に擦りながら倒れた。

苦痛に歪んだその顔に、スクアーロは剣を振りかぶるが・・・

「復リ・・・活ボン!!!!」

いつの間にか死ぬ気になっていたツナに、その腕を掴まれる。

「そーいや、厘。行かないのか？」

「え、は？何処に？」

「いや、おめーのような性格なら、すぐにあのいけ好かないロン毛ヤローを倒しに行くと思ってたんだがな・・・」

「フン、バカを言うでない」

そういった途端、頭にちっこいが威力バツグンの足が飛んできた。

「あう・・・や、だって、私じゃ敵わないもん、あのヒトには」

涙目で説明する厘。

私だって、あの雲雀恭弥率いる風紀委員の一員。

戦闘慣れはしているが・・・

マンガだから知っている、ていうところじゃない。

戦闘慣れしている動物は、一瞬で相手と自分の力の差がわかるらしい。

私もそれと同じように、一瞬で戦闘の勝敗が分かる。

「私の力じゃ、あのヒトを倒せない。負けが分かっている戦いに、わざわざ挑む必要がない・・・そうでしょ、リボーン」

「ああ、100点だ」

満足げに頷くりボーン。

「まあ、アイツらは、ロン毛ヤローとの力量の差に気づけなかったみてーだがな」

つぶらな瞳には、気を失って倒れている山本・獄寺がいた。

そんな話をしていると、ツナの死ぬ気タイム☆が終わり、

「うゝおゝおゝい・・・いつまで逃げる気だあ!？」

スクアールが、剣のどっかから出てきた火薬を、ツナに向かって投げつける。

「ツナッ!!」

慌てて走り出そうとしたが、ブーメランのような形をしたモノが飛んできて、

飛んできた方向を見ると、バジルがいた。

バジルの体はボロボロで。今にも崩れてしまいそうで。

その時、バジルのズボンのポケットから、箱が落ちた。

これが、7つの入ったリングなのかな・・・

と思ったが、なんだかサイズが違う。

その箱は、一つのリング分くらいしかない。

原作には、こんなの無かったはず・・・

まさか。

まさか・
・
・
ねえ。

No. 29 LET、S嵐の到来 PART2!?(後書き)

・・・約、一ヶ月くらい更新してませんね・・・スミマセン。

今頃、アクセス解析はどうなっているのでしょうか・・・？

・・・怖くて見られません。かれこれ4ヶ月ほど。

きつと、ホントに少ないんだろー・・・昨日のアクセス数、1, 2人だろーな・・・なんて。

現実は見ないようにしているんです。かなしーから。

夏休み中、全く更新できませんでしたねー・・・

属性について、アレコレ考えているのです。

・・・いまだに思いつきませんが。だれかあいであぷりーず(殴

それでは、また。

No. 30 LET、Sリング!?

「ちょっと・・・厘サン?なんでそんなにバックが黒いんですかね?」

「ふふふ・・・なんででしょうね?神羅クン?」

時は流れ、厘の自宅には人影が2つあった。

厘は腕組みをして、もう一つの影に話しかける。

「神羅クン、私が怒っている理由、分かるかな？」

下を向いているので分かりにくいだが、厘は笑っている。とびきりの笑顔で。

しかし、それは喜んでいるのではない。寧ろ……

「さあ……何でしょうか全く分かりませんね厘サン」

ブチッッッ

何かが、切れた。

具体的に言うなら、人の血管が……

「ちゃんと説明しろや神羅あ————ッッ！！！！！」

「スミマセンでした————ッッ!!!!!!!!!!」

あの後、一言で言えば・・・

ディーノさん来てスクアールに7つのリングが入った（偽物の）箱を取られて廃業になった病院で（本物の）イレギュラーなリング渡されそうになったのでツナと一緒に全速力で逃げて帰りましたテヘ☆である。

「んでね、神羅クン。バジル君がなんか原作には出てこないリング持ってたんだけど、あれは一体どういうことか、説明してくれるととっても有難いんだけどなあ」

ゴキヤツバキツボコツベキヤツという音はあえてカットしておいて、

神羅に問う。

「えーとですね・・・一から説明しますとですね厘サン・・・」

神羅の顔は、引き攣りすぎて逆に怖い。

「厘サンには、リングの波動が流れてまして・・・」

「・・・・・・・・ふうん♪」

「その波動は、実はボンゴレリングにも昔あって・・・」

「・・・・・・・・へえ♪」

「そしてたまたまオレが、その行方不明になってたボンゴレリングを発見してしまって・・・」

「・・・・・・・・ほうほう」

「んで、そのリングの守護者を厘サンにしようかなあーと思いましたが・・・」

「神羅クン」

「何ですかね厘サン」

厘は、笑顔だ。弾けんばかりの笑顔だ。

そして、その笑顔のまま、厘は息を吸って・・・吐いた。

「いっぺん死んで見るか神羅あ——ツツツ！！！」

「スミマセンでした——ツツ！！！！！！！！！」

「んで？私に流れているのは何の波動なワケ？」

やっどどっかーんばっこーんという粛清が終わり、厘は再び神羅から話を聞く。

・・・神羅の顔は、恐怖で歪んでいたが、人間気にしないのが一番だ。

「・・・えーとですね、『^{クウ}空』の波動って言うのですが・・・」

「く？」

「くじゃない。くうね、くう」

「で、どんなの？」

「何もない由に、全てを侵食する空、だそうだ」

「・・・カッケェ!!」

目をきらきらさせる厘に・・・神羅はため息をついた。子供かお前は。

その時、

ピンポーン。

インターホンが鳴る。

「ん、誰だ？」

神羅は姿を消し、部屋には私だけ。

窓から見てみると、家の前にいたのは・・・

「り、リポーン・・・」

嫌な予感がしたので、居留守、というコトにしてインターホンを無視する。

ピンポーン

ピンポーン

ピンポーン

ピンポーン

「諦めてよねリボーン」

確かに、私は原作に触れるためにこの世界へやっていたのだが。

戦いには巻き込まれなかったッ!!!

だってイタイし。血とか無理だし。↑オイ

ヴァリアー編からは、傍観者チックになろうと思ってたんだけど・
ま、都合がいいのは分かってるけどさ。

ハア、と溜息をつく。

その時、カーディガンのポケットに入っていたケータイが、ぶるぶると震えだす。

「・・・電話？」

ピッとボタンを押し、ケータイを耳に当てる。

すると、そこに聞こえてきたのは、

『ちやおっす。厘、いるんだろ？』

「リボーンッ！！？」

可愛らしい声色は、間違えなく彼の声。

ダラダラダラダラと汗が吹き出る。

「な、なんの用かな？リボーン君」

『とりあえず玄関を開けろ』

有無を言わせない内容。思わず黙り込む。

そんな厘に対して、リボーンは。

『じゃあ……』

―――強行突破だ』

「ッ！！？」

その途端。

ドゴォツという鈍い音が響き……

「な、な、何したのかなリボン君？」

ヤベエ。汗が止まらない。果てしなく流れそうだ。

『玄関のドアを壊した』

「普通に言うんじゃねーよオオオオオオオオ!!!!!!」

そして、またさらにドゴッ!という何かが壊れる音。

・・・部屋の薄い木で作られたドアがバタンッと床に倒れる。

そして見えてきたのは・・・

「ちやおっす」

「ちゃ・・・ちやおっす・・・」

赤ん坊の姿をした、小さい悪魔で・・・。

その悪魔が去ったときに私の手にあったのは、

空のリングという、イレギュラーなリングで・・・。

つか、ドアの弁償代、払ってくれるんだろうなりボーン・・・？

物語、という名の歯車は、ゆっくりと動き出す。

その歯車は、止まらない。

少女が、どれだけ叫んでも。

日常を望んだ少女を裏切り、

少女を呑み込み、その物語は、

朽ちることなく廻っていく。

果てることなく廻っていく。

No. 30 LET、Sリング!?(後書き)

・・・急いで作りました・・・

クオリティー? H A H A H A。なにソレ、おいしーんですか?

骸っちサマー!! あいでいあ有難うございました!!

N o . 3 0 . 5 L E T , S えくすとら! ? ~ セーシンセカイ ~ (前書き)

更新遅れてすみマセンでしたああああアアアア!!!!!!

はい、マジですみません (泣)

活動報告に書いた通り、授業参観の代休日なんで更新いたしました。

でも、一ヶ月ぶりっつーのにやっぱりグダグダです。長いクセに。

それでもいいーという、心の超広い御方!!

下へのスクロールをどうぞ!! なのです。

N. 30. 5 LET、Sえくすとら!?!セーシンセカイ

一陣の風が吹く。

透き通るような湖が、静かに波紋を広げて消えていく。

木は、葉と葉を擦り合わせて小さな音を立てた。

「う・・・」

厩はそんな場所で、小さく呻く。

「ココ、どこよ・・・?」

眩きが、風に乗って流れていく。

この歳で迷子は悲しい。とてつもなく悲しい。そしてイタすぎる。

思い当たるのはただ一つ。

「着地失敗・・・ってヤツですかあ？」

あははーと無理やり笑ってみる。

「あははーあははははー・・・」

アレ？目の前がしょっぱいモノで霞んで見えるやー・・・

と1人で涙ぐんでいると、

「厘・・・ですか？」

背後から、よく通る・・・そして聞き覚えのある男性の声が聞こえて

きた。

まさか・・

ゆっくりと後ろを振り返ると、

「骸・・？」

相変わらずの笑みを浮かべ、藍色の独特な髪型をした六道 骸がいた。

「お久しぶりですね、厘」

沈黙。そして、1、2、3秒。

厘の拳に、チカラが籠る。

今回の着地失敗は、いつものと少し経路が違う。

神羅から貰ったあのテレポート用のカプセル。

アレは、使用していくとだんだんカプセルが無くてもテレポート出来る様になるらしい。

・・・なんつーお節介な。

だが、今の私には到底扱えず、10割中8割が着地失敗してしまう。

しかも厄介な事にその能力は暴走する事があり、イキナリ変な場所に飛ばされてしまうのだ。

その能力の暴走が、今回の原因・・・らしい。

ここは、骸が言うには「精神世界」というモノだそうだ。

「こんなに深くまで潜れる人は、中々いませんよ」とか褒めたつもりで言っていたが、とっても嬉しくないのは何故だろう。

と、回想をし終わると、厘と骸はハァ・・・と同時に溜め息をついた。ちなみに、骸はこの精神世界を「散歩」していたらしく、不運な事にばったりと出会ってしまったのだ。

「復讐者^{ウィ・ン・テイ・チエ}とかいう牢獄に入れられて能力取り上げられてるって聞いたから私にもかなり勝機があると思ったのよでも最大の誤算は骸サンは素手の勝負でも超得意だったコトね！」

我ながらスゴい肺活量でヤケクソ気味に一気にまくしたてるが、虚しくなってきたのもう一度嘆息した。

厘は再会直後、すぐさま骸の顔面に右ストレートを放ったのだ。

そうして、ぽかすかぽかすかーっと厘が一方的に乱闘を始めた。

厘と骸の力は、能力を取り上げられているクセに互角だった・・・

チッ↑オイ

「久々の再会だというのに、何ですかその態度は・・・一体僕が何したというのですか？」

そんな骸の呟きに対して、

「泣いて許しを乞いて死ねばいいと思うようなコトをしたよ☆」

「大変ですね！しかも笑顔で言わないでください！！！」

「・・・ったく。アンタ、どれだけこの滝本厘に話し合う為に努力を積み重ねている男子が何人いると思ってるの？馴れなれしくツッコムんじゃねーよこのクソが」

「自覚って、ありますか？」

「やーねー。冗談に決まってるじゃない・・・最後のトコ意外（ボソッ）」

「？ッ！！？」

女って怖いね♪恨みを全て思い出のダンスにしまってるんだからさ☆

「それはそうと、どうして厘はパジャマ姿なのですか？」

ソコ食いつくなよ、とか内心舌打ちしながらあいまいに答える。

「・・・ああ・・・まあいろいろあってね・・・」

今回は、厘が睡眠中に無意識に暴走したらしい。なので当然寝間着姿なのだ。

しかし、骸はパジャマ姿だけ気になっていたのではないらしい。

「それでもどうして・・・」

パステル色彩の子供っぽい柄のパジャマなのですか？
「」

「——————ツツツ！！！？？」

言葉にならないコトバが厘の口から漏れる。

ちなみに、今の厘の服装は可愛いカエルの絵がプリントされた・・・確かに子供向けっぽいパジャマ。

中学2年の生徒にしては、少しイタすぎる。

「ひ、人の趣味だろうッ！ほっといってちょーだい！！」

「いや、趣味というよりも、年齢的に駄目かと・・・」

厘がやや赤面しながら反論するが、骸は面白そうに追求する。

「意外にお子様趣味なんですね、厘は」

「持っていない！お、お子様趣味なんて、持っていない！！」

一生懸命否定する厘。だが、厘の住むマンションの部屋の一室は、そこはお子様ブランド・・・ゴホン、可愛い小物だけで統一されている。

それから、自分の趣味に散々からかわれた厘は、ゼエハア・・・と荒い息をしながら頑張って違う話題に持っていくとする。

「そッ、そーいや骸もボンゴレの守護者の仲間になったんだって？」

「ああ・・・その事ですか・・・」

ようやく次の話に行けた、とホッとする厘だが、面白くなさそうに答える骸に気づかない。

「霧の守護者・・・だっけ？」

「ええ。あのボンゴレの体に乗っ取るのに都合が良いため、でもあります・・・」

リボーンからは、特別に守護者のことを教えてもらっているので、知っていても特に怪しまれない。

まア、原作でここら辺は何回も読み直したので知っているが。

骸もどうい手を使ったのかは分からないが、厘が『空』の守護者ということを知っているらしい。

「しかし骸サン。アンタは牢獄中の水槽でぶくぶくいつてるんじゃないの？」

「それは喧嘩を売っているのでしょうか？・・・精神がシンクロしやすい、特異な性質を持ったある少女を使ったんですよ」

「使ったっていう表現やめよーよ。怖いわ・・・」

少女、というのはクロームの事だろう・・・とか思いながら言う。

「怖い、ですか・・・」

「?」

骸はそう言って、急に黙ってしまう。

どうかしたのだろうか？

「どーしたの？骸。死期が近いワケ？そんなら心から喜ぶけど」

「失礼ですね・・・」

それより、僕と君はやはり同じ種類の人間ではないのかもしれない」

微笑を浮かべて。骸が呟く。

「どーゆー事？」

前に会った時は、「同じ種類の人間」とか言っていたが。

矛盾していないか？

厘の質問を受け、ぽつり、ぽつり、と語る骸。

「僕は、人間は利用『するか』利用『されるか』の、2種類しかないと考えています。」

今回の場合は、僕が少女を利用し、少女は僕に利用される、それだ

けのコトです。

その考えは、自分の経験した過去が礎が元となっている。

しかし、君はそれは怖いと言った、

それは僕と厘の、住んでいる世界が違うことを表している・・・それ
れに、」

一拍置いて、骸は言葉を紡ぎだす。

「厘は、僕にとって眩し過ぎるんです」

厘の綺麗な蒼い瞳も、

厘の弾けんばかりの笑顔も、

厘の屈託のない笑い声も、

闇^{ジブン}にとっては、『光^{リン}』は眩しすぎる、と。

骸は言葉を紡いでいく。

厘はソレを聞き、驚いたように目を見開いたが、

「・・・違うよ」

首を振る。悲しそうに、微笑みながら。

「私は、そんなデキた人間でも、善人でもないよ」

「実はね」と厘は今の微笑みのまま話し出す。

「骸を初めて見て、話して・・・ちょっとだけ、私と似てるって思ったの」

そう、私と骸は良く似ている。

経験も考えも違うけれど、でも根っこの部分は、私と、とってもとっても似ている。

「だって、」

だって、さ。

「私も、アンタと同じ様に――――」

私を拒絶したモノを、壊しちゃったから・・・」

その言葉に含まれた感情は、何も無く。

ただ、厘の笑顔には、著しい歪みと濁りがあった。

ゾッと、骸の背筋が凍る。

色を失い、視界はモノクロになる。

廃墟で、初めて会った厘の第一印象は「無邪気」だった。

それは、自分の進めていた計画の捨て駒にしようと思う程に。

でも、今は違う。無邪気、なんかじゃない。

自分は、目の前でニコニコと笑う少女が怖い。

滝本厘、という存在が、とてつもなく不気味で――――

「・・・ふわぁ」

厘の欠伸。

色が戻る。少女にも、いつもと変わらぬ活発さがあった。

「眠い・・・じゃーそろそろ私、帰るわー」

ゲームしすぎて超眠いのよーとぶつぶつ呟く。

お肌はぼろぼろにならないわよ、なんせ私まだ若いし、と、気楽そうにいう少女は、先ほどとはまるで別人の、正しく「無邪気」だった。

「ん、そーだ。骸、帰り方教えてくれない？なんせ私、今迷子のコだからわかんない」

たはは、と頭を掻いて笑う厘。

呪縛から解けた骸は、

「仕方ないですね・・・僕がいなかったら、どうするつもりだったんですか？」

「まアそんな嬉しそうに言わないの★」

「いえ、ココに来てしまったという後悔という感情を込めてますが、気づいていらっしゃらないでしょうか」

「うふふっ、気づいていつてるに決まってんじゃない♪」

「悪魔ですね、貴女は」

そんな厘の姿を見て、薄く笑うことができた。

それから説明で元の場所へ戻り方を教えてもらった後、

「じゃあ、近い内に会えそうで良かったよ・・」

厘は儚い笑顔でそう言って、ゆらゆらと姿が揺れていく。

そしてぼんやりという光に包まれ、

「またね」

風が吹く。

その風にかき消されて、厘の姿は消えてしまった。

「クフフ・・やはり彼女は面白い」

髪や服が靡く。

あのととき感じた感覚は、一体なんだったのか。

まだ、自分は滝本厘をよく知らない。

それは、彼女が笑顔で、必死に隠そうとしているから。

彼女は、この世界に、この世界に人物に線を引いている。

まるでその線を越えたら、自分ではなくなってしまうかのように。

まるで、この世界以外に本当の居るべきところがある様に――――

「クフフ・・いつか、必ず本当の事を暴いてやりますよ、滝本厘」

不敵に笑う骸。

そして、彼も冷たい水の中に戻っていった。

No. 30. 5 LET、Sえくすとら!?!? ～セーシンセカイ～ (後書き)

以上、グダグダの天才★音無 ソラでした。

・ ・ 見捨てないでください。

それより、リボーンのマンガが捨てられちゃったんです!!

・ ・ 部屋、片付けなかったカラ。

どーすんだよこのクソツたれ、とか思いながらもi pod (たっち、です) に音声のみのアニメを入れて、それを元に執筆してます (涙

むなしーですよ、そりゃ。

とゆー事で、今から古本屋で買いますよ!

それでは、(愛想尽かされなければ) また・・・

No. 31 LET、S御対面 Part 1!?

骸と厘が再会してから数日後。

平和な並盛町の夜の闇に、イタリアの暗殺者達の影が紛れる。

それは、これから始まる戦いの始まりを意味していた。

並盛町の静まり返った住宅街。空は、オレンジと紺が混ざった様な、そんな色。

周りの住民達は、もう家の中。今道を歩いているのは、たった二つの影だけ・・・

「なーんかなあ・・・」

はぁーっと盛大にため息をつく厘は、かったるそうに歩を進めていく。

ちなみに厘の格好は、薄手の黒いジャケットに白いワンピース、膝上のロングブーツ。

そして、視線の先にあるのは、白いレースの付いたワンピースの胸先にある、銀のチェーンに掛かったリング。

空、のリングである。

空のリングは、他の守護者のリングと違い、その指輪特有の刻印がない。

まあ、『空』のリングの元となる『空気』には、色もカタチもないので、当然といえば当然だが。

しかし、厘が気になっているのではなく、

「私、戦わないのかなあ・・・？」

『空』のリングが完成している、というコトだ。

「さーなー・・・オレもワカンネ」

隣にいた神羅は、ふわぁ、と欠伸びながらめんどくさそうに答える。

その二秒後。

グボキツと。

塀の上という狭いところを、ブーツという格好のクセに余裕で歩い

ていた厘が、

下のアスファルトを歩く神羅の頭めがけて飛び降りたのだ。

しかもそのブーツ、かなりヒールがある。

「痛ってエ！！超痛エ！！なにすんだよオイ！！」

「ついカツとなってやった。こーかいはしていない」

「それ厘が殺したように聞えるから！！オレが死んじやったように言うなよォ！反省もしてくれよォ！」

「む、失礼ね。謝ってあげてるじゃないの。感謝なさいませ」

「かなり棒読みですけど！！」

「・・・チッ」

「オイ！！」

・ ・ ・
むう。神羅も少ししかノツてくれない。

いつもだったらもっとリアクションしてくれるはず。ボケた私がイタイじゃないか↑ソコか

「悪イ」と小さく謝り、次の話題に持っていく。

「んで、どーして分かんないの？」

「そりゃーイレギュラーな滝本厘そんざいにイレギュラーな空リング。」

その二つが重なればわかんねえって」

「・・・以外に使えないのね、神様って」

ぼそつという呟きは、優しい優しい厘チャンは、神羅クンに聞えないくらいの音量。

「なんか今言ったか？」という神羅に誤魔化して、話を変える。

「・・・にしてもさア。何だよこの数は。私たちのHPを減らすのが目的なのかー？」

「だよなー。今まで大体100人くらい返り討ちしたんじゃない？」

「いやいやそれ以上じゃないー？だいぶ潰してきましたし」

にこやかに話す二人。それを壊すかのように、二人の周りを囲む黒服。

ヴァリアーの下っ端隊員だろう。

空のリングを狙っているのか、それとも30分程前に近くにいたキモクモサくムサイおっさん（訳…レヴィ）を生理的に殴ってしまっ

た報復なのか、どちらか分からないがとりあえず狙われているのだ。

・多分、狙いはリングの方。いちいちあのキモいのに構ってないだろーしな。

鋭い金属が擦れる音。

殺気はこちらに向いている。

試しに笑顔で手を振ってみたが、無視された。

残念。向こうは仲良くするつもりはないらしい。

その時、ジャケットの中にあるケータイが、ゴッ○ファザーのテーマを鳴らす。

「むむ」

通話ボタンを押すと、可愛い声が。

『よお厘。起きてるか？』

「起きてるよーリボーン。君のせいだと思うけどねーウン」

こっちは早くシャワー浴びてテレビ見たいけどね、という気持ちを隠して応答に答える。

分かんと思うが、電話主はリボーンだ。

・どっかのチキンさんのケータイを参考にしました。

『じゃあ丁度いい。アホ牛が命の危機に晒されているから、探してくれねーか?』

「うーん、無理かも♪」

リボーンをお願いを短く拒否する。

『何だって?』と殺気を少し交えるリボーン。理由を説明するのもめんどくさいが、誤解されるよりはマシだし。テキトーに説明しとこつと。

「こっちにも色々と事情があるの。さっきから後ろからの視線がやけに痛いんだ。ストーキングされてるみたいでさア・・やっぱ美人って大変ね☆」

『・・ヴァリアーか?』

「ご名答♪だけど完全スルーしないで欲しかったなあ」

そんじゃまた、と呟き、ケータイをしまう匣。

「んじゃ、レッツ戦闘。がんばりましょー」

厘が言うと、神羅はベルトから銃を取り出し。厘は、アイスピックを数十本構える。

「らじゃー」

厘や神羅の声は、気楽そうだが。

その、蒼と緑の瞳は鋭く。

血の色を覚えた手の中の武器は、重く、冷たい。

ってなワケでして。

神羅を置いて、ツナ達と合流しようと、只今塀の上を走っておりま

す☆

・・神羅にまだぷすぷすいつてる屍の後始末を任してね。

いえいえ、殺してませんヨ？手加減しましたヨ？ケームシヨなんて行きたくないし。

だが、流石にこのままだと、並盛中のフーキイーンが大変だからさ、証拠隠滅に。

目撃者の口封じも中々メンドイし。

ちなみに神羅の作業は、地面についた血をドライヤーで乾かすこと。血なんて、てんぷらの油と一緒に、凝固剤とドライヤーの熱風があれば一分程ですぐ乾く。

後は、指紋をちょいちょいっと消すだけなのだ。

と、ツナのツンツンヘアーの一部を、遠くの方で発見。

無駄に目立つよね、ツナのツンツンって。多分、間は一？くらいあんのに。

そんなしつれーな事を思いながらもダダダッとツナ達御一行へ向かって距離をつめる。

そして、

「やほーツナ」

「うえええ！？厘！？」

「・・・何その幽霊が出たみたいな顔して」

「え、オレ、そんな顔してた！？」

「してましたー。とってもしてましたー」

フンツと機嫌を損ねた様子でそっぽ向く厘。

その様子をみたツナは罪悪感よりも、顔色を真っ青に変えた。

厘と長い期間を共にしてきたツナ達だからこそ分かる。

学校では優等生の仮面を被っているが、中身は『滝本厘 取扱説明書』が物凄く欲しいほどの、メイワクな性格なのである。

ご機嫌ナナメの厘は、取り扱うのがスゴく面倒。

最近ではキレると、とりあえずツナ達にローリングソバットやらジャーマンスープレックスやらプロレスを掛け捲るというトンデモガールと変身する。

その為、ツナは滝^{バクダン}本厘^{バクハツ}をキレさせないように話題を変える。

「りっ！厘は、k、こんな時間にこんな所で何してんのさ！？も、もうすぐ、なんか危ないヴァリアーとやらが来ちゃうらしいから、

「はやく家に帰りなよ!!?」

「かなりどもってるけど、だいじょーぶ?」

いつもの厘とは思えない冷えた目でジィ・・・と見ていたが、

「つーかりボーン。言っていないの?」

「ああ。言わない方が面白そーだしな」

「ナルホド。相変わらず根性捻じ曲がっておりますわね・・・と」

リボーンの蹴りをスレスレでかわした厘は、ワンピースの下に隠しておいた、リングを取り出してほいっとツナに投げる。

「ホラ、私も『空』の守護者。ボンゴレファミリーの一員なんだよ?」

「んなー!!? 厘も守護者だったのー!??」

「ウン、そーだよー・・・・・・・・どっかの家庭教師のせいだね(ボソッ)」

おい、リボーン。無視すんな。

その時。

「こないでえ!!」

幼い子供の悲鳴が聞える。

あの声は・・

「向こうだ!」

リボーンが叫び、話すのを止めて声がした方へ走る厘達。

「助けてえ!!!!」

「ッ!? フウ太!! ランボ!! イーピン!! あぶない!!」

走って逃げていたのは、フウ太だけでなくイーピン、ランボがいた。

それを追いかける、黒服の男・・

ヴァリアーが――――

こちらと向こうの距離は10メートル。手を伸ばしても、届かない距離で。

「間に合わない!!」

ツナが叫ぶ。厘は、ワンピースに隠れている太股に巻きつけた、革のベルトから先ほどのアイスピックを取り出そうとするが、

キンッ

アイスピックが、澄んだ音を立ててアスファルトに落下した。

「ッ!」

焦りのせいか、手が震えて上手く取り出せなかったらしい。

こうしている間にも、男が武器を振り上げて――――

間に合わ――――

「がはアッ!」

「「え」」

ツナと厘の声がハモる。

だってさ。

男はが、なんかシリアスっぽく登場してきたくせに、なんか遠くへ吹っ飛んでっちゃったんだもん。

「・・・何事なんでせうか？」

つーか、この不完全燃焼なモヤモヤは一体どーなってんだ。

せっかく人がシリアスに語ってるんだから、あっさりぶち壊すんじゃないえよ。

要するに、さっきまでの約250文字は嘘っぱちだったってワケだ。

だれだ。だれだこの250文字台無しにしたヤツは。

「ボンゴレファミリー晴れの守護者にして・・・コロネロの一番弟子！ 笹川了平、推参！！！」

「お兄さん！」

「お前かよ！！！」

ムードぶち壊しの犯人、味方だった！ しかも京子ちゃんの兄貴だった！！

ビシィ！！ドガァンッ！！

「火事ッ！？バクハツ！！？」

「まったく何でアホ牛がリングを・・・っ」

「もー大丈夫だぜ」

「お前らか・・・」

更にもう二人。なんでだろう。なんで味方ばっかに邪魔されんだろう。

とか思いながら、原作を思い出す。

・・・もーすぐさっき殴ったおっさんが出てくんだったけ？

ウン、それまでちょっと懺悔しよう。先ほどの嘘っぱちの250文字、付き合わせてしまい大変申し訳ございませんでした、まる。

N o . 3 1 L E T、S 御対面 P a r t 1 ! ? (後書き)

はい。更新遅れてすみません。

一ヶ月ですね。まるまる。

しかも駄文。何でしょーか、コレ。

神様って、残酷ですよ、ハイ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6356r/>

LET`S家庭教師ヒットマン REBORNの世界へ！？

2011年11月18日05時52分発行